太平洋戦争日本海軍戦史

第 6 巻

（潜 水 艦 作 戦　其 の 2）

海 上 自 衛 隊

第6巻　目次

第1篇　第3段作戦に於ける潜水艦作戦　（その4）
（自1944年9月　至1945年2日）……1
第1章　1944年9月初頭に於ける日本潜水艦の現状……3
第2章　自1944年9月上旬至1944年10月上旬
潜水艦作戦……6
第1節　1944年9月上旬に於ける一般情勢……6
第2節　先遣部隊以外の潜水艦の動静……6
第1項　第6潜水戦隊……6
第2項　其の他の潜水艦……6
第3節　先遣部隊の作戦計画……7
第4節　先遣部隊作戦経過の概要……8
第1項　第1潜水部隊の作戦……8
第2項　第7潜水部隊の作戦……16
第3項　1/2の作戦……19
第3章　自1944年10月中旬至1944年12月中
旬潜水艦作戦……19
第1節　1944年10月中旬に於ける情勢……19
第2節　先遣部隊以外の潜水艦の動静……22
第3節　先遣部隊の作戦計画……22
第4節　先遣部隊作戦経過の概要……23
第1項　捷1号作戦の発動……23
第2項　第1潜水部隊の非島方面進出……24
第3項　第1潜水部隊の非島東方海面の作戦……29
第4項　第1潜水部隊の北非東方海面の作戦……35
第5項　第7潜水部隊の輸送作戦……36
第6項　玄作戦……36
第4章　自1944年12月中旬至1945年2月中旬
潜水艦作戦……40

第１節　１９４４年１２月中旬に於ける情勢 …… 40
第２節　先遣部隊以外の潜水艦の動静 …… 43
第１項　第８潜水戦隊 …… 43
第２項　護衛艦隊附属潜水艦及鎮守府部隊附属潜水艦 …… 44
第３節　先遣部隊の作戦計画 …… 44
第４節　先遣部隊作戦経過の概要 …… 45
第１項　非島方面に於ける作戦 …… 45
第２項　非島方面に於ける作戦及バトリナオ作戦輸送 …… 49
第３項　第２次玄作戦 …… 51
第４項　イ１２の作戦 …… 55
第５項　第７潜水部隊の作戦 …… 55

附録
非島方面に於ける小型潜水艦（甲標的）の作戦
（自１９４４年１２月上旬　至１９４５年３月下旬） 58

第２篇　第３段作戦に於ける潜水艦作戦（その５）
（自１９４５年３月　至　終　戦） …… 61
第１章　自１９４５年２月下旬至１９４５年３月中旬
潜水艦作戦 …… 63
第１節　１９４５年２月中旬に於ける一般情勢 …… 63
第１項　一般情勢 …… 63
第２項　潜水艦関係艦隊戦時編制及兵力部署 …… 64
第２節　先遣部隊の作戦 …… 69
第１項　先遣部隊の作戦計画 …… 69
第２項　先遣部隊の作戦経過概要 …… 71
第２章　自１９４５年３月下旬至１９４５年５月下旬 …… 79
潜水艦作戦 …… 79
第１節　１９４５年３月下旬に於ける一般情勢 …… 79
第１項　一般情勢 …… 79
第２項　潜水艦関係艦隊戦時編制、兵力部署及各潜水艦の動静 …… 80
第２節　先遣部隊の作戦 …… 86
第１項　先遣部隊の作戦計画 …… 86
第２項　先遣部隊の作戦経過概要 …… 89
第３章　自１９４５年６月上旬至終戦潜水艦作戦 …… 99
第１節　１９４５年６月及７月に於ける一般情勢 …… 99
第１項　一般情勢 …… 99
第２項　潜水艦関係艦隊戦時編制及兵力部署 …… 100
第２節　先遣部隊の作戦 …… 107
第１項　先遣部隊の作戦計画 …… 107
第２項　先遣部隊の作戦経過概要 …… 110
第３節　１９４５年８月１５日における潜水艦の現状 …… 120
第１項　８月１５日現在の潜水艦関係艦隊戦時編制 …… 121
第２項　終戦時に於ける各潜水艦の所在、動静 …… 123
第３項　終戦時在籍潜水艦の其の後の状況 …… 125

第３篇　潜水艦に関する統計調査 …… 131
第１章　昭和６年度以降の潜水艦建造計画量の概要 …… 133
第１節　潜水艦建造に関係のある昭和６年度以降の海里々備補充（充実）計画の名称 …… 133
第２節　潜水艦の型の呼称 …… 134
第３節　各計画別の潜水艦建造隻数 …… 135
第４節　各計画の潜水艦建造期間 …… 136

第２章　潜水艦の太平洋戦争開戦時保有並びに戦争中の
　　増減 …… 136
　第１節　艦型別増減隻数屯数 …… 136
　第２節　年別増減隻数屯数 …… 137
　第３節　原因別喪失（除籍）隻数 …… 137
　第４節　艦別内訳 …… 138
第３章　太平洋戦争中の潜水隊編制の推移 …… 149
　第１節　隊の編制、解隊状況 …… 149
　第２節　艦の配属状況 …… 151
第４章　太平洋戦争中の潜水部隊指揮官 …… 160

第　一　篇

第三段作戦に於ける潜水艦作戦

其　の　四

（自　1944年 9月
　至　1945年 2月）

備　　考

この戦史は，元海軍大佐渋谷譲輔氏が執筆したもので
あつて，左の各巻と一連のものである。

第1段作戦に於ける潜水艦作戦の概況　（自 1941年 12月 至 1942年 4月）

第2段作戦に於ける潜水艦作戦　其の1　（自 1942年 4月 至 1942年 8月）

〃　其の2　（自 1942年 8月 至 1943年 3月）

第3段作戦に於ける潜水艦作戦　其の1　（自 1943年 3月 至 1943年 11月）

〃　其の2　（自 1943年 11月 至 1944年 3月）

〃　其の3　（自 1944年 3月 至 1944年 9月）

第1章　1944年9月初頭に於ける日本潜水艦の現状

1944年5月中旬以降聯合艦隊は，主作戦を中部太平洋以南，ニューギニア北岸に至る正面に指向し，決戦兵力を集中して米軍の進攻企図を粉砕せんとし，茲に新諸「あ」号作戦が実施された。然し，「あ」号作戦の結果は我軍にとり極めて不満足のものとなり，サイパンを失陥するに至つたが，其の他に潜水艦の多数を失つた。

「あ」号作戦に於て日本が多数の潜水艦を一挙に失つたのは，戦斗が激烈であつたことも一因であるが，主なる原因は米軍側の対潜攻撃兵器特に電波兵器が開戦後急速に進歩発達したと思われるのに拘らず，日本潜水艦は，之等兵器に対する対応策が当時極めて貧弱であつたことに起因する。而してこの対策は，当時既に中央に於て若干研究準備されていたのであるが，「あ」号作戦の重要性に鑑み，この対策を施す暇なくして，殆んど全部の潜水艦を作戦に参加せしめざるを得なかつた情勢によるものであつて，時間的余裕を与えず攻勢を継続する米軍の作戦的勝利であつたと認められる。

この為，1944年9月初頭に於ける日本潜水艦の全兵力（建造中及老朽艦を除く）は約30隻を下らずであつて，建艦直後の訓練及び輸送に対する護衛作戦並びに印度洋に於て交通破壊戦に従事していた少数の潜水艦以外は全部内地に於て対潜攻撃兵器に対する防禦施設の整備及修理と之に伴う訓練に従事しつつあつた。

当時の潜水艦関係艦隊戦時編制及び軍隊区分は次に示す通りである。

(1)　1944年9月1日現在の潜水艦関係戦時編制

区　　分	艦　船　部　隊
第6艦隊	7SS（15SS，16SS） 15SS（116SS，126，129SS，

区分		艦船部隊
第6艦隊		1559（136、138、141、144、145、153、154、155※） 3459（1177、ロ41、ロ43、ロ46、ロ47、ロ48） 110※
	第7潜水戦隊	1361、1362
	第8潜水戦隊	18、137、152※、1165、1166※ ロ113、ロ115、ロ501※
	第11潜水戦隊	長鯨 112、146、147、156、1363 1364、1365、1366、1367、ロ49 ロ50
	附属	第31潜水艦基地隊 筑紫丸
呉鎮守府部隊	呉潜水戦隊	迅鯨 1959　1121、1122、1155、1156 1157、1158、1159、1162 3359（ロ62、ロ63、ロ64、ロ67） ロ109、ロ112
	呉防備戦隊	ロ68、ロ500
横須賀鎮守府部隊		659（ロ57、ロ58、ロ59

備考　1. 艦隊戦時編制表は右の通りであるが※印の潜水艦は当時既に消息不明で実在しなかつた。
2. 第6艦隊以外の潜水艦は主として秀朽潜水艦であり、本土の防衛、他部隊との協同訓練、潜水艦補充員の養成を目的とし内海及び隷東湾方面にあつた。

(ロ)　九月上旬に於ける第六艦隊の軍隊区分

部隊		指揮官	兵力	主要任務及動静
先遣部隊	第1潜水部隊	第六艦隊司令長官 中将 三輪茂義	126、136、138 141、144、145 153、154、177 ロ41、ロ43、ロ46 ロ47 筑紫丸	被動部隊、攻略部隊 輸送船団の攻護 （内海西部で修理及訓練中）
	第7潜水部隊	第七潜水戦隊司令官 少将 大和田昇	1361、1362	漢須賀を基地として作戦輸送中
	第11潜水部隊	第11潜水戦隊司令官 少将 石崎昇	112、146、147、156 137 1363、1364、1365 1366、1367、1368 ロ49、ロ50 長鯨	内海西部にて訓練整備
南西方面部隊潜水部隊		南西方面艦隊司令長官 第8潜水戦隊司令官 少将 鬼住泊東	18 165、ロ113、ロ115	ペナンを基地とし印度洋交通破壊戦

備考　1. 137は内地にて修理のため8SSなる為11潜水部隊に編入した。
2. 先遣部隊指揮官は筑紫丸に乗艦、呉に在泊した。
3. 第7潜水部隊指揮官は横須賀潜水艦基地隊に将旗を掲げ同部隊を指揮した。
4. 第11潜水部隊指揮官は長鯨に乗艦、主として呉方面にあつて修理整備及訓練の指揮に任じた。

第2章　自1944年9月上旬 至1944年10月中旬　潜水艦作戦

第1節　1944年9月上旬に於ける一般情勢

米軍は8月末までにサイパン，テニアン等の航空基地の整備を促進して有力なる航空兵力を前進せしめ，パラオ，ハルマヘラ，非島等に対し積極的行動を開始する一方アドミラルティ，ブラウン，メジュロ，ホーランヂア等に攻略部隊を集結し，且つハルマヘラよりパラオ，非島，台湾，沖縄，九州に亘り多数の潜水艦を配し，次期進攻作戦の気配が濃厚であつた。

我聯合艦隊は機密聯合艦隊命令作第83号を以て「基地航空兵力を内地，台湾，非島方面に展開し，機動部隊の大部をリンガ，ブルネー方面に，先遣部隊を内海西部に夫々集結し，国防要域に於ける防備及び反抗態勢を急速強化し，敵の進攻兵力を我邀撃帯乃至其の至近に於て反覆邀滅しつつ戦力の一段の増強を待つて戦局を転換好機に転ぜんとす」る作戦方針を示した。

第2節　先遣部隊以外の潜水艦の動静

第1項，第8潜水戦隊

第8潜水戦隊の伊37は修理整備のため内地に帰還中で，内地在泊中は聖隊区分で第11潜水部隊に編入され同隊指揮官の指揮下にあつた。

他の潜水艦（伊8，ロ113，ロ115）はペナンを基地として南西方面艦隊長官の指揮下で主として印度洋及ニューギニア西部方面で作戦したが詳細は不明である。伊165に関しては第3段作戦に於ける潜水艦作戦其3既述の通。

第2項，其の他の潜水艦

呉及横須賀鎮守府部隊として配属されていた潜水艦は，ロ109，ロ112を除きいずれも旧式の第2，第3線級潜水艦であつて戦況苛烈な海域に於ける作戦には不適であり，且つ乗員も永らく第1線に於て活躍し休養を要すべき者，或は練度不充分な者が多かつた為，主として本土の防衛，他部隊との協同訓練，第1線潜水艦補充員の養成を目的とし，呉鎮守府部隊潜水艦は内海西部に，横須賀鎮守府部隊潜水艦は東京方面に於て行動していた。

第3節　先遣部隊の作戦計画

先遣部隊は聯合艦隊の作戦計画に基いて僅少なる潜水艦兵力を逐次単独に使用することを避け，敵艦隊及び攻略部隊を決戦正面に於て，他の部隊と協同邀撃し敵の進攻企図を破摧することとし次の諸点を重視した。

(イ) 全潜水艦兵力を艦隊決戦時に決戦場に集中する。

(ロ) この為に第1潜水部隊各潜水艦の戦備を急速完成する。

(ハ) 又第11潜水部隊各潜水艦の練度を速に向上して作戦可能ならしめる。

(ニ) 第1潜水部隊の兵力で戦備完成したものは引続き練度の向上を期し訓練に従事せしめる。

(ホ) 第7潜水部隊の兵力を以て太平洋各離島に対する作戦輸送を継続する。

(ヘ) 回天（特攻兵器）の潜水艦に於ける使用に関し研究，訓練を重ねる。

尚，米軍が当時直接非島攻略を企図すれば艦隊決戦は生起する算があつたが，パラオ又はハルマヘラを攻略する場合は我艦隊は決戦を避けることが予想されたので，この場合に於ける先遣部隊の作戦について予め考慮して置く必要があつた。即ち，艦隊決戦を企図しない場合は潜水艦の作戦も見合わす大方針ではあるが，パラオ又はハルマヘラに対する攻略が開始された場合は，先遣部隊の一部兵力を以て現地作戦軍と協同して之に当たる筈であつた。この為，潜水艦の集中使用の原則は崩れるので，米軍のハルマヘラ又はパラオ攻略の気配とその時機を正しく判断し，好機に投ずる潜水艦の使用について誤ることなき様留意する要があつた。

第四節　先遣部隊作戦経過の概要

第1項　第1潜水部隊の作戦

1944年9月7日パラオ方面に敵機動部隊の空襲があり，ペリリユーに対しその一部の兵力で艦砲射撃があつた．

翌8日再び来襲しパラオ及ハルマヘラ方面における米軍の次期作戦の開始を思わしめるものがあつた。

9日10日第31通信隊より放送電にて，敵の水陸両用戦車部隊タバオ地区に上陸中の旨電報があり，其の後その事実なきことが判明したが，聯合艦隊はダバオ方面に対する敵の攻略に備え「捷1号作戦警戒」（Z作電令作2793号）を令すると共に，引続き先遣部隊に対し中型潜水艦の全力とイ177の急速出撃を令した。

先遣部隊指揮官はこの命令に基き，34Sの全力（イ177，ロ41，ロ43，ロ46，ロ47）に対し，ロ41　ロ46は13，イ177，ロ47は14日，ロ43は15日に出撃準備を完了する様指令すると共に，当時内海西部に於て実施中であつた緊急工事及第31戦隊との聯合訓練を9日12日以降取止むることに決した。

翌11日聯合艦隊は昨日以後の敵情より差当りダバオに対する敵大部隊の行動なしと判断し「捷1号作戦警戒」を解きたるを以て先遣部隊指揮官も13日以後の34Sの出撃を一時中止した。但し非島方面の情勢は依然逼迫したものがあるので各潜水艦は整備完了次第非島方面に進出せしめることを予定した。

34Sの各艦に対しては前記の如く非島方面の情勢によつては作戦せしめることに予定したが，15Sの各艦に対しては依然として先遣部隊作戦計画に従い呉を基地とし修理整備と練度の向上に専念せしめた。

なお，136，138，141，144，146に対しては回天の搭載装置の整備に着手した。

又，15S各艦は10日中旬迄瀬戸内海方面にあり作戦には従

事しなかつた。

9月12，13日両日は前日に引続き西カロリン諸島及中非方面に敵機動部隊の執拗な空襲があり，中非方面展開中の我陸上航空兵力及セブ方面在泊艦船は特に被害が甚大であつた。

14日も概ね前日と同様の状況であつたが，聯合艦隊は全軍に対し「敵情切迫せるに付き捷号作戦警戒を発令せらるることあるべき」旨指示すると同時に先遣部隊に対し「34Sの緊急工事は極力繰り上ぐべき」旨指示した。

9月15日敵の非島，西カロリン，モロタイ方面に対する作戦は益々活潑となつたが当時先遣部隊で知り得た敵情は左の通りであつた。

(イ)　米軍機動部隊の位置（カ1図参照）

第1群　サン，オーガスチン岬の100度450浬

第2群　サン，オーガスチン岬の250度400浬

（セレベス海北部）

(ロ)　パラオ附近の敵全兵力は空母10，戦艦3，駆逐艦20，輸送船50程度にて輸送船は続々増加中

(ハ)　モロタイ附近空母1，巡洋艦8，輸送船100を含む部隊．

右の如き情勢に於て聯合艦隊は電令作第305号を以て左の作戦を指令した。

(イ)　敵は大挙ハルマヘラ及パラオ方面に来襲せり．

(ロ)　所在の陸上兵力は全力を以て強靭なる作戦を実施，敵の進攻企図を破摧すべし。

(ハ)　先遣部隊は別令により敵来攻部隊を攻撃すべし。

翌16日敵攻略部隊は遂にペリリユーに上陸を開始し，ハルマヘラ方面に於ても15日既にガラレ（ハルマヘラ北部）及ギラ岬（モロタイ南部）に上陸せりと判断された。

当日聯合艦隊は先遣部隊に対し「34Sを以て準備出来次第パラオよりハルマヘラに至る海面に機雷敷設せしめ敵来攻部隊を攻撃すべき」旨命ずると共に参謀長より「パラオ，ハルマヘラ方面

に基本すべき先遣部隊の配備及作戦の要領に関しては，敵攻略部隊の今後の行動状況及攻略進捗状況を見たる上決定せらるべく，情報によりて事前ゲリラ的戦法を可とする場合ありと予想しあり右考慮の上出撃せしめられ度」旨申進した。

依つて，先遣部隊指揮官は，３４５ｇに対し準備出来次第出撃，豊後水道通過後，各艦指定する地点（別図第１参照）を経て南下し，パラオ，ハルマヘラ間の哨区（別図第１参照）に於て機宜行動敵艦船の攻撃哨滅に任ずべき旨を命じた。

かくてロ４３，ロ４７は１７日，ロ４１は１８日，イ１７７，ロ４６は１９日夫々呉を出撃し作戦行動を開始した。

ペリリユー，モロタイ方面に於ける敵の攻略作戦は其の後益々活発化し我陸上部隊も防戦に死力を尽しつつあり，敵機動部隊も非島南東方洋上で支援に任じていたと思われた処，２１日に至り敵機動部隊は北菲東方洋上に在るものの如く，マニラが空襲を受けたので先遣部隊指揮官は３４５ｇに対し「敵機動隊の１部２１日夕刻の位置マニラの北東１６０浬，針路東，３４５ｇ各艦は２２日正午予定通過点附近に在りて厳密待敵せよ」を令した。

然し，翌２３日午後には，マニラに対する空襲もなく敵機動部隊に対する情報も得られぬ為，予定哨区への進出を命じ，翌24日には更に左の如き電令作を以て３４５ｇ各艦の配備を変更し敵攻略部隊に攻撃を指向する様電令した。（別図第２参照）

「３４５ｇは夫々左の哨区に厳密急行し敵攻略部隊を奇襲攻撃すべし。コロール島を通ずる東西線，南北線にて四哨区に分ち北東区ロ４６，南東区ロ４７，南西区ロ４３，北西区イ１７７，モロタイ附近ロ４１」

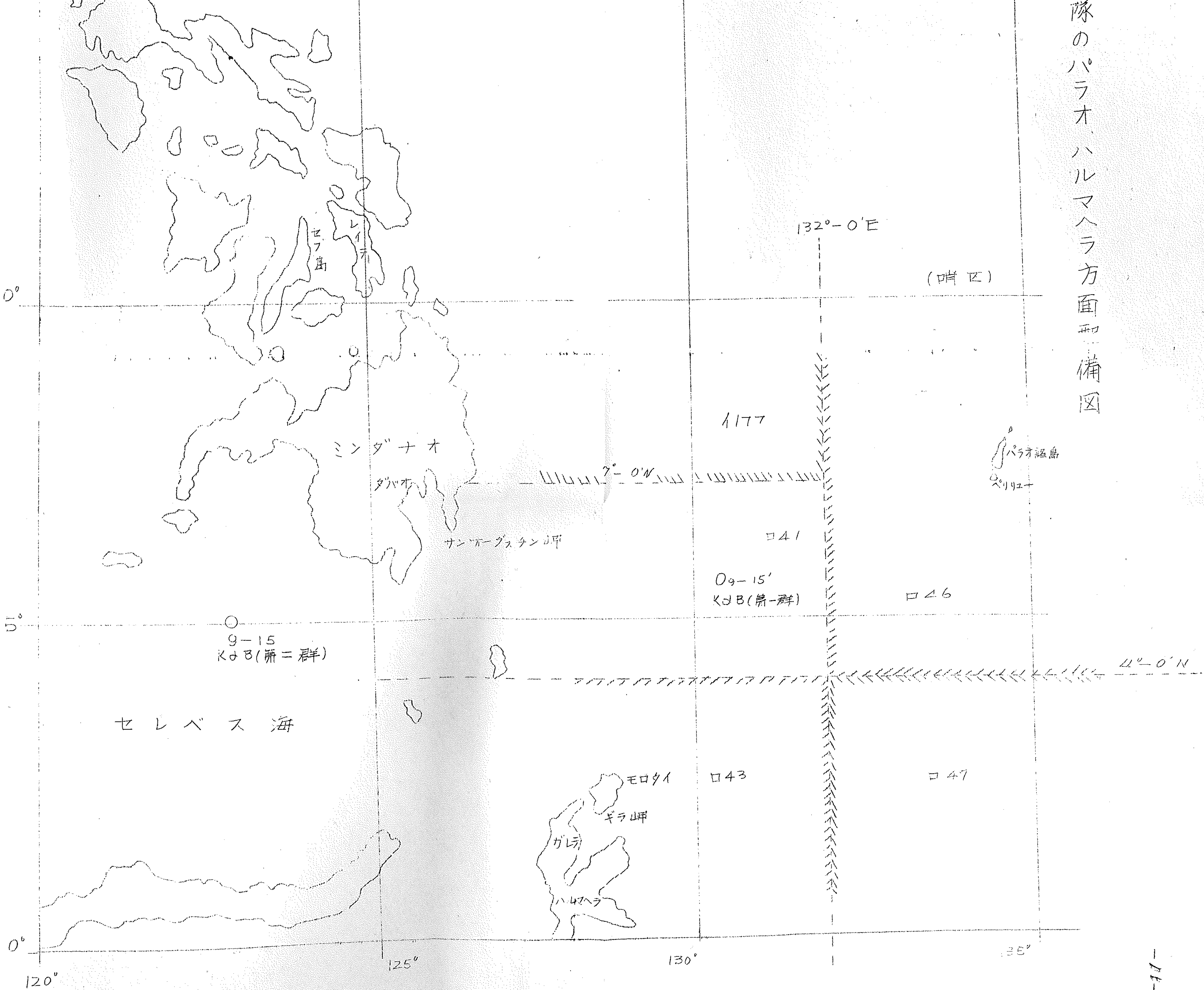
兵を出撃した各潜水艦はロ４１を除き概ね２８日前後パラオ周辺の配備に，ロ４１は月末頃モロタイ島附近に達し，敵の攻撃に努めたが，更に先遣部隊指揮官は１０月２日に至り，パラオ周辺の配備を一層厳密にする様に変更（別図第３参照）した。然し，４日夕刻には各潜水艦共行動の限度に達したので呉に帰投を命じた。

別図第一（海図八〇〇号と同尺度）

一九四四年九月第三十四潜水隊のパラオ、ハルマヘラ方面配備図



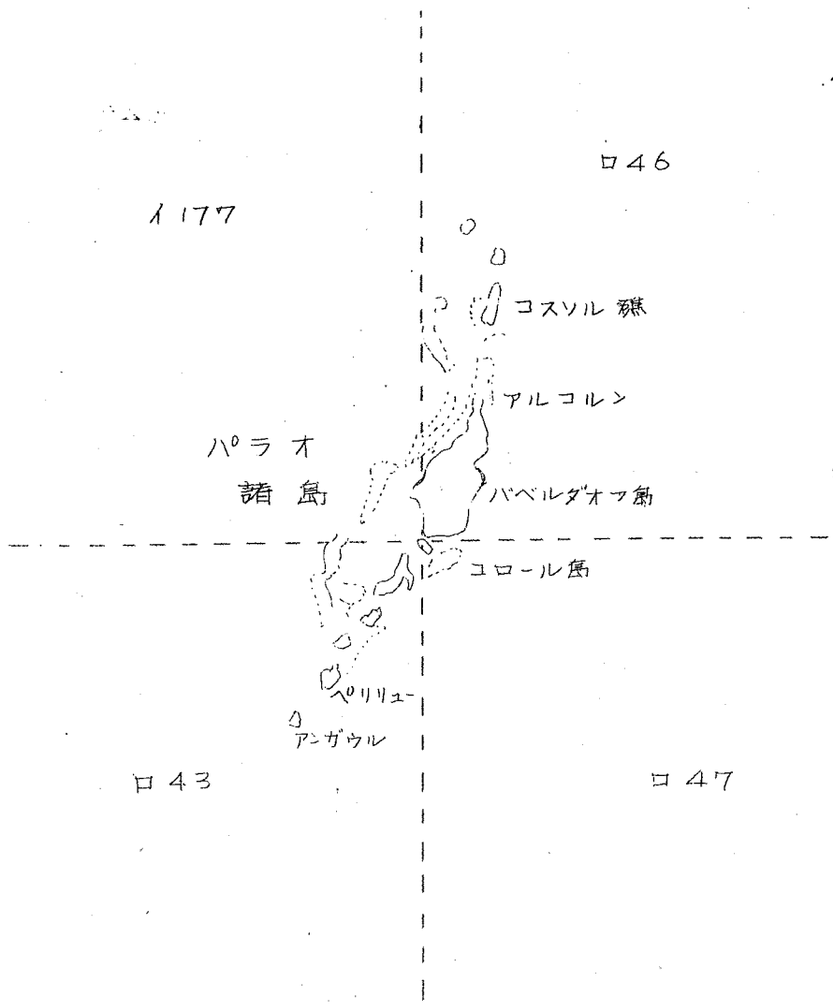
隊のパラオ、ハルマヘラ方面配備図



別図第二（海図第二二二号と同尺度）

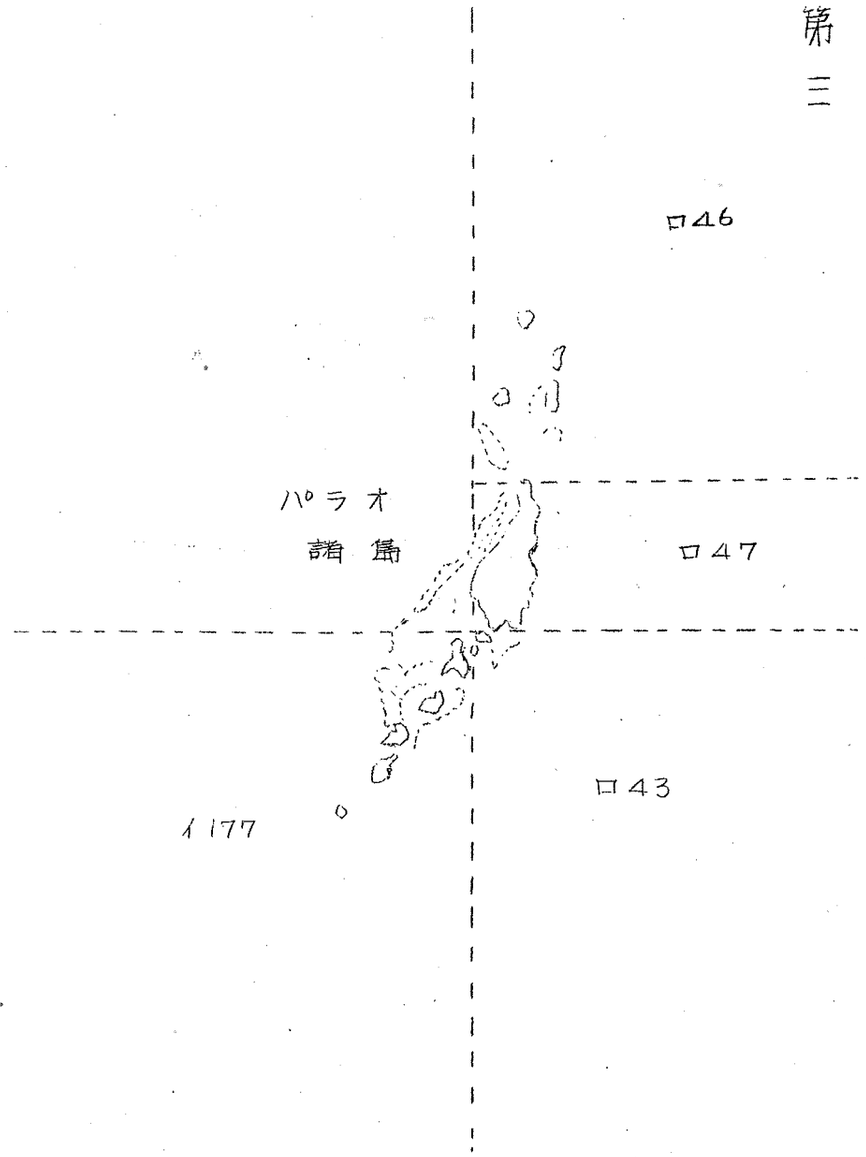
34sg パラオ方面哨区

（1944年 9月24日発令）



34sg パラオ方面哨区
（1944年10月2日発令）

別図第三



この間，

(イ) ロ41は3日0810ゴランゴ岬（モロクイ島東北）東方60浬に於て空母1隻を発見襲撃沈した，（ロ41の報告）

(ロ) 2日ノ刻ペリリュー西方4粁に於て駆逐艦2隻轟沈し5日には駆逐艦1隻沈没せる旨陸30根拠地隊より入電あり，イ177又はロ47の戦果と判断された。（両艦共未帰還）

(ハ) ロ46は9月28日及10月1日敵空母を発見襲撃に密したかその機を得ずロ43は敵を発見しなかった，

尚比島方面に於ける潜水艦基地隊として七戸に第3潜水艦基地隊を設置し，7月以降元遣部隊に部署されたが，9月中旬のセブ方面の空襲によつて燃料タンク全部焼失，浴場施設弁厳の損害甚大で，基地隊としての機能を喪失せる旨の報告があつた為，この使用が不可能となり，34sgの作戦期間は大なる制肘を受け内地に帰還せしめざるを得ない状況になつたのである，

34sgに対し元遣部隊指揮官が内地帰投を令した直後，聯合艦隊長官は近く実施すべく計画中であつた玄作戦（潜水艦搭載の回天兵器による敵基地在泊艦の奇襲攻撃）に備え，ウルシー基地の敵の使用状況を確めるため，34sgの1部による偵察を要求したため，元遣部隊指揮官はロ46及イ177に対し「モグモグ島を通ずる南北線以東イ177，以西ロ46の区分を以て同地を偵察」する様命令した。イ177の行動に関しては9月末以降報告がないため全然不明であるが，ロ46は10月7日ウルシーに近接し潜望鏡偵察によつて同地に空母1，巡洋艦2，其の他の艦船が在泊中であることを報告した，

10月10日敵機動部隊が突然沖縄方面に来襲し，聯合艦隊は捷1号及捷2号作戦警戒を発令し，1欠日には同作戦発動を令し，爾後16日頃まで台湾及九州所在の基地航空部隊は敵機動部隊に対し猛烈なる攻撃を敢行したのであるが，10日の敵機動部隊の位置（別図ヲ4参照）は34sgの哨路にあつたので，元遣部隊指揮官は之を攻撃せしめんとして左の如き命令を下した。

「10日10日1530，24度北129度30分東に空母3，駆逐艦2，針路北東，25度北20分東に空母2，巡洋艦10，針路南，尚外に附近行動中の母艦群ある筈あり，345名艦は帰投好機を捕捉し之を攻撃せよ。」

11日，12日共各潜水艦は敵に遭遇せず，14日に各艦は呉に帰着した。但し，ロ47，イ177の両艦は本作戦行動に於て遂に消息不明となつた。

第2項 第7潜水部隊の作戦

第7潜水戦隊は「あ」号作戦当時呂100型潜水艦で編成され艦隊作戦に参加していたのであるが，8月15日の戦時編制の改定に際し，その性格を変じ，イ361，イ362の輸送潜水艦2隻を以て編成し，太平洋方面諸島に対する輸送補給の専門的任務を帯びるに至つた。

輸送専用の潜水艦はガ島撤退作戦後真剣に考究され，1944年5月末前記2艦が竣工し，第11潜水戦隊において訓練の後，8月15日を以て第7潜水戦隊として編成されたもので，9月上旬には既に第11潜水戦隊にイ363，イ364，イ365，イ366，イ367，イ368の6艦が訓練中で，逐次第7潜水戦隊に編入される態勢にあつた。

なお，之等輸送潜水艦は主として太平洋方面諸島に派遣する関係上基地を横須賀とし，部隊指揮官は輸送先，輸送物件等に関する中央との連絡に便利な横須賀潜水艦基地隊にその将旗を掲揚した。

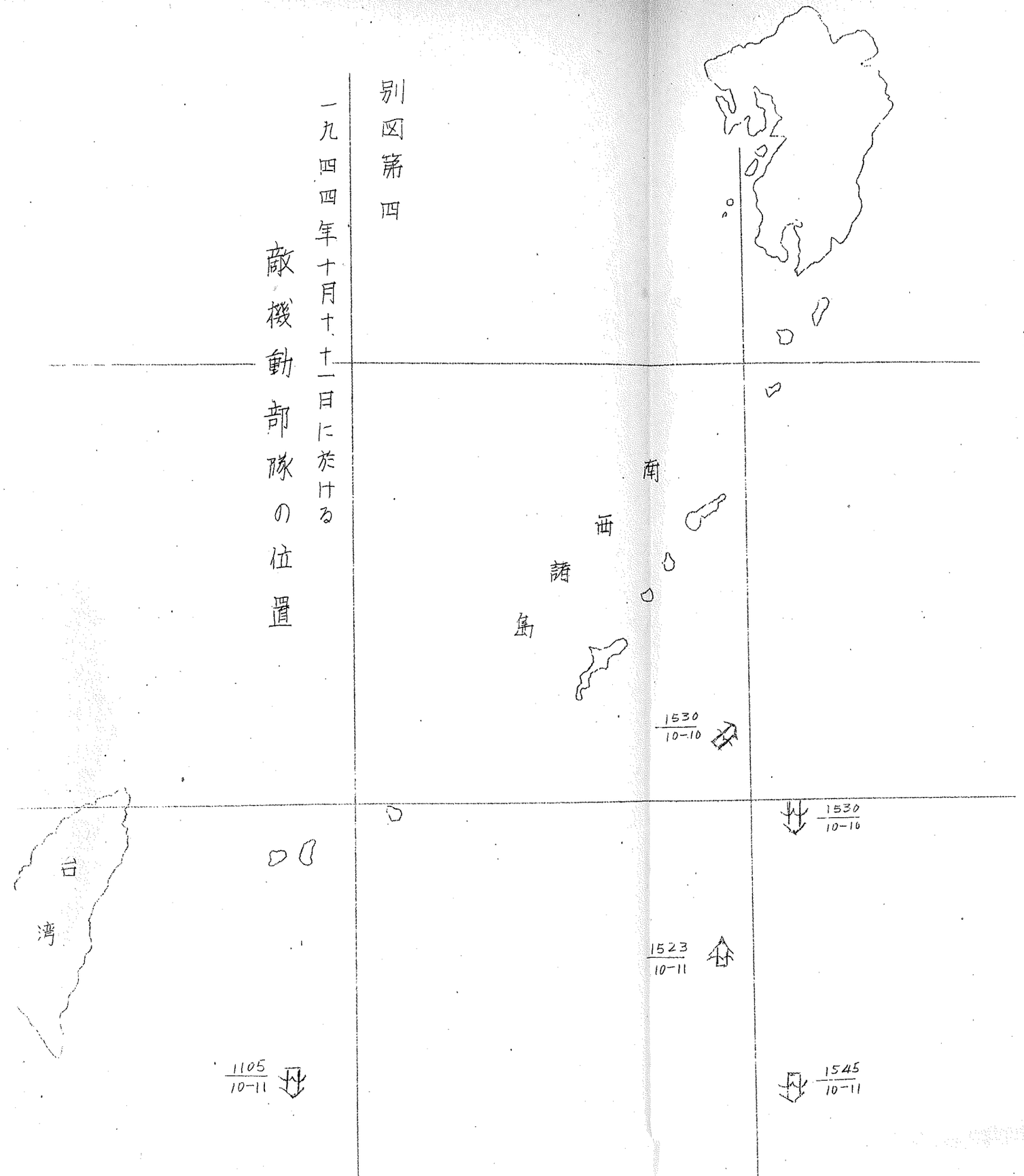
8月末より10月中旬迄の間に実施したイ361，イ362の輸送状況は左表の通である。

艦名	横須賀発	目的地	目的地着	横須賀着	記事
イ361	8月23日	ウエーキ	9月7日	9月17日	輸送物件86本 工員30名帰還
イ362	8月23日	ナウル	9月14日	10月3日	帰途9月21日トラック着搭乗員83名便乗翌日トラック発帰途につく。 ナウル補給量は明確でない。

別図第四

一九四四年十月十、十一日に於ける

敵機動部隊の位置



十一日に於ける機動部隊の位置

南西諸島

台湾

比島

1530
10-10

1530
10-10

1523
10-11

1105
10-11

1545
10-11

1530
10-11

125°

130°

イ364は9月6日第7潜水部隊に編入、同月14日大湊島に向ったが予定の9月末に至るも到着せず、遂に消息不明となり、9月15日編入されたイ363は10日9日横須賀発トラックに向った。

なお、9月30日にはイ365、10月2日にはイ366が夫々編入されたが、イ364の輸送失敗が訓練不足によるものではないかとの懸念があつたので、横須賀に於ける再訓練が実施されることとなり、10月末迄両艦共輸送を実施していない。

第3項 イ12の作戦

イ12は10月4日附で第1潜水戦隊から除かれ第6艦隊司令長官直率となつたが、之より先9月末聯合艦隊は米本土方面に於ける特別作戦としてイ12を使用するに決し、先遣部隊指揮官に左の命令を発した。

「先遣部隊指揮官はイ12をして10月上旬本土東岸約2ヶ月の期間を以て米本土西岸、布哇方面の敵海上交通破壊戦に従事せしむべし。」

右の命令に基き、先遣部隊指揮官は10月4日イ12に対し出撃命令を発し同艦は即日内海西部を出撃、日本海を経て津軽海峡を通過し、(7日夜荒天の為函館沖仮泊)一路米西岸に向つた。

第3章 自昭和19年10月中旬 至1944年12月中旬 潜水艦作戦

第1節 1944年10月中旬に於ける情勢

米軍は9月中旬以降ウルシー、コッソル水道、クツルー等を前進基地として益々東の作戦を積極化し、10月11日その機動部隊の一部は我が南西諸島、台湾方面に来襲した。

之に対し、わが基地航空部隊は台湾及び九州より基地航空兵力の全力を挙げて猛反撃を加え、又前記した如く当時パラオ方面より北上中であつた3459に対し之に雷撃せしめた。

この作戦で潜水艦は遂に敵に遭遇しなかつたが、我が航空部隊は敵機動部隊に対し大打撃を加へ得たものと当時は信ぜられた。
之して敵機動部隊は一時その動静が不明となつたが、14日至り更に非島要地に対して爆撃開始し、反撃爆撃を加え、一方別動の有力な攻略部隊は10月18日レイテ島に上陸を開始した。
聯合艦隊は同日「捷1号作戦」を発動し茲に聯合艦隊全兵力を以てする海上作戦が開始された。
1944年10月15日現在に於ける潜水艦関係の艦隊戦時編制は左表の通りであつた。

区分		艦船部隊
第6艦隊		158g (1-6. 136. 137. 138 141 144. 145 146. 147. 153 156) 345g (1177 ロ41. ロ43 ロ46 ロ47) 112
	第7潜水戦隊	1.361. 1362 1363. 1364 1365 1.366 1.367
	第8潜水戦隊	1 8 1 52 1 165. ロ 113 ロ115
	第11潜水戦隊	長鯨 1 48 158 1368. 1369 1370 1371 ロ 49 ロ50 ロ55
	附属	第31潜水艦基地隊 筑紫丸
呉鎮守府部隊	呉潜水戦隊	丞鯨 195g (1121 1122 1155 1156 1157 1158 1159 1162) 339g (ロ63 ロ64 ロ67 ロ109 ロ112)
	呉防備戦隊	ロ62 ロ68. ロ500
横須賀鎮守府部隊		65g (ロ57 ロ58 ロ59)
備考		戦時編制表は上の通りであるが当時既に1177 ロ47 152は消息不明で実在しなかつた。

10月15日に於ける戦時編制は前表の通りであつたが、11月中旬迄の間にロ109 ロ112の2隻は第1線兵力として339gから345gに、ロ49、ロ50の2隻は1155より345gに編入され、又168は855より除き6F直率に編入された。
右の如き状況に於て第6艦隊司令長官が示した10月下旬に於ける先遣部隊の実在兵力とその軍隊区分は次表の通りである。

部隊		指揮官	兵力	主要任務
先遣部隊	主隊	第6艦隊司令長官 中将 三輪茂義	筑紫丸	呉にあつて全作戦指導
	第1潜水部隊		126. 138. 141 144. 145 146 153 154 156 ロ41 ロ43. ロ46 ロ49 ロ50 ロ109 ロ112	荘島東方海面に於て機動部隊攻略部隊、輸送船団の攻撃
			136 137 147	西カロリン諸島在泊機動部隊の奇襲
		112艦長 中佐工藤兼雄	112	北太西洋交通破壊戦
	第7潜水部隊	第7潜水戦隊司令官 少将 大和田昇	1361 1362 1363 1364 1365 1366 1367	作戦輸送
	第11潜水部隊	第11潜水戦隊司令官 少将 石崎昇	長鯨 148 158 ロ55 1368 1369 1370 1371	訓練 戦備

第 2 節　先遣部隊以外の潜水艦の動静

第8潜水戦隊の10月上旬に於ける実在兵力は、伊8、伊165　ロ113　ロ115の4隻で、パナンを基地とし、従来通南西方面部隊潜水部隊として南西方面艦隊司令長官の指揮下にあつて、主として印度洋及ニューギニア西部方面に作戦していた。但し之等の作戦の詳細については全然資料がなく詳細は不明である。

第伍潜及呉鎮守府部隊附属潜水艦については省略する。

第 3 節　先遣部隊の作戦計画

1、先遣部隊は9月上旬より10月中旬に亘つてその1部の兵力をパラオ、モロタイ方面に作戦せしめたが、大部分の兵力は内海西部に待機の上戦備完成を促進し、艦隊決戦時に之に策応し得る態勢を整えつつあつたが、10月11日以降南西諸島、台湾方面に敵機動部隊が来襲したので、その時期近しと判断し、先づ作戦可能の全潜水艦兵力を南西諸島南東海面に進出せしめ、17日以降敵の中南部方面上陸が予想されるに至つたので、第1潜水部隊の殆んど全力を非島東方海面に集中配備するに決した。

2、之より先、先遣部隊は伊号型潜水艦に「回天」を搭載し、敵機動部隊を泊地に随伴奇襲せんと準備訓練中であつたが、伊136　伊137、伊47を除く各潜水艦はその準備を中止し、非島東方海面に進出せしめることとした。

但し、前記3艦は引続きその準備訓練を続行し、機を見て3隻を以て敵機動部隊が西カロリン諸島前進基地に在泊中の好機に回天攻撃を決行することとし、10月下旬漸く断く完成したので出撃せしめ11月20日攻撃のことに決定した。

3、海上部隊の非島東方海面に於ける敵戦後10月27日頃より非島東方海面所在の先遣部隊兵力を2分し、レイテ東方海面とラモン湾北東海面に配備して、レイテに対する敵の増援補給を遮

断し、且つ、敵機動部隊の北非空襲時に補促攻撃せんと企図した。

但し、之等兵力は11月中旬頃には内地に帰投を命じ、11月中旬以降12月中旬迄は、新造潜水艦を含む1部兵力をラモン湾北東海面に配備し得るに過ぎなかつた。

4、第7潜水部隊兵力は、新造艦の訓練が完了するに従い逐次編入増加し10月下旬にはその兵力7隻となつたが、離島に対する補給の必要性は益々其の度を加え、困難な作戦輸送を継続せざるを得なかつた。

5、伊12は引続き単独北米太平洋方面で海上交通破壊戦を実施していたが12月下旬帰還を命じた。

第 4 節　先遣部隊作戦経過の概要

第1項　捷1号作戦の発動

10月11日米軍機動部隊が南西諸島、台湾方面に来襲すると同時に台湾所在の基地航空部隊は猛攻撃に転じ、12日聯合艦隊は軍令作を以て「天作戦（136、137、147による回天攻撃作戦）参加以外の第1潜水部隊を以て之を邀撃すべき」旨命じたので先遣部隊指揮官は同日直ちに126、145、153、154、156を出撃せしめることとした。

尚、同指揮官は爾余の第1潜水部隊に対し急速出撃準備を命じた。（そして126、145は13日、154、156は15日、153は19日に豊後水道より南西諸島東方海面に向け一路南下した。）

敵機動部隊を攻撃した基地航空部隊は、12日には空母6乃至8隻、13日には空母3乃至5隻を撃沈した旨同指揮官より報告があつたので聯合艦隊は14日電令作を以て「敵機動部隊は我が痛撃を受け敗退しつつあり、基地航空部隊と力を協同作戦部隊は全力を挙げて敵を殲滅せよ」と命じ先遣部隊に対しても残敵の追撃を下令した。

先遣部隊指揮官は14日126，145，153．154；156を以て甲潜水部隊を編成，先遣部隊指揮官直率とし，那覇南方に強行進出を命じた。

聯合艦隊は16日には台湾東方の敵機動部隊は敗走中であるが，比島パラオ南にも機動部隊三群程度ありと判断し，別令作特11号を以て基地航空部隊，海上部隊，潜水部隊の総力を結集し攻撃すべきを命じた。

10日17日午前航空母艦1隻，戦艦3隻を基幹とする敵部隊がスルアン島附近に出現したので，聯合艦隊は敵の中部比方面に対する上陸作戦の機迫るを察知し，カ1潜水部隊の全兵力を比島東方海面に対し急速配備することを命じた。

なお，当日呉鎮守府部隊のロ109，ロ112の2隻も10日20日附でカ6艦隊に編入，現作戦に参加せしめられることに決した。

先遣部隊指揮官は先に出撃した各潜水艦を比島東方海面に南下せしめると共に，準備完成次第他の潜水艦も出撃せしめる手配をした。

翌18日1730，敵攻略部隊レイテ島方面攻略の企図確実と判明するや，聯合艦隊は「捷1号作戦発動」を令した。

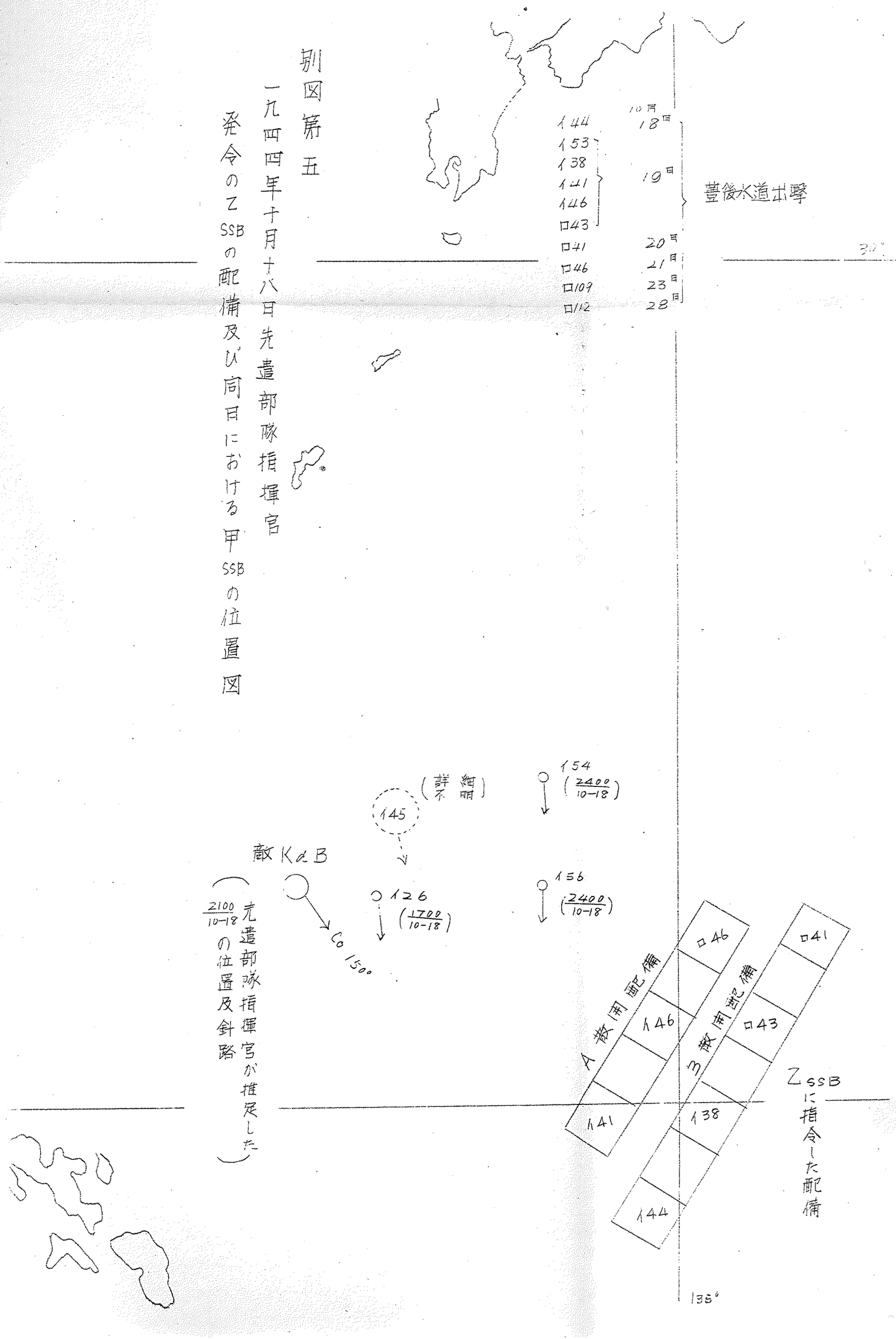
第2項　第1潜水部隊の比島方面進出

捷1号作戦発動に前後して18日夕刻先遣部隊指揮官は，カ1潜水部隊に対し配備，行動等を指令したがその概要は左の通であった。

区分	兵力	配備行動	
甲SSB	126. 145 154. 156. 153	1、126. 145 極力敵の前程に進出 2、154. 156 は強行進出 3、153は19日出撃非島東方へ	(別図カ五参照)
ZSSB	141 138 144 146 041 043 046	1、046. 146. 141 A 攻開配備 2、041 043. 138 B 攻開配備 144 3、各艦18日乃至20日出撃	(別図カ5参照)
丙SSB	0109 0112	各艦23日出撃配備後令	

別図第五

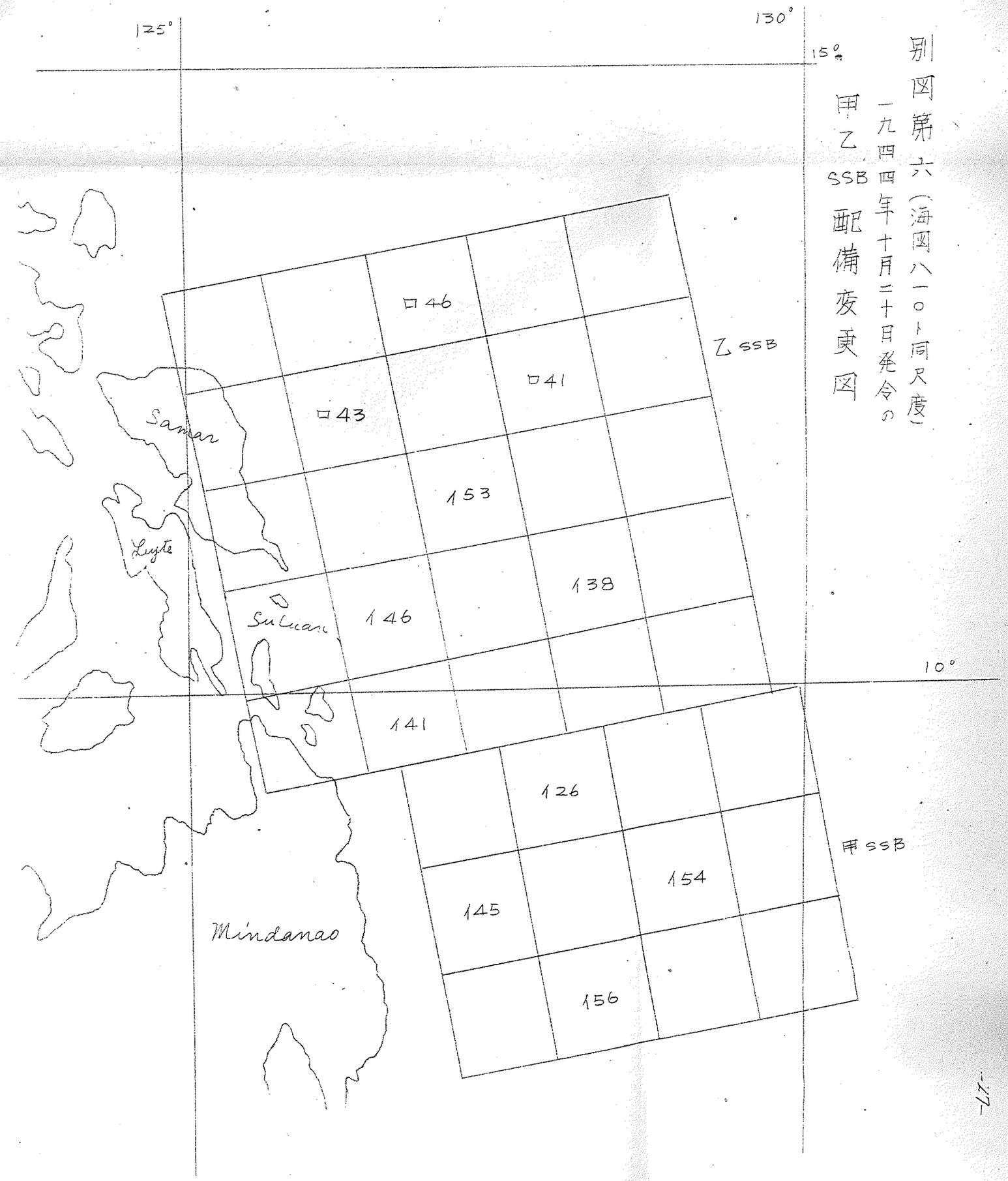
一九四四年十月十八日先遣部隊指揮官発令の乙SSBの配備及び向日における甲SSBの位置図



別図第六（海図八一〇ト同尺度）

一九四四年十月二十日発令の

甲乙SSB配備変更図



10月20日頃の1部は既にレイテ湾タクロバン飛行場の1部，ドラグサンホセ等に上陸しレイテ湾内には輸送船多数あり．その主攻正方向はレイテ湾方面なること確実となつたので，先遣部隊指揮官は同日夜甲乙両潜水部隊の配備を別図カ6の如く変更した．なお，イ44は進出途上事故を生じたので呉に帰還を命じ乙潜水部隊より除いた．

（本配備完成時期は10月24日乃至25日頃と予想された。）

22日には第2遊撃部隊はブルネイを出撃しレイテ湾に向け進出中機動部隊本隊は豊後水道を出撃一路南下中．又カ1遊撃部隊は馬公発非島西岸を通りスリガオ海峡に向け進撃中であり，25日早朝には之等海上部隊は敵海上部隊と非島東方海面で遭遇することを予想されたので，23日夜先遣部隊指揮官はカ1潜水部隊に対し捷号決戦に際し各艦勇戦敢斗すべき旨を訓示し，翌24日日没後には各潜水艦に突撃を命じ，サマール島東岸よりスリガオ海峡東方に亘り巨岸約60浬の海域に集中配備を命じた。

この配備の概要は別図カ7の通であり25日正午頃には完成するものと予想された。

第3項，第1潜水部隊の非島東方海面の作戦

25日より26日に亘り潜水艦は海上部隊の海戦に協力してサマール島東方よりスリガオ海峡東方に至る海域で作戦し，多数の敵部隊を発見したが，攻撃の機を得たものはイ56以外は不明である。尚イ56は本作戦に於て多大の戦果を収めた。

26日以降我海上部隊は右海面より避退せる処，米軍は機動部隊を以て北非の航空基地を攻撃し，レイテ方面に対して増援兵力を注入することが予期されたので，聯合艦隊は先遣部隊指揮官に対しカ1潜水部隊の大部をレイテ湾東方海面に配して輸送船団に備えしめ，1部をラモン湾北東海面に配して敵機動隊の攻撃に任ぜしめる様発令した。

茲に於て27日先遣部隊指揮官はイ56を内地に帰還せしめ，その残余の潜水艦と新に戦線に加入したロ109，ロ111を以て

編制換を行い新配備を指令した。

その編制は下表の通で配備は別図第8の通である。

第1潜水部隊	甲潜水部隊	126, 138, 141 145, 146, 153 154
	乙潜水部隊	041, 043, 046 0109, 0112

30日に至り「多号輸送作戦」（北部方面よりレイテに対する兵力物資輸送作戦）に備えるため、31日以降次多号輸送終了迄の期間、潜水艦1乃至2隻をサンベルナルヂノ水道東口に配備し、敵の通峡阻止及輸送部隊に対する警報伝達の任務に就かしめられ度旨南西方面艦隊司令部より要請があつたので、翌31日先遣部隊指揮官は041、043の2隻を之に充当することとし、その配備を海峡東口に近接せしめた。

又甲潜水部隊に対しては各艦の哨区を若干変更の上レイテ湾東方巨岸400浬附近迄配備を疎開せしめた。

其の後先遣部隊指揮官は概ね各潜水艦の哨区を変更し、敵部隊の発見撃滅に努めしめたが、11月上旬より中旬に亘り逐次左の通内地に帰還せしめた。

潜水艦	帰投発令月日	帰着月日	帰着地
156	10－27	11－4	呉
046	11－7	11－19	舞鶴
126, 145, 154	11－8	未帰還	
041	11－8	11－18	舞鶴
043	11－8	11－16	佐世保
0109	11－10	11－19	〃
153	11－15	11－22	呉
0112	11－16	11－21	馬公
141, 146, 138	11－19	未帰還	

別図第七（海図八一〇と同尺度）

130°　15°

一九四四年十月二十四日二二五七発令の

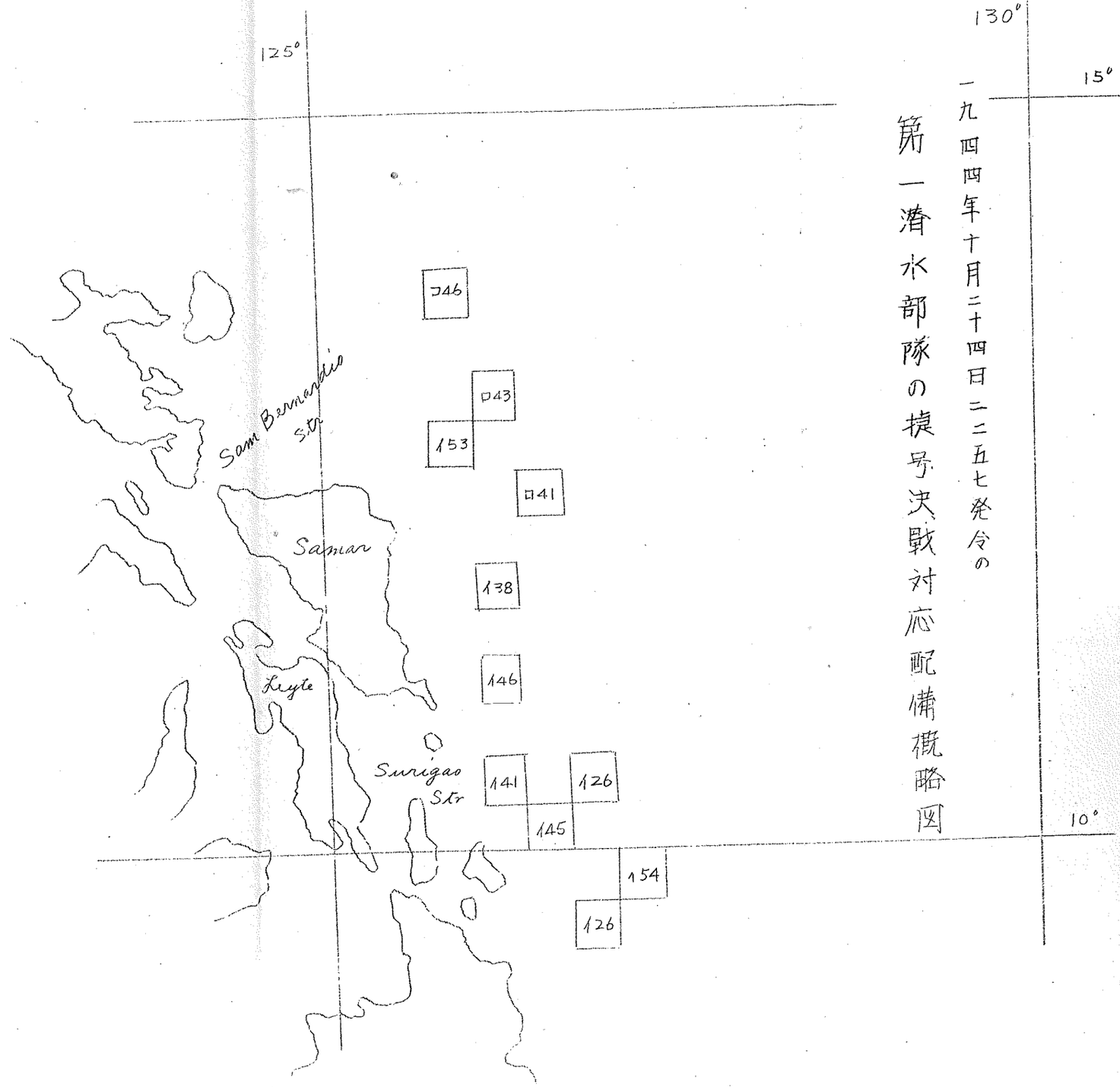
第一潜水部隊の捷号決戦対応配備概略図

10°

別図第七（海図八一〇と同尺度）

一九四四年十月二十四日二二五七発令の

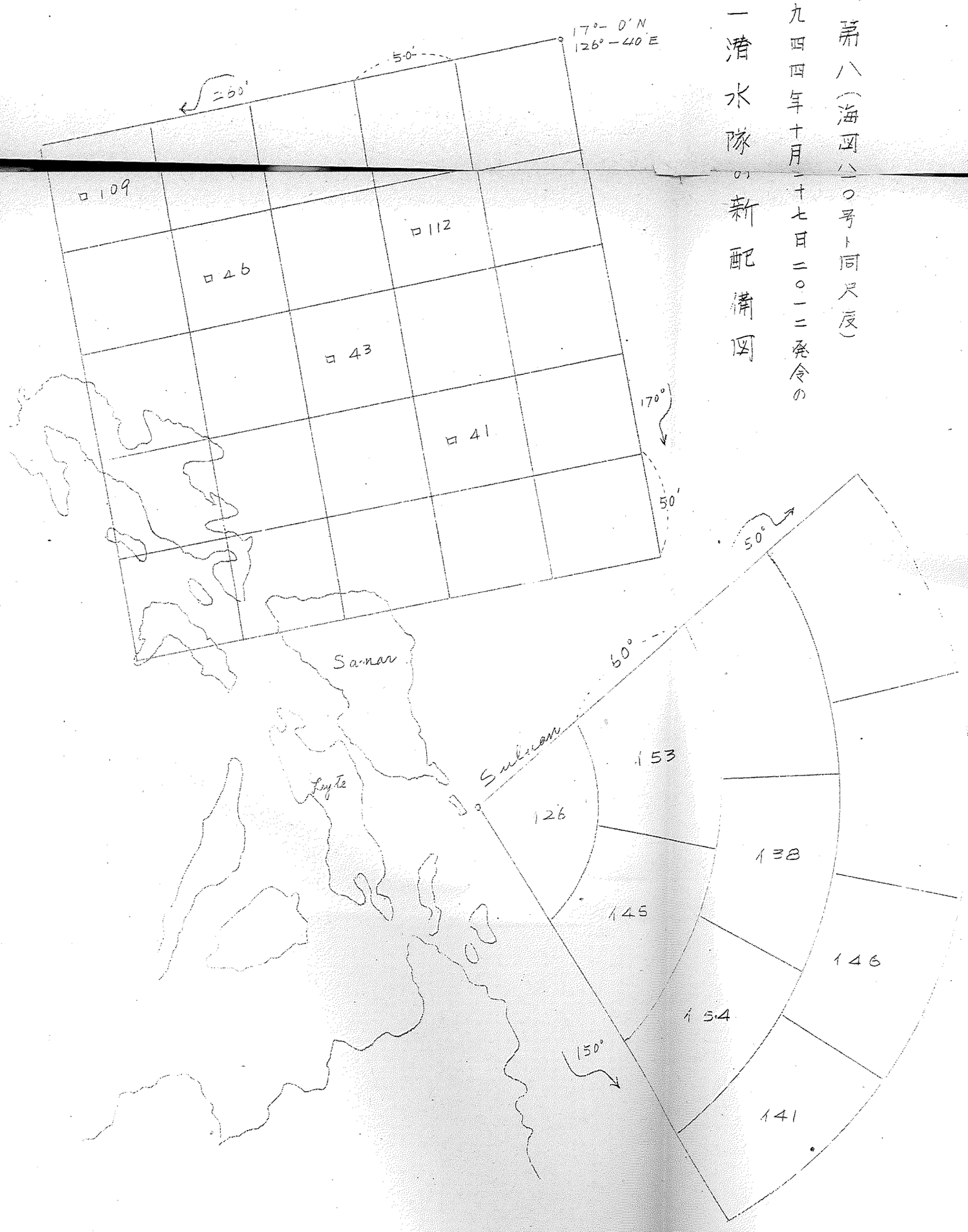
第一潜水部隊の捷号決戦対応配備概略図



別図第八（海図八〇号ト同尺度）

一九四四年十月二十七日二〇一二発令の

第一潜水隊の新配備図



当本行動中大部の潜水艦は敵情を報告して航空部隊、海上部隊の作戦に協力した外、1部のものは直接敵艦艇を攻撃して戦果を収めたが、其の主なものは下の通であると推定される。

艦名	期日	記事
156	10月24日	非島東方海面にて輸送船1
	10月25日	〃 空母1、駆逐艦1 } 轟沈
	10月27日	〃 輸送船3
141	11月3日	〃 空母1 轟沈
126	10月31日	スルアン島の南にて巡洋艦1 攻撃 (763空銀河の報告による)

第4項　第1潜水部隊の北非東方海面の作戦

11月上旬第11潜水戦隊より新鋭艦ロ49、ロ50を迎えた先遣部隊指揮官は11月中旬以降両艦も非島方面の作戦に参加せしめることとし戦備の促進に努力した結果、ロ49は16日、ロ50は18日夫々内海西部を出港し非島方面に進出した。

これより先、11月8日非島東方海面にあつた第1潜水部隊の大半は内地に帰投せしめたので、残留した潜水艦はロ109、ロ112、153、141、146、138となり、サマール島北方にはロ109、ロ112の2隻、レイテ東方海面には爾余の4隻が配備されていた。

そしてロ49、ロ50が北非方面に進出した時には之等各艦は何れもその哨区を撤しロ112を除く各艦は内地(ロ112は馬公)に向つたあとであつた。

先遣部隊指揮官は、当時の情勢判断(敵航空部隊は屢々ラモン湾東方海面に行動し、輸送船団はレイテ湾方面に主として行動していると判断していた)よりロ49、ロ50を北緯15度東経125及附近を中心とする海域に配備し、敵機動部隊の攻撃に任せしめた。

そして ロ49は12月7日，ロ50は12月17日呉に帰投し，之等に代りロ112は11月末馬公より，ロ43は12月8日佐世保より出撃して文代配備についた。

この方面に於ける戦果としては，11月25日ラモン湾北東150哩に於て空母1隻，駆逐艦1隻をロ50が撃沈した旨報告された。

第5項　第7潜水部隊の輸送作戦

既に述べた通り，I363は10月9日トラックに向け横須賀発輸送を実施しつつあつたが，12月中旬迄に横須賀を出港し輸送に従事した潜水艦の実績は下表の通りである。

潜水艦	横須賀発	目的地	目的地着	横須賀着	記事
I363	10－9	トラック メレヨン	10－21着 10－24発 トラック	11－15	衣服5屯其の他5屯陸揚
			10－28メレヨン着発		糧食75屯，重油5屯陸揚 時地行便乗者7名収容
			10－31着 11－2発 トラック		重油3屯を陸揚 時地行便乗者82名収容
I361	10－17	ウェーキ	10－29	11－9	糧食弾薬67屯陸揚 時地行便乗者5名収容
I367	10－31	南鳥島	11－6	11－12	糧食弾薬61屯陸揚
I365	11－1	トラック	11－15	未帰still	11－16トラック発時地に向つたまま消息不明
I366	12－3	パガン	12－14	12－25	糧食弾薬51屯陸揚 時地行便乗者49名収容
I367	12－4	ウェーキ	12－17	20 1－1	糧食弾薬81屯陸揚
I363	12－10	南鳥島	12－17	12－26	糧食88屯弾薬10屯 其の他10屯陸揚，時地行便乗者60名収容

第6項　玄作戦

潜水艦に回天を搭載し敵主力部隊在泊の前進基地に近接して回天を発進し，空母戦艦等を一挙に殲滅せんとするのが　玄作戦であつて，既にI36，I38，I41，I44，I46を以て11月上旬迄カロリン，マーシャル，アドミラリテー方面に攻撃決行

の予定で計画準備中であつたが，中部方面戦況の変化によつて，11月17日から潜水部隊の全力を以て比島東方海面に敵攻略部隊を邀撃することとなつたので，最初の計画は中止するの已むなきに至り，I36，I37，I47を以て新に玄作戦を計画し，敵主力が西カロリン諸島前進拠点に在泊中の好機を捉ふことヒとし，一応11月20日黎明之を奇襲するに決した。

そして之等各艦は回天特攻隊菊水隊として編制され，11月6，7日大津島に於て回天4基宛を搭載し8日同地を出撃南下した。

之より先，比島東方海面で作戦中であつたI38に対し，11月11日ウルシー島偵察を実施しその状況を13日頃報告すべく命じたが遂に報告がなかつた。（同艦は本行動中敵機動部隊発見報告をした後消息不明となつた。）

然し，先遣部隊指揮官は通信諜報によつてウルシーに有力艦在泊疑ひ確実と判断し，且つ17日聯合艦隊命令によつてカ4艦隊所属の彩雲がトラックよりウルシーを偵察した結果によつて，同地には正規空母5，特空母4，戦艦5外多数の艦艇が在泊し，且つその碇泊状況を確認し得るに至り，第30根拠地隊司令部よりはコスソル水道内敵艦船の状況に関し詳細報告があつたので，菊水隊の攻撃目標をI36，I47ウルシー，I37コスソル泊地と決定した。

各艦は回天の保存整備に努めつゝ所定攻撃地点に進出し，I36，I47は19日夫々ウルシー北方及南方泊地を潜航偵察し碇泊状況を確認の上20日に攻撃を実施した。両艦は命中を確認した後隠密避退し，22日には先遣部隊指揮官の命によつて呉に向い30日帰着した。

I37は20日黎明コスソル泊地在泊艦攻撃の予定であつたが，パラオの第30根拠地隊は攻撃の標標を認めなかつたので，23日迄に攻撃の機を得なかつたら呉に帰投する様命じたが遂に消息不明となり未帰still となつた。

尚ウルシーに於ける攻撃の成果は空母2，戦艦3と信ぜられ

た。

本期間に於ける先遣部隊の情況判断、各艦の動静等の概略は左表の通りである。

月　日	記　事
11月 8日	第水陸豊後水道より目的地に向け南下。
11月13日	I38 クツルー偵察報告予定の処報告なし。 但しウルミーには有力部隊依然碇泊中と判断した。
11月14日	I38 より報告なし同艦消息不明
11月15日	ウルシー在泊中の敵機動部隊出港の兆なし。 コスソル水道大型艦なきも有力部隊の入港を予期し得るものと判断し第水隊の攻撃目標を下の通定めた。 I36　I47　ウルシー I37　コスソル泊地
11月16日	通信諜報によれば敵機動部隊は15日頃ウルシー発北上の進ある旨聯合艦隊参謀長から情報があつた。 但し先遣部隊指揮官は依然敵は在泊中で出港したものは1部と判明した。
11月17日	第4艦隊飛行艇の偵察報告を得た。
11月19日	I36,I47はウルシーの潜航偵察を実施した。 両艦の偵察結果左の通 I36. ウルシー北部及中部泊地 ワシントン型を含む戦艦5、其の他に空母、巡洋艦、駆逐艦、輸送船多数。 I47 ホドライ島西方泊地(亜望) 輸送船、巡洋艦、駆逐艦 ファータプル島西方泊地(確認) 正規空母2、特空母1　巡洋艦4、輸送船10

月　日	記　事
11月19日	I47 ピーク島北方泊地(確認) ワシントン型戦艦2、水上機母艦1、輸送船2 (註) I36 は I435 フラタップ島の13度5浬より偵察 I47 は I005 ヤウ島(ロワルエリー水道)の190度4700米より偵察
11月20日	I36 マーシュ島の105度9・5浬より0454・2号艇を発進1、3、4号艇は故障のため発進せず搭乗員艦内に收容回天は流没せしめた。 0545、大爆発音を0645被爆音を聞いた。 I47 マガヤン島の154度12浬にて0328より0342迄の間に4基発進、ザウ水道より突入を指令、0416、0432中部又は北部泊地に火柱及大火災を確認、0550より0600の間に大爆発音及誘爆音を聞いた。 I37 19日日没後より20日黎明までコスソル水道泊地を攻撃した模様なき旨ガラ0機動部隊より通報があつた。
11月22日	I36 I47に対し呉に帰投を命じ I37 に対しては23日黎明までに攻撃の好機がなかつたら呉に帰投すべき旨を命じた。
11月30日	I36 I47最後 I37 は本行動にまつで消息不明となつた。

回天攻撃は上の如き状況の下に、戦果は下表の如くであると判断され指揮官には感状が授与された。

(イ) 当時の指揮官

司　令	海軍大佐	菊池清徳
I36 艦長	海軍少佐	和本　巌
I47 〃	〃	有田善次
I37 〃	〃	仲本儀雄

(ロ) 成果及回天搭乗員

艦名	地点	搭乗員	成果
136	モグモグ島南西沖地	少尉 今西太一	空母 1
147	ウルシー島中部又は北部沖地	中尉 仁科関夫	空母 1
		〃 福田 尚	戦艦 1
	ヒーダ島北方沖地	少尉 佐藤 章	戦艦 2
		〃 渡辺幸三	

第4章 自1944年12月中旬 至1945年2月中旬 潜水艦作戦

第1節 1944年12月中旬に於ける情勢

米機動部隊は、11月初頭以後は概ね2集団に分れ交互にレイテ方面の作戦支援を為しつつあつたが、11月末以後大部は前進根拠地に帰投し次期行動に備えつつあつたと思われる。なお、米の進攻作戦の主目標は菲島奪回であつて、其の拠点としてレイテ島の完全占領を企図し、益々戦力の投入に専念しつゝあるものと判断された。我方は菲島方面作戦を日米の決戦として、集中可能の全戦力を集中し、当面の作戦目標をレイテ攻略阻止に置き、機動部隊を壊滅、後方補給路の遮断、敵基地の奇襲攻撃及レイテ増援輸送に任じたのであるが、航空兵力の劣勢と、菲島沖海戦後に於ける作戦可能海上兵力の激減によつて作戦は意の如く進捗しない情勢にあつた。

斯くして米軍は着々レイテ島に地歩を堅め、12月15日にはミンドロ島サンホセに上陸するに至り、菲島一帯の制空権を確実に把握すると共に北部に新上陸作戦を開始せんとする態勢を整うに至つたが、12月下旬に於ける我方の情況判断と作戦指導の大要は左の通りであつた。

(イ) 米軍のミンドロ島に対する新作戦の目的は、前進基地を推進し、ビサヤン地区以南の我基地の無力化乃至は攻略を容易ならしめ、

ルソン島に対する本格的作戦を準備するにあつて、マニラ周辺地区に対する上陸作戦開始時機は明春早期と予期する。

(ロ) 米のレイテ上陸当初、決戦実施の要域を菲島方面と決定し、約2ヶ月に亘りレイテ島を確保するを主眼として作戦を指導したが敵機動部隊の活躍と、レイテ島地上作戦不如意のため、戦線収縮を余儀なくされたので、今後レイテ島のみに限定することなく、菲島全域に於て敵の企図遂行を制圧すると共に、ルソン島に於ける戦備を重点に強化し、敵戦力の有効なる消耗作戦を継続することによつて敵の企図を挫折せしめんとする。

(ハ) 1945年1月初頭に於ける潜水艦関係の艦隊戦時編制は下表の通りであつた。

区分		艦船部隊
第6艦隊		159 (イ26, 136, 137, 138, 141, 144, 145, 146, 147, 148, 153, 154, 156, 158)
		3459 (イ177, ロ41, ロ43, ロ46, ロ47, ロ49, ロ50, ロ55, ロ109, ロ112)
		159 (イ13, 1400, 1401, 15, 112)
	第7潜水戦隊	1361, 1362, 1363, 1365, 1366, 1367, 1368, 1369, 1370, 1371, 1372
	第8潜水戦隊	ロ113, ロ115
	第11潜水戦隊	長鯨 ロ56, ハ101, ハ102, ハ104
	附属	第31潜水艦基地隊 第宗丸 第631海軍航空隊

区分		艦船部隊
護衛艦隊	附属	ハ106
呉鎮守府部隊	呉潜水戦隊	19SS (1121 1122 1155 1156 1157 1158 1159 1162 1165)
		33SS 口63 口64 口67
	呉防備戦隊	口62 口68 口506
横須賀鎮守府部隊		6SS (口57 口58 口59)
備考	戦時編制表から削除されていないが当時既に消息不明であったものは下の通り 126 137 138 141 145 146 154 1177 口47 1365	

(二) 1月初頭に於ける戦時編制は前表の通りであるが、当時に於ける先遣部隊の実在兵力とその軍隊区分は次表の通りである。

部隊		指揮官	兵力	主要任務
先遣部隊	主隊	第6艦隊 司令官 中将 三輪茂義	筑紫丸	全作戦指揮
	第1潜水部隊		口41 口43 口46 口49 口50 口55 口109 口112	非島方面に於ける機動部隊攻略部隊輸送船団の攻撃
			136 147 148 153 156 158	敵前進根拠地の有力艦隊奇襲
			144 1368 1370 18 113 1400 1401 631ff	内地にて修理及訓練
		112潜水艦長 中佐 工藤兼雄	112	太平洋方面交通破壊戦
	第7潜水部隊	第7潜水戦隊 司令官 少将 大和田昇	1361 1362 1363 1366 1367 1369 1371 1372	作戦輸送
	第11潜水部隊	第11潜水戦隊 司令官 少将 仁科宏造	口56 ハ101 ハ102 ハ104	訓練戦備

(ホ) 戦時編制表及軍隊区分中特に説明を要する事項は左の通りである。

(1) 155SS の全潜水艦（136 144 147 148 153 156 158）及 1368 1370 は何れも回天搭載装置を整備し回天攻撃可能となった。

(2) 18は、1944年9月末まで印度洋方面で作戦していたが大修理のため、10月9日横須賀に帰着し、麻布整備工事に着手した。そして11月5日に第8潜水戦隊から除かれ第6艦隊直率となった。翌年2月10日に工事は完了した。
又1165 1944年12月15日第8潜水戦隊から除かれ呉鎮守府部隊に編入されたが、同艦の内地帰着期日は不詳である。

(3) 113, 1400, 1401は、何れも潜水艦用小型飛行機（晴嵐）搭載艦で、完成と同時に第6艦隊直属として編入され、第6艦隊司令長官の直接指揮の下に単独訓練を開始した。
なお、右の各艦に搭載すべき晴嵐は未だ完成していなかったが搭乗員訓練部隊として第631航空隊が編制された。

(4) 第11潜水戦隊にハ100型が編入されたが、主要各艦は潜丁之型と呼ばれ、1944年10月以降起工されたもので、航空機燃料の輸送に重点を置き、その他の回天搭載及魚雷攻撃も可能の如く設計されたものである。

第2節 先遣部隊以外の潜水艦の動静

第1項 第8潜水戦隊

前項記載の如く、18, 1165は1944年末には既に第8潜水戦隊より除かれ、ペナンを基地として作戦する潜水艦は小型2隻のみとなり、しかも戦局は次第に不利となり、非島方面が望視されるに至ったので、1945年1月下旬には主要2艦（口113 口115）も先遣部隊指揮官の指揮下に統一されるに至った。
そして2月20日には戦時編制に於てもう4SSに編入され、爾

に第8潜水戦隊は解隊された。

第2項　護衛艦隊附属潜水艦及鎮守府部隊附属潜水艦

ハ106は、1944年12月15日竣工と同時に第11潜水戦隊に編入され単独訓練を開始したが、30日には護衛艦隊附属に変更され個艦の単独訓練を実施すると共に護衛艦隊の訓練目標を兼ねしめられたが、練度向上した後に於ては敵潜水艦攻撃を主任務とすることに予定された。

呉及横須賀鎮守府部隊配属潜水艦に関しては既に述べた通りであつたが、戦線の後退と共に本土近海に於て使用することあるべきを予想し1945の大型艦には回天搭載装置を逐次装備する準備が進められつつあつた。

第3節　先遣部隊の作戦計画

先遣部隊の主作戦目的は依然として米軍の非島に対する攻撃阻止にあつたので、作戦方針は米軍のレイテ島上陸時以来の方針と変化はなかつたが、本期間に於ける敵情の変化及潜水艦の整備状況より、概ね左の如き作戦が計画された。

(イ)　敵は非島に指向する作戦線の基地として、ニューギニア北岸、マリアナ諸島、西カロリン諸島方面の前進根拠地に攻略部隊、補給部隊を待機せしめ、又機動部隊は西カロリン諸島方面を基地として、屢々非島並に台湾東方海面に来襲しつつあるが、之等部隊が前進根拠地に在泊中の好機を捕促して潜水艦を以て奇襲せんとし回天攻撃が企図された。即ち、当時回天の生産と訓練は比較的順調に進み、又、大型潜水艦の大部が回天搭載装置を装備するに至つたので、12月8日聯合艦隊によつて次表の如き計画が立案された。

指揮官	区分	兵力
先遣部隊指揮官	第一艦隊	第一航空戦隊
	回天特別攻撃隊金剛隊	136, 147, 148, 153, 156, 158

備考：(1) 攻撃地区：ブラウン、アドミラルテー、フンボルト、マリアナ方面、西カロリン方面

(2) 攻撃時期　1月中旬

(ロ)　中型及小型潜水艦は引続き非島近海に配備して、機動部隊及輸送船団の攻撃に充当したが、1945年1月上旬以後は米軍の非島西岸進出を見るに至つたので約半数は非島西岸に配備することとなつた。

尚、当時印度洋方面交通破壊戦に従事する潜水艦は、既に殆んど太平洋方面の作戦に転用されていたが、1945年1月下旬以降は最後の2艦も非島西岸リンガエン湾方面に転用せしむることとし先遣部隊指揮官の指揮下に編入された。

(ハ)　第7潜水部隊は引続き太平洋方面離島に対する作戦輸送に任せしめた。

(ニ)　第11潜水部隊は引続き新造艦の訓練に従事したが、回天攻撃訓練の144、1368、1370、長期整備の18、哨戒機搭載艦の113、1400、1401は何れも第1潜水部隊に編入し、第6艦隊司令長官直接指揮下に置かれた。

第4節　先遣部隊作戦経画の概要

第1項　非島方面に於ける作戦

第3章記述の通り非島方面には12月中旬ロ112及ロ43の2隻が非島東方海面（北緯15度東経125度附近を中心とする海域）に進出し、敵機動部隊の捕促攻撃に任じつつあつたが、中旬以後内地で整備休養したロ109が12月18日、ロ41が24日先ず出撃し、哨区に向つた。そしてロ112とロ43は夫々之等と交代して哨区を撤し、12月28日及翌1月4日に内地に帰着した。

1945年1月1日先遣部隊指揮官はロ109に対し内地帰還を命じ交代にロ49を同日出撃せしめた。

1月2日以降敵機動部隊が台湾南東海面に出現したので、ラモン

馬東方海面哨区より帰投中のロ109及北東方海面に進出中のロ41，ロ49に対し，5日より7日まで捕促攻撃に努めしめたが，遂に会敵するに至らず，ロ109は帰途につき1月2日佐世保に帰着した。

5日頃より敵攻撃部隊はリンガエン湾に上陸を開始したので，ロ49はルソン島西方海面にロ41はラモン湾東方海面に進出せしめた。尚，1月8日にはロ46を出撃せしめその配備をルソン島西方海面とし，北緯15度以南にロ49，以北にロ46を配することとした。

1月15日ロ41，同21日ロ49に対し内地帰還を令し，交代としてロ112（1月22日）ロ30（1月23日），ロ55（1月27日）を出撃せしめ，ルソン島西方にロ112，ロ55，東方にロ50を配備した，尚，中旬以降リンガエン方面に行動する敵艦船が増大したので，ルソン島東方海面より西方海面に配備の重点が移され，聯合艦隊命令によつて1月26日南西方面艦隊から先遣部隊の指揮下に編入されたロ113（22日昭南発）ロ115（25日昭南発）もルソン島西方海面に増勢された。

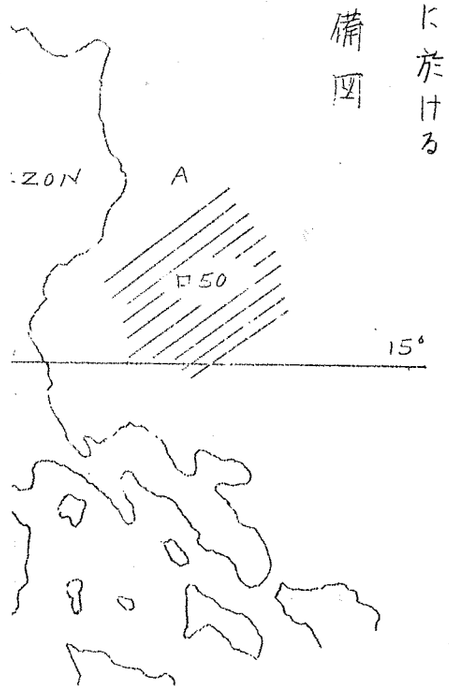
1月26日先遣部隊指揮官の示した之等潜水艦の配備は別図ヤタの通りである。

但し，各潜水艦が配備に就き得るのは1月末であつて，1月21日以後1月末の間はロ46のみがルソン島西岸に作戦した訳であり1月末に於ける各艦の状況は左表の通りである。

潜水艦	状況
ロ46	1月8日 呉発　15日より30日豆ルソン島西岸30日内地に向ふ
ロ50	1月23日 呉発　30日A哨区着
ロ55	1月27日 〃　2月5日頃ルソン島西岸着の予定
ロ122	1月22日 〃　29日B哨区着
ロ113	1月22日 昭南発　30日C哨区着
ロ115	1月25日 〃　2月3日頃C哨区南方着の予定

別図第九

一九四五年一月二十六日発令の菲島方面に於ける先遣部隊の配備図

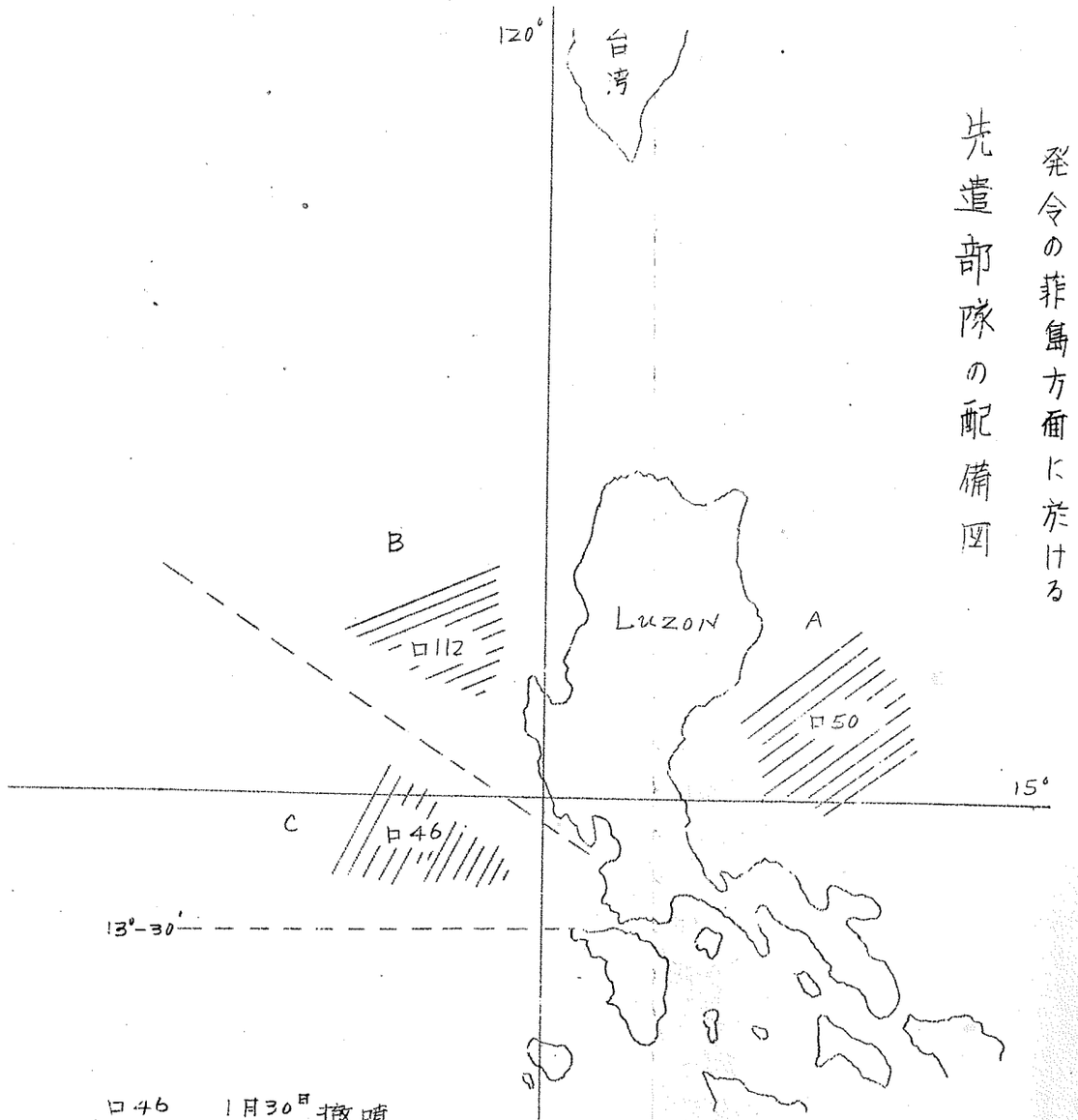


ロ112　1月29日　哨区着

ロ50　1月30日　哨区着

別冊第九

一九四五年一月二十六日
発令の菲島方面に於ける
先遣部隊の配備図



ロ46　1月30日撤哨
内地ニ帰投

ロ113　1月30日以後
ロ46ノ哨区ニ就ク

ロ115
ロ55　}---哨区ハ後令スル

ロ112　1月29日哨区着

ロ50　1月30日哨区着

尚，1又月中旬以降1月末迄に非島方面で得た戦果は次の通りである。

(イ) ロ47，1月12日夕刻ルソン島西岸イバ西方に於てアイダホ型戦艦1隻沈。

(ロ) ロ46　1月30日0130頃イバ西方に於て油槽船1隻，輸送船2隻1隻沈。

第2項　非島方面に於ける作戦及バトリナオ作戦輸送

米軍は1月9日リンガエン湾に上陸し，急速に南下して1月末にはマニラに迫り，引続き大部隊を増援して，圧倒的航空兵力の下に一挙に全非島を席捲せんとしつつあつた。

一方我基地航空部隊は極力非島制空権の奪回に努めたが，爾後の航空作戦を継続するためには，非島方面より台湾に基地を後退せしむることを必要とした。

当時(1月末)先遣部隊潜水艦で非島周辺にあつたものは前項記述の通りであつたので，航空機搭乗員の台湾転進のため之等潜水艦中の1部を充当して輸送することを2月1日聯合艦隊に於て決定した。

この聯合艦隊命令によつて先遣部隊指揮官はロ46，ロ112，ロ113，ロ115を輸送に充当し，ルソン東方にロ50，西岸にロ55を残留せしむるに決し，先ず内地に向け帰投中のロ46を高雄に入港せしめ，ロ112，ロ113，ロ115に対し急拠高雄に入港を命じた。

2月4日先遣部隊指揮官は作戦輸送に関し要旨左の如き電令を発した。

(イ) ロ46，ロ112，ロ113，ロ115は任務高雄よりバトリナオに陸軍兵力及輸送物件を輸送する。

(ロ) 復航バトリナオより陸海軍航空機搭乗員を輸送する。

(ハ) 各艦輸送人員中型40名，小型20名程度。

(ニ) 各艦予備魚雷，弾薬を陸揚

(ホ) 各部との連絡は高雄警備府を通じ緊密にする。

かくて，バトリナオ作戦輸送は開始されたが其の状況は左の通である。

(イ) ロ46　2月4日高雄着，7日高雄発バトリナオに向い揚陸成功，2月12日高雄に帰着した。
（同艦は翌日高雄発南西諸島方面を掃航内地に向い19日呉に帰着した。）

(ロ) ロ112，ロ113，2月7日高雄に入港，ロ112は8日，ロ113は10日高雄発バトリナオに向ったが，遂にバトリナオに到着せず消息不明となった。

(ハ) ロ115はルソン島西岸より高雄に帰港を命じられたが，非島西岸に於て作戦中沈没したものの如く，高雄に帰還しなかった。

なお，2月6日聯合艦隊命令によつてカ7潜水部隊の一艦をバトリナオ輸送に充当せしめられ，イ372が7潜水部隊指揮官の命によつて2月8日横須賀を出港高雄に向つたが，2月15日，バトリナオに対する潜水艦輸送は困難であり且航空機によつて相当敵進し得たので聯合艦隊命令によつて潜水艦による輸送は打ち切られた。

そして，イ372は回天搭載装置整備のため呉に回航せしめられた。

他方非島方面で敵艦船攻撃の任にあつたものは既述ハ項ロ50（ルソン島東方）ロ55（ルソン島西方）の2隻であつたが，2月3日ロ109が内地よりルソン西方に向つたので10日以後ロ55はコレヒドールの305度線以南ロ109は同以北に哨区が決定された。

七等3隻は2月中旬まで非島方面にあつたがこの間の戦果と潜水艦の喪失は左の通りである。

(イ) ロ50は2月10日スリガオの東南東300浬に於て輸送船1隻屠沈した。

(ロ) ロ109は2月17日リンガエン湾西方60浬に於て航空母艦，巡洋艦，駆逐艦各1隻に夫々魚雷2本を命中せしめたと信ぜられた。

(ハ) ロ55はルソン島西方海面作戦中消息不明となつた。

なお，2月16日米軍敵前部隊が南東方面に来襲し，硫黄島に対する上陸作戦近きを思わしめたので，先遣部隊指揮官は七等潜水艦を南西諸島方面を掃航の上，内地に召還し新作戦に応ずる準備を開始せしめた。

又，これより先，セブ方面にあつた甲標的な相当活躍し戦果を挙げつつあつたが（詳細は後述する。）魚雷不足を訴えつつあつたので，聯合艦隊司令部は2月14日ロ43に対し二式魚雷10本其の他附属品，治療品等をセブに輸送せしめる計画を立てたが，南西諸島又は南方諸島に対する敵の次期攻略作戦切迫しつつある情況に鑑み輸送を取止め，敵艦隊邀撃に転用するに決した。

第3項　第2次玄作戦

(イ) 11月に実施した第1次玄作戦に引続き，1月中旬第2次玄作戦を決行することとなり，着々準備も進捗したので，先遣部隊指揮官は12月中旬左の如き要旨の命令を発した。

(ロ) 作戦目的
敵機動部隊西カロリン諸島，マリアナ諸島，ブラウン，アドミラリティー，フンボルト方面前進根拠地に在泊中の好機を捕捉之を奇襲撃滅する。

(ハ) 攻撃期日
攻撃決行期日を X日（1月11日）と予定する。但し148の攻撃予定期日を Y日（1月20日）と予定する。

(ニ) 各艦の出撃予定期日，攻撃指向地域及進出要領は次の通り

艦名	出撃予定期日	経由海面	攻撃指向地区			期日	記事
			第一	第二	第三		
156	12-21	マリアナ，トラック諸島東方海面	アドミラリティー	ブラウン	／	X－8日頃	※

艦名	出撃予定期日	経由海面	攻撃指向地区 オ1	オ2	オ3	期日	記事
147	12-25	マリアナ諸島西方海面	フンボルト	アドミラリティー	—	X−7日頃	※右期日迄に何れの攻撃地区に対しても攻撃可能の地点に進出する。
136	12-30	南西諸島東方海面	ウルシー	—	—		
153	〃	〃	パラオ	クッルー	ウルシイ		
158	〃	〃	ガム	サイパン	〃		
148	1−8	〃	ウルシー	パラオ	ガム	Y−7日頃	

(四) 各潜水艦攻撃指向地区は敵情判断に基き攻撃開日の概ね7日乃至8日前頃之を特令する。
特令のない場合はオ1攻撃地区とする。

(五) 攻撃時機は月出時以後薄明迄

(六) 発進距離 200浬以内、極力接近

(四) 12月19日 聯合艦隊より玄作戦開始の命令が出されたので、先遣部隊指揮官は予定に依い攻撃地区に進出せしめた。
(但し、148は1月9日出撃)
1月3日までに148を除く各艦の攻撃地区をオ1攻撃地区とする旨指示した。

(ロ) 1月4日敵機動部隊は12月28日未台湾及南西諸島方面来襲中である状況からX日を1日延期し1月12日を指示した。

(ニ) 1月10日迄に判明した敵配備状況次の通りであつて、敵陸

地区	兵力			記事
アドミラリティー	A×1 (大傾斜)	(入渠)	C×31	10日 爆戦偵察
	B×1	T×1	α×2	
	C×1	(入渠)	T×11	
			S×2	
ホーラデア	T×50 艦艇ニ認メズ			8日 陸爆偵察

地区	兵力	記事
ウルシー	B×3 C大×8 C小×1 T大×2 T0×13 浮ドック×4	9日 彩雲偵察
パラオ	T大×21 T中×6 T小×6 α×3 浮ドック×2	6日 30Bg視認
ガム	α×4 S×1 T大×20 T小×40 浮ドック×4 特空母×1	9日 彩雲偵察

部隊は依然行動中で各前進根拠地に在泊していないが、先遣部隊指揮官は所定期日に奇襲決行を電令した。

(ホ) 1月12日金剛隊(148を除く各艦)は攻撃に移つたがその攻撃状況は次の通りである。

(1) 156(アドミラリティー、ゼアドラー港)
1月12日より15日迄夏日港口近くまで進出を試みたが敵の警戒厳重でその都度敵機に制圧され、最短距離40浬迄近接し得たが遂に攻撃の機を得ず、16日帰投を命じた。

(2) 147(フンボルト湾)
0316より0526間に4基発進、0455同艦水上避退中フンボルト湾に大火柱昇騰を認め、且つ0508フンボルト基地電波でS連送受信、4隻轟沈確実と判断した。

(3) 153(パラオ、コスソル水道)
0349より0356間に4基発進、但し、うち1基は発進直後後部火災爆発し沈没、他の1基は故障のため発進せず、搭乗員を収容し回天は沈没せしめた。
同艦は水中避退中0520、0525回天の命中による大爆発音2を聴取、オ30根拠地隊において翌13日コスソル水道東口に対する艦艇、飛行機の警戒特に厳重なのを観認した状況に鑑み、2基とも成功したものと認められた。

(4) イ58 （グム、アプラ港）

0310より0327間に4基発進、同艦は発行機を認めず々度潜航せる為命中音を聴取しなかつたが0530アプラ港より黒煙之条昇騰しつつあるのを認めた。

12日、13日マリアナ、ウルシー方面に於て被害並に救助作業附係電話が頻繁に交話した状況に鑑み全基成功したものと認められた。

(5) イ36 （ウルシー）

パロレン島の北28度6、5浬にて0342より0357の間に4基発進、ロワリユウ水道を経てウルシー島北部泊地に向つた。

同艦は発進中飛行機の制止を受けたが被害なく水中に避退し、0551、0600、0610、0613回天の命中による大爆発音を聴取した。

ウルシーで発令した「空襲警報」等より判断し全基有力艦の攻撃に成功したものと思われた。

(ハ) 1月14日、イ48の攻撃指向地区をカ1攻撃指向地区（ウルシー）とする旨電令した。尚同艦の攻撃日は21日に延期された。

同艦は其本攻後連絡を行わず、遂に消息不明となつたため攻撃状況は不明であるが、1月22日ウルシーの飛行偵察に依り、同艦の攻撃予定地たる中部泊地に油槽船1隻沈没しあるのを確認したので同艦は予定通り1月21日2200より、2400の間にマガヤン礁の153度10浬に於て回天を発進し、ウルシー中部泊地の攻撃に成功したが、爾後制圧を受け電報発信の機を得なかつたものと推定された。

(ト) かくて148は未帰還となつたが、136は1月21日、158は22日、153は26日、147は2月1日、156は2月3日何れも呉に帰着しかく次玄作戦は終了した。

なお、当時これ等の線合戦果は、特空母1、大型輸送船9、

油槽船1、巡洋艦1、空母、戦艦、輸送船を有む有力艦船6計18隻を撃沈したものと判定された。

そして金剛隊に対し感状が授与された。

第4項 イ1号の作戦

イ1号は10月初旬内地を出港し、北米西岸から南太平洋を経て、1945年1月中旬頃内地に帰着する予定で海上交通破壊戦に従事中であつたが、同艦は内地出発以来其の行動、予定等について一切電報々告かなされず、又、出発前先遣部隊指揮官は同艦の作戦行動に対し細部の指示はしなかつたので、その所在行動戦果等については米西岸海面防衛指揮官の聯合国全船に対する警告又は敵信情報によつて推定し得るに過ぎなかつた。

そして12月19日先遣部隊指揮官は同艦に対し内地帰還を令したが1945年1月5日北緯14度東経171度附近に於て発見された如き情報を得た後は遂にその消息が不明となり未帰還となつた。

当時先遣部隊指揮官がイ1号の所在及戦果等について得た判断は左の通りである。

(イ) 10月30日頃北緯27度西経145度で輸送船2隻を撃沈

(ロ) 12月9日推定位置南緯8度西経175度

(ハ) 12月下旬中部太平洋に於て大型油槽船、輸送船各1隻を撃沈。

(ニ) 1月4日推定位置北緯16度東経179度

(ホ) 1月5日推定位置北緯14度東経171度附近で被発見。

第5項 第7潜水部隊の作戦

第7潜水部隊は引続き太平洋方面輸送作戦に従事していたが、12月中旬には、イ363、イ366、イ367の3艇が行動中であつて、12月末乃至翌年1月前頃には横須賀に帰着する状況であつた。（前章既述）

そして横須賀には当時イ361、イ362、イ371の3艇が休養及輸送準備を整えつつあつた。

（註）(1) 1371 は 1944年12月6日第7潜水戦隊に編入され12月10日には呉より横須賀に到着した。

(2) 1369 は 1944年12月15日に第7潜水戦隊に編入されたが横須賀には12月22日に到着した。

(3) 1945年1月5日1372が第7潜水戦隊に編入されたが同艦の横須賀着は1月中旬であった。

上の如き状況に於て、12月末より翌年2月上旬迄の間に左の如き輸送が実施された。

(イ) 1371　12月30日横須賀発1月18日トラック着、主として弾薬、糧食、燃料を揚陸し、1月25日メレヨン着燃料　糧食を揚陸の上人員若干を便乗せしめトラックに寄港、1月31日　トラック発横須賀に向ったが、遂に入港せず未帰還となった。

(ロ) 1362　1945年1月1日メレヨン及トラックに輸送のため横須賀を出港したが、予定日の21日メレヨンに入港せず、2日5日呼したが応答なく消息不明となった。

(ハ) 1361　1月9日横須賀発ウエーキ島に向い同月22日到着、弾薬、糧食を揚陸し人員を収容の上帰途につき2月7日横須賀に帰着した。

(ニ) 1369　1月21日南鳥島に向け横須賀発28日到着、弾薬、糧食を揚陸、便乗者を収容し2月5日横須賀に帰着した。

(ホ) 1366　パガン輸送を終えて12月28日横須賀に帰着した、同艦は休養、整備の後1月29日トラック、メレヨンに向け横須賀を出港した。

同艦は2月12日トラックに到着し、ラバウル行物件の外、重油（33屯）糧食等を揚陸し、メレヨンに送るべき甘藷（2屯）を搭載の上メレヨンに向い16日メレヨン着、燃料、潤滑油（4屯）甘藷、其の他糧食を陸揚し、工員42名を収容し、3月3日横須賀に帰

着した。

(ヘ) 1372　1月8日第7潜水戦隊に編入された同艦は、1月中旬以降横須賀で訓練していたが、既述の通2月6日聯合艦隊命令によつてバトリナオ輸送に充当せしめられ8日急拠横須賀を出港し高雄に向つたが、15日バトリナオ輸送が中止されたので、呉に回航を命ぜられ20日頃呉着、回天搭載装置の工事に着手した。

輸送の状況は以上の通りであるが、2月中旬に於ける第7潜水部隊の動静を一覧表にすれば次の通りである。

艦名	動静
1361	横須賀在泊中（2月7日ウエキーより帰着）
1362	メレヨンに向いたるまま消息不明
1363	横須賀在泊中（12月26日南鳥島より帰着）
1366	トラック、メレヨン輸送実施中
1367	横須賀在泊中（1月1日ウエキーより帰着）
1369	〃　（2月5日南鳥島より帰着）
1371	トラックより横須賀に向いたるまま消息不明
1372	バトリナオ輸送を中止、呉に向け帰投中

（附　録）

菲島方面に於ける小型潜水艦（甲標的）の作戦

（自　1944年12月上旬
至　1945年　3月下旬）

菲島方面に於ける潜水艦作戦については前章までに述べた通りであるがこの外に特殊の作戦として、真珠湾攻撃又はシドニー攻撃に使用されたと同様の小型潜水艦による作戦が、ミンダナオ海を中心として1944年12月より1945年3月に亘つて実施された。本作戦は菲島方面に於て実施された元豊部隊の潜水艦作戦とは全然別個に南西方面艦隊長官の指揮下にあつて作戦したものであり、生存者の記憶に基いて調査綜合したものであつて概略左の通りである。

第1　本作戦を実施するに至つた経緯

特型格納筒又は甲標的と呼称された小型潜水艦は、開戦当初真珠湾に対する奇襲に用いるため急遽に整備され、潜水艦に搭載されて真珠湾に進出して作戦に参加し、又、シドニー、ディエゴスアレス及ガダルカナル方面に於ても潜水艦に搭載の上作戦地に進出し、敵の基地に近接した後、潜水艦から離脱し自力で作戦に従事した。

其の後正規潜水艦の減少を補う意味と、守勢にある我基地の防衛的兵力として、1944年中期頃より菲島方面の基地に配備されることとなり内地より水上艦船によつて輸送された。

斯くして進攻的奇襲兵力から防衛的奇襲兵力に其の使用方針を改め、基地を中心として其の行動可能圏内で自力を以て作戦せしめられることとなつた。

菲島方面に於てこの甲標的が配置されたのは次表の通りである。

配備地	隻数	配備地到着時期
セブ	4	1944年10月
	2	〃　12月
ザンボアンガ	2	〃　9月
ダバオ	2	〃　8月
備考	ザンボアンガの2隻は1945年1月自力を以てセブに回航し其の指揮下に入つた。	

セブに配備されたものは、サンベルナルヂノ海峡及スリガオ海峡防衛の目的にするものであつて、セブ配備の甲標的のみが作戦しダバオ配備のものは作戦せずして終戦となつたので以下セブ配備のものについて記述する。

第2　作戦経過の概要

(1)　指揮系統

セブに配備された甲標的は西南方面艦隊第3特別根拠地隊司令官（大西瀧治郎）の直接指揮下に編入されたが1945年1月以降はザンボアンガ配備のものも同司令官の指揮下に編入されセブに於て合同した。

(2)　基地

基地はセブ島のセブとしその設備及附近施設を利用し充当補充修理等の能力を備えた。

尚、1944年7月以降艦隊戦時編制によつて第6艦隊に第1潜水艦基地隊が新設配属されたが、同基地隊は作戦に関しては第3特別根拠地隊司令官の指揮下に置かれ、各部隊潜水艦の整備補給、休養の任務を与えられていた。そして同基地隊は潜水艦の基地任務の活動を未だ開始しない1944年9月中旬に敵の空襲によつて潰滅したが、爾後もセブ所在の上陸小型潜水艦に対しては基地としての任務を遂行した。

(3)　行動海域及行動要領

1944年10月中旬レイテ島に米軍上陸後、11月上旬よ

リノ々月上旬に亘つてはオルモツク海に交代にて進出して哨戒に従事したが一行動の日数は4乃至7日であり、搭乗員の疲労甚だしく殆んど効果はなかつた。

1944年12月以降は米輸送船団がミンダナオ海よりスル海に航過するもの増加せるためこの攻撃を企図し、その攻撃海面をネグロス島南端とミンダナオ島北端との最狭部に設定し、スリガオに設置した見張所の報告によつて、甲標的はツマゲラ前進基地から攻撃海面に進出待機し攻撃を実施した。

勿論甲標的数が僅少なため船団通過の報を得ても攻撃に従事し得るものが皆無であつた場合もある。

同時期に集団的に甲標的を使用したこともあるが3隻を限度とした。

(ニ) 戦果及被害の概要（記憶に基くため正確を欠く）

年	月日	記事
1944年	12月8日	オルモツク湾にて哨戒中の駆逐艦1隻撃沈
	12月某日	甲標的1隻セブ港内にて生残帰着
	12月18日	シキホール島附近にて輸送船2隻撃沈
1945年	1月3日	ミンダナオ海にて駆逐艦1隻撃沈、船団混乱し輸送船2隻衝突沈没
	1月5日	ミンダナオ海にて駆逐艦1隻及艦種不詳1隻撃沈
	1月5日	甲標的1隻未帰還；但しミンダナオ海にて大型巡洋艦1隻撃沈したと推定される
	1月25日	甲標的3隻ミンダナオ海に出動し輸送船3隻水上戦闘艦1隻撃沈
	1月末	甲標的1隻使用不能となり帰着
	2月13日	ミンダナオ海にて駆逐艦1隻撃沈
	2月21日	〃 大型巡洋艦1隻撃沈
	3月17日	〃 輸送船2隻撃沈
	3月21日	〃 輸送船1隻撃沈
	3月26日	米軍セブ島に上陸、当時セブ方面所在甲標的は7隻あり、4隻はセブ港にて自沈、1隻はツマゲテにて自沈。同日以降甲標的乗組員は陸戦隊員に編入されセブ各地を転戦し終戦に至つた。

（終）

第二篇

第三段作戦に於ける潜水艦作戦

其の五

（自 1945年 3月
至 終戦）

備　　考

この戦史は、元海軍大佐渋谷健氏が執筆したものであつて、左の各巻と一連のものである。

第一段作戦に於ける潜水艦作戦の概況		(自 1941年12月 至 1942年4月)
第二段作戦に於ける潜水艦作戦	其の一	(自 1942年4月 至 1942年8月)
〃	其の二	(自 1942年8月 至 1943年3月)
第三段作戦に於ける潜水艦作戦	其の一	(自 1943年3月 至 1943年11月)
〃	其の二	(自 1943年11月 至 1944年3月)
〃	其の三	(自 1944年3月 至 1944年9月)
〃	其の四	(自 1944年9月 至 1945年2月)

第一章　自一九四五年二月下旬至一九四五年三月中旬　潜水艦作戦

第一節　一九四五年二月中旬に於ける一般情勢

第一項　一　般　情　勢

一九四五年二月三日マニラに侵入した米陸上軍は引続き大部隊を増援して、其の圧倒的航空兵力の下に一挙に全比島を席捲せんとする態勢にあつた。

その一方、我比島派遣軍並に南西方面艦隊は各所に於て邀撃戦を展開しつつ、主力をバギオ方面に集結し長期出血作戦を策しつつあつた。又我基地航空部隊は極力比島方面制空権の奪回に努めたが成功せず、二月上旬以降逐次台湾に転進し、その攻撃態勢を整えつつあつた。

米機動部隊を中心とする海上部隊は二月初頭以後マリアナ、マーシャル方面に於て新作戦準備中と推定されたが、その指向方向については確定的な判断を下し得ず、二月十日頃の聯合艦隊敵情判断によれば、「二月中旬以降敵機動部隊に依る本土空襲、二月下旬小笠原諸島、又は三月以降南西諸島方面に対する敵の攻略企図に対し警戒を要する」状況にあり、二月十三日には通信諜報により「敵機動部隊は二月十一日午後マリアナ方面を出撃したものの如く次期攻略作戦の時期は極めて切迫した」と認められた。

二月十六日早朝より敵艦上機が京浜地区、房総方面飛行場及び硫黄島に来襲し、敵の新作戦開始を思わしめたが、聯合艦隊は当時の情況に関し左の判断を下した。

(イ)敵は関東方面航空撃滅戦を実施した後南方諸島に上陸する企図を有する。但し、敵の上陸方面は南西諸島となる算なしとしない。

(ロ)敵機動部隊は三群で数日間本土空襲を続行すると判断する。九州方面を攻撃する算もある。

(ハ)南方諸島攻略に際しては、我陣地の捜索的攻撃を実施すると共に、囮船団を利用する算がある。

(ニ)我が航空部隊及び水上艦艇を以て上陸阻止作戦を実施するのは、我が母艦航空兵力皆無なる情況に鑑み不可能である。

(ホ)第三航空艦隊の選抜兵力及び先遣部隊の一部兵力を以て、硫黄島周辺の敵艦船の奇襲攻撃を行うと共に、同島所在の陸上部隊を以て敵の上陸を阻止反撃する。

かくて聯合艦隊は「捷三号作戦警戒」、引続き「基地航空部隊捷三号作戦発動」を令し、先遣部隊指揮官は一部潜水艦兵力の硫黄島方面進出を準備した。

ヘ二項　潜水艦関係艦隊戦時編制及び兵力部署

一九四五年二月十五日現在に於ける潜水艦関係艦隊戦時編制は別表第一の通りである。

但し、◎印の潜水艦は当時既に消息不明であった。

なお、当時の潜水艦関係兵力部署は別表第二の通りである。

別表第一　潜水艦関係艦隊戦時編制（一九四五年二月十五日現在）

区分			
艦船部隊	6SS	15SS	1SS
	㋐1	154◎ 126◎	113
	㋐3	156 136	1400
	㋐6	158 137◎	1401
	7◎	138◎	
	9	141◎	
	0	144	
	5	145◎	
	6	146◎	
	9	147	
	20◎	148◎	
	—	153	
前進長官			
司令官			

別表第一　潜水艦関係艦隊戦時編制（一九四五年二月十五日現在）

区分	6F				7SS	8SS	GE1	呉鎮		横鎮
	1S	15S	34S	1 8				呉防戦	呉SS	
艦船部隊	113 1400 1401	126◎ 136 137◎ 138◎ 141◎ 144 145◎ 146◎ 147 148◎ 153	41 43 46 47◎ 49 50 55 56 109 112◎	112◎	1361 1362◎ 1363 1365◎ 1366 1367 1368 1369 1370 1371 1372 101 102 104	113◎ 115◎	101長 3 7隻	62 68 500	335S 195S 201 121 202 122 63 155 64 156 67 157 158 159 162 165 那智丸	6S 57 58 59
前進指揮所	6F						GEB	呉鎮		横鎮
司令官	1SS				7SS	8SS		呉防戦	呉SS	

別表ホ二　潜水艦関係兵力部署

部隊	E B					NSB	GEB	各鎮守府部隊	備考
	1SSB		7SSB	11SSB	附属	8SSB	附属		
兵力	158	1558	1361	1351 長	沖三十一潜水艦基地隊		ハ106	省略	艦隊戦時編制表には含まれていて、未だ除籍されていないが、実際には消息不明中である潜水艦は本表から除いた。
	113	136	ハ102 1363	ハ103	沖六三航空隊				
	1400	144	ハ104 1366	ハ107 鯨					
	1401	147	1367						
		153	1369						
		156	1371						
		158	1372						
指揮官	6F		7SS	11SS		NSF 8SS	GEB		

部隊	1SS B				備考
	158	1558	3458	1 8	
兵力	113	136	口41	1368	
	1400	144	口43	1370	
	1401	147	口46		
		153	口49		
		156	口50		
		158	口55		
			口56		
			口109		
指揮官	6F				

第二節　先遣部隊の作戦

第一項　先遣部隊の作戦計画

(イ)一九四五年二月十五日に於ける先遣部隊の兵力部署は前節別表第二の通りであるが、当時先遣部隊兵力の所在及び任務の概況は下の通りであつた。

部隊	兵力	所在及任務
	イ13　1400　1401 ロ43	内海西部に於て訓練
	136　144　147 153　156　158	呉方面に於て整備中
	イ8	横須賀に於て修理完成、十四日呉着訓練を開始
1SsB	ロ41　ロ49　ロ56	舞鶴に於て整備中
	ロ46	バトリナオ作戦輸送を終り呉に帰投中（十九日呉着）
	ロ50	レイテ東方より呉に帰投中（二十日呉着）.
	ロ55　ロ109	ルソン西方に於て作戦中
	1368　1370	呉方面に於て回天攻撃作戦準備中.
7SsB	1361　1363　1367 1369	横須賀方面に於て整備中
		トラック、メレヨン作戦輸

	イ366	送中、二月十五日頃メレヨン着の予定
	イ371	トラック、メレヨン作戦輸送中、二月二十二日横須賀着の予定
7SSB	イ372	パトリナ大作戦輸送中の処十五日取止めとなり呉に帰投のこととなつた
	ハ101	呉方面に於て整備訓練中
	ハ102	呉より横須賀に回航中
	ハ104	横須賀に於て整備訓練中
1155B	イ351 ハ103 ハ107	呉方面に於て訓練中

(四)一九四五年一月十六日聯合艦隊司令部は聯合艦隊当面の作戦指導腹案を示したが、潜水艦作戦に関する要旨は左の如きものであつた。

(一)潜水艦の大部を以て菲島方面に於ける敵機動部隊及び攻略部隊の捕促撃滅並びに敵補給路の攻撃を実施する。

(二)一部の潜水艦を以て回天による奇襲作戦を実施する。その攻撃要領は左の通りである。

(1)敵上陸正面に於て敵艦艇を捕捉攻撃する。

(2)菲島東方海面にて主として敵船団を捕捉攻撃する。

(3)敵前進根拠地に於て航空母艦、戦艦又は浮船渠を攻撃する。

(三)一部大型潜水艦を以て敵後方連絡線の攪乱を実施する。

(四)爾余の潜水艦を以て中部太平洋離島に対し作戦輸送を実施すると共に菲島に対する作戦輸送に努める。

(八)右の如き聯合艦隊当面の作戦方針に基いて、先遣部隊指揮官は

先遣部隊作戦要領を定めたが、其の概要は下の通りである。

(一)イ44を除く第十五潜水隊(イ36 イ47 イ53 イ56 イ58)は次期玄作戦(回天を以てする攻撃作戦)の準備を実施する。

(二)イ368 イ370 イ44を以て玄作戦を準備中であつたが、リンガエン方面泊地にある敵船団の攻撃を実施する。

(三)中小型潜水艦は菲島方面に於ける敵機動部隊及輸送船団の攻撃に仕ぜしめることとし、可動隻数に鑑み菲島東方に常時一乃至二隻 爾余は北菲に配することとする。

(四)敵後方連絡線の攪乱にはイ8を充当する。

(五)第七潜水戦隊は引続き中部太平洋島嶼に対する作戦輸送を実施する。

(六)回天による攻撃は泊地のみならず、航行艦の襲撃可能なる如く、回天搭載潜水艦長、回天搭乗員の訓練を実施する。(潜水学校、第一特別基地隊の協力を求める。)

(二)二月中旬敵硫黄島攻略の企図が判明したので、先遣部隊指揮官は前記の計画を一部変更して硫黄島方面敵撃作戦の腹案を左の通り決定した。

(一)先遣部隊は極力出撃準備を促進し、準備出来次第逐次出撃し、硫黄島攻略部隊又は機動部隊に対し反覆攻撃を敢行する。

(二)回天作戦可能潜水艦は、回天攻撃を実施する。

(三)第七潜水部隊より輸送潜水艦二隻に弾薬其の他を搭載の上、横須賀及び呉に各一隻を待機せしめ機を得次第、硫黄島に輸送を実施する。

(四)第二次丹作戦(第一基地機動航空部隊の銀河二十四機を以てするウルシーの奇襲攻撃)に無線誘導潜水艦一隻を協力せしめる。

第二項 先遣部隊の作戦経過概要

(イ)硫黄島方面に於ける作戦

(一)敵機動部隊は二月十六、十七日関東地区に来襲すると共に硫黄島方面に策動を開始し、次いで十九日迄にマリアナ方面待

幾中の攻略部隊を以て硫黄島に上陸を敢行した。

しかし二月十六日敵機動部隊が関東地区に来襲した当時は敵の企図に対する明確な判断は不能で、或は南西諸島方面に本格的な作戦が開始されるかも知れぬ虞があつたので、先遣部隊指揮官は出撃準備中であつたロ43を至急南西諸島東方海面に進出せしめることに決定し、又菲島方面より帰還の途にあつたロ46 ロ50をして南西諸島東方海面を掃航索敵しつつ北上せしめた。

更に、ルソン島西方海面にあつたロ55 ロ109の配備をも南西諸島南東海面に変更した。

しかし翌十七日に至つて、敵の硫黄島攻略の企図が明確となつたので、呉を出撃南下中のロ43の作戦海域を南方諸島に変更し、ロ46 ロ50 ロ55 ロ109に対しては内地帰還を令した。

（ロ46は十九日ロ50は二十日呉にロ109は三月二日佐世保に帰着したがロ55は菲島方面作戦中沈没した算が大で未帰還となつた。）

十七日以降硫黄島方面に向つたロ43は爾後同島周辺で行動したが、確実な戦果不明のまま、遂に未帰還となつた。

(二)二月十八日硫黄島に対する第一次上陸に失敗した米軍は、なお、益々砲爆撃を熾烈化し強引に上陸を試み十九日早朝同島に上陸を開始した。

ここに於て先遣部隊指揮官は玄作戦準備中の1368 1370 144を以て回天特別攻撃隊千早隊を編成することとし下の如き命令を発した。

(1)1368 1370 144を以て回天特別攻撃隊千早隊を編成し、先遣部隊指揮官直率とする。

(2)1368 1370 は各回天五基、144は回天四基を搭載の上内海西部を出撃、硫黄島方面に進出し敵艦船を奇襲する。

出撃期日 1368 二月二十日 1370 二月二十一日

144 二月二十二日

(3)1368 1370 は奇襲決行後呉に帰投する。

(4)144 は回天による奇襲決行後硫黄島方面海域に於て敵艦船攻撃を続行する。

以上の命令に基いて各潜水艦は命令所定の日に回天訓練基地大津島より勇躍出撃して硫黄島に向つた。そして二十五日頃には何れも戦場附近に到達するものと予想されたが、通信連絡なく、1368 1370の両艦は硫黄島近海において敵有力艦を攻撃した後沈没したものと推定された。

144は三月一日硫黄島の二九〇度一五〇浬附近において沖大東島に向う旨の電を発したので、先遣部隊指揮官はその行動を怪しみ同艦に問合せたところ、「二十七日朝硫黄島の南五十浬に於て敵の制圧を受け、同島に対する回天攻撃は困難と認めた」由の返電を得たので、先遣部隊指揮官は再度硫黄島方面敵艦船の攻撃を指令したが、三月六日に至り同艦に対し内地帰還を令した。

（144は三月十一日呉に帰着し、その行動は艦隊司令部の意図に添わないものとして潜水艦長の更迭が行われた。）

(三)硫黄島に橋頭堡を獲得した敵は着々其の地歩を堅め、我地上部隊も猛反撃を試みたが、我地上守備軍に対しては基地航空兵力の一部及び潜水艦のみがその作戦に協力するに過ぎず、月末には敵は新編攻略部隊を注入する態勢にあつた。

先遣部隊指揮官は二月二十八日に至り136 158を硫黄島方面に増勢するに決し、両艦を以て神武隊を編成し、各艦回天四基を搭載し至急出撃すべき旨発令した。

かくして158は三月一日 136 は三月二日呉を出撃し夫々目的地たる硫黄島方面に向つた。

三月六日頃硫黄島陸上戦斗は激戦展開中で、我軍は同島北部に在つて敢斗中であつたが、既に勝敗の帰趨は明かであつたので、聯合艦隊司令部はロ43 1368 1370 の消息不明にも

鑑み神武隊の長期作戦を断念し、先遣部隊に対し硫黄島方面に於ける潜水艦作戦の中止を令した。

この作戦中止命令に基き先遣部隊指揮官はイ36に対し呉に帰投を命じ、イ58に対しては後述のヲ二次丹作戦協力任務に就かしめた。

イ36は三月十日呉に帰還した。

(ロ)ヲ二次丹作戦協力

ヲ二次丹作戦(ウルシー在泊の敵機動部隊に対する基地航空部隊銀河の長距離奇襲作戦)は、一九四五年二月上旬頃より聯合艦隊に於て研究され二月十七日本作戦が発令された。(詳細は航空作戦史参照)

しかし、敵機動部隊は当時硫黄島作戦のため行動中であり、丹作戦の実施が不可能であったか、三月七日にはウルシー帰投の情報があり、九日ヲ四艦隊の彩雲がトラックよりウルシーを偵察した情報によって三月十日決行のこととなった。

ヲ二次丹作戦の攻撃隊は銀河二十四機で編成され、鹿屋を発進し、長駆ウルシー在泊の敵機動部隊を奇襲するもので、潜水艦は中間地点に於ける無線誘導及び不時着機救助の任務が与えられた。

そして聯合艦隊司令部は三月五日之等に協力すべき潜水艦を海上護衛部隊附属のハ106及び先遣部隊の潜水艦一隻と決定した。そして同日聯合艦隊命令によって、ハ106はヲ一基地機動部隊指揮官の指揮を受け、南大東島に不時着するやも知れぬ丹作戦搭乗員の收容還送任務につかしめられ、三月九日　鹿屋発南大東島に向った。先遣部隊指揮官は三月六日丹作戦協力潜水艦をイ58に指定し、同艦は硫黄島方面より急速移動の上十日日出迄に沖ノ島西方十浬附近に待機し、ヲ二次丹作戦当日同地点に於て左の要領によって誘導電波を輻射する様発令した。

(イ)輻射要領一〇〇〇乃至一二〇〇の間毎時の始長符二回、識別符「セ」の順に約二分間連送。

(ロ)誘導電波　三二一KC

(ハ)X日は十日と予定する、X日の指定は当日〇二〇〇迄に通知する。通知なき時は電波は輻射しない。

(ニ)電波輻射位置は指定位置を中心とする半径一〇浬圏内とする。

ヲ二次丹作戦は予定通三月十日〇三三〇天候偵察飛行艇の発進によって開始されたが、ウルシーの天候不良の為、攻撃隊出発後であったが作戦を一日延期することとなった。

かくて翌十一日改めて作戦が決行され、イ58は其の任務を達成した。そして先遣部隊指揮官の命によって帰還の途につき三月十七日呉に帰着した。

なお、攻撃隊の一部で南大東島に不時着したものがあり、ハ106は搭乗員を收容して十三日鹿屋に入港した。ハ106は三月十日附呉潜水戦隊に編入替となり呉に回航した。

(ハ)中型潜水艦の作戦

三月九日聯合艦隊司令部は中型潜水艦を以てする補給路遮断作戦を企図し、硫黄島、マリアナ及び比島に対する補給路攻撃を命じた。そして先遣部隊指揮官は中型潜の行動力に鑑み配備点並びに待敵期間等に関し下の腹案を指示した。

ロ49　マーシャルよりカロリンに対する補給路遮断
　配備点トラックより東、待敵期間一週間

ロ41　カロリンよりウルシー、マリアナに対する補給路遮断
　配備点トラックの西、待敵期間約十日

ロ56　ウルシーより比島に対する補給路遮断
　配備点ラモン湾東方、待敵期間二週間

そして三月十日準備完了したロ41は先ず呉を出撃(三月上旬同艦は舞鶴より呉に回航した)したが、十三日聯合艦隊司令部は敵の南西諸島方面に対する本格的攻勢が予期以上に早期となると判断したので先に発令した補給路遮断戦を取止め、南西諸

島方面に来攻することあるべき敵に対し待敵せしめることとした。

かくて先遣部隊指揮官はロ41に対し、一応呉帰還を命じたので同艦は三月十五日呉に帰還した。

当時先遣部隊指揮官はロ41　ロ49　ロ56及びイ8の待機位置に関して慎重検討を重ねたが、米軍の次期作戦の指向方向及び来攻時期が依然不明であつたので、戦機を失せず各艦が戦場に到達し得ること、しかも過早に戦場に進出して無為に行動力を減退せしめない見地より、之等の各艦を佐伯に進出待機せしめることに決した。

佐伯に待機せしめた理由は左の通りである。

(一)呉に於て待機せしめるのは航空索敵能力の現状よりみて戦機を失する虞がある。

(二)鹿児島に進出のことも一応考慮されるが司令部との連絡、補給並びに各艦の敵情知得上不利である。

(三)各艦の訓練状況に鑑み尚極力訓練に従事せしめる要がある。

以上の結論に基いて、先遣部隊指揮官は三月十六日イ8　ロ41　ロ49　ロ56に対し佐伯に進出を令した。

翌十七日通信諜報により、十四日敵機動部隊はウルシーを出撃した算が大であると判断されたのでロ41　ロ49　ロ56は十八日先遣部隊指揮官の命によつて佐伯を出撃し九州南東海面に向つた。

なお、イ8は潜望鏡故障のため修理を行い二十日出撃のこととなつた。そして之等の潜水艦を以て甲潜水部隊が編成された。

(二)硫黄島守備部隊の状況

硫黄島に於ける陸上戦斗は三月七日頃依然として激戦展開中であつたが、次第に同島北部に圧迫せられ第二十七航空戦隊司令部至近にも敵を見る状況となり、既に大部の暗号書も焼却した旨の報告があつた。

かくて、遂に三月十七日同島守備部隊は全員戦死したものと認

められた。

(ホ)輸送作戦

第七潜水部隊の各潜水艦は、横須賀を基地として太平洋方面離島に対する作戦輸送を主任務としたが、一部潜水艦は本土防衛作戦の見地から輸送任務を一擲し、攻勢に転ずる準備のため回天搭載施設の整備に専念したものもあつた。

その概況は下の通りである。

(一)輸送状況（二月中旬より三月中旬迄の）

イ371　トラック、メレヨンに対する輸送を終り二月二十二日横須賀帰着の予定であつたが、帰途沈没したものの如く未帰還となつた。

イ366　二月十二日トラック着、同十六日メレヨン着輸送に成功し三月三日横須賀に帰着した。同潜水艦長は帰途会敵したが発射管なきため遂に攻撃不能となつたため、帰還右発射管の急速装備を強く進言した。

イ363　三月五日横須賀発南鳥島に対する作戦輸送に成功し、三月二十日帰着した。

イ369　三月十二日横須賀発父島に対する作戦輸送に成功し、三月二十一日帰着した。

(二)回天搭載装置の整備状況

イ361は二月上旬よりイ367は一月初旬より横須賀に於て工事に着手し、整備後夫々訓練に従事した。

イ363　イ366は前項の輸送を終り横須賀に帰着した以後これ等の工事に着手した。

(三)其の他のもの

イ369及びイ372は国内に於ける航空用揮発油の欠乏に伴い、之が補給のため、その搭載施設の整備に着手する準備がなされた。

ハ101　ハ102　ハ104は整備及び訓練に専念しつつ

あつた。

輸送潜水艦各艦の状況は概ね前記の通りであつたが、三月二十日艦隊戦時編制の改編に際し沖七潜水戦隊は解隊され、回天搭載可能潜水艦であるイ361　イ363　イ366　イ367は15sgに編入く当時既に消息不明であつたイ362　イ368　イ370　イ371も)されて、回天攻撃作戦に従事することとなり、イ369　イ372　ハ101　ハ102　ハ104をもつて新に16sgが編成され、沖六艦隊長官直率のもとに輸送作戦任務を継承することとなつた。

第二章　昭二九四五年三月下旬～昭二九四五年五月下旬潜水艦作戦

第一節　一九四五年三月下旬に於ける一般情勢

第一項　一般情勢

(イ)硫黄島を攻略した米軍は三月上旬より其の飛行場の使用を開始し、又マリアナ方面よりするB29の都心無差別爆撃を激化しつつ次期攻略作戦を準備中であつたが、三月十八、十九日九州南部、四国、及び呉方面に対する機動部隊の大空襲によつて、新な作戦を開始した。即ち米機動部隊は前記両日に亘つて本土西部の航空基地を制圧し、呉在泊艦船を攻撃して打撃を加え、二十三日以降は沖縄方面に転じて空襲を続行し、二十五日には慶良間群島に上陸を開始した。かくて沖縄の一角に地歩を占めた米軍は四月一日その主力を以て沖縄本島北飛行場正面に本格的攻略の手を延ばした。

(ロ)我軍は硫黄島防衛に当り既に航空母艦を主軸とする機動海上航空兵力皆無のため、沖三航空艦隊の一部兵力と、潜水艦兵力を以て硫黄島周辺の敵艦船及び敵上陸軍に対し断続的攻撃を実施したにとどまり、硫黄島守備部隊は単独敢斗之努め敵上陸軍に多大の出血を強要したが、三月十七日頃迄には概ね全員玉砕した。

三月十八、十九日の敵機動部隊の本土西部地区空襲時には、沖三航空艦隊は航空兵力の温存に努め、一部兵力を以て対応し、本格的攻略に備えていたが、二十五日敵が沖縄攻略を開始したので同日「天一号作戦警戒」を発令し、翌二十六日「天一号作戦発動」となり、沖五航空艦隊と陸軍沖六航空軍を以てする天号航空作戦(沖縄方面航空作戦)が開始された。

(ハ)航空部隊の総攻撃に呼応し、潜水部隊も三月十八日以降作戦可能の全力を沖縄方面に投入することとなつたが、之と同時に第

国海軍可動の全水上兵力ともいうべき第一遊撃部隊即ち、第二艦隊司令長官伊藤整一中将指揮の大和、矢矧及び駆逐艦八隻を以て特攻部隊を編成し、沖縄方面敵艦船攻撃の目的を以て沖縄泊地突入作戦が計画された。

この作戦は我海軍の最後的の計画的作戦であり、必死の決意を以て四月六日内海西部を出撃したが、途上に於て敵航空部隊の攻撃を受け其の大部を失う悲運にあい遂に突入作戦を中止した。ここにおいて我水上艦船部隊は、実質上其の姿を消したので、爾後聯合艦隊としては、航空部隊と潜水部隊及び水上水中特攻兵力（震洋、回天、蛟竜、海竜等による特攻戦隊）による作戦に移行せねばならぬ状況に立至った。

第二項　潜水艦関係艦隊戦時編制、兵力部署及各潜水艦の動静

(1)一九四四年八月十五日の艦隊戦時編制改定に際し、第七潜水戦隊は輸送専用の潜水艦を以て編成され爾来主要任務として離島に対する輸送作戦を実施してきたが、一九四五年初頭頃より作戦全般の重点が本土防衛に指向され、太平洋の遠隔地に存在する離島に対しては物資の輸送補給も兎角途絶え勝ちとなる状態であった。

又、事実各離島に於ても栄養失調の為倒れる者が増加する一方自活態勢も漸次整えられたので、第七潜水戦隊の潜水艦を作戦輸送よりも本土防衛作戦に転用せんとする意向が強くなったのも当然であった。

かくて一九四五年三月二十日の戦時編制改定によって第七潜水戦隊は解隊され、伊三六〇型潜水艦の大部分は一五五号に編入し、回天搭載施設を整備の上積極的に対敵攻撃作戦に使用することとなった。

そして一部の伊三六〇型潜水艦とハ一〇〇型潜水艦を以て新たに一六五号を編成し第六艦隊司令長官直率の下に作戦輸送を継続することとなった。

一九四五年四月一日に於ける潜水艦関係戦時編制は下表の通り

である。但し同表中※印の潜水艦は当時既に消息不明中のものである。

区分		艦船部隊
第六艦隊	一五五号	（伊一三　伊四〇〇　伊四〇一） 伊一三六　伊一四四　伊一四七 伊一四八※　伊一五三　伊一五六 伊一五八 伊一三六一　伊一三六二※　伊一三六三 伊一三六六　伊一三六七　伊一三六八※ 伊一三七〇※　伊一三七一※
	一六五号	伊一三六九　伊一三七二　ハ一〇一 ハ一〇二　ハ一〇四
	三四五号	伊一五六　伊一六二　伊一六五 ロ四一　ロ四六　ロ四九 ロ五〇　ロ五五※　ロ五六※ ロ一〇九　ロ一一二※　ロ一一三※ ロ一一五
		伊八　伊一一二※
	第十一潜水戦隊	長鯨 伊三五一　ハ一〇三　ハ一〇五
	附属	第六三一航空隊 第三十一潜水艦基地隊
聯合艦隊附属	第十特攻戦隊	ハ一〇九

区分		艦船部隊
呉鎮守府部隊	呉潜水戦隊	19隻 (イ121 イ122 イ155 イ157 イ158 イ159) 33隻 (イ201 イ202 ロ63 ロ64 ロ67 ハ106 ハ107) 那智丸
	呉防備戦隊	ロ62 ロ68 ロ500
横須賀鎮守府部隊	附属	6隻 (ロ57 ロ58 ロ59)

上の編制表に示す通り従来呉潜水戦隊にあつた海大型旧式潜水艦（イ156 イ162 イ165）も逐次回天搭載装置を整備し、本土防衛の第一線兵力として四月一日第六艦隊に編入されたが、四月二十日以はイ157 イ158 イ159も追加編入された。

なお、二月上旬頃竣工と同時に呉潜水戦隊に編入され基礎訓練を終了した水中高速潜特型艦 イ201 イ202 の二隻も四月中旬には第十一潜水戦隊に編入替して本格的の訓練に従事することとなつた。

(ロ)艦隊戦時編制に於ける第六艦隊兵力は、先遣部隊として第六艦隊司令長官の指揮下で作戦を続行したが、三月下旬に於ける先遣部隊の兵力部署は下表の通りであつた。

区分	指揮官	兵力	主要任務
主隊		6F 司令部	全作戦指揮
1ssB	第六艦隊 司令長官 中将三輪茂義	イ13 イ400 イ401 イ36 イ44 イ47 イ53 イ56 イ58 イ361 イ363 イ366 イ367 イ8 イ156 イ162 イ165 ロ41 ロ46 ロ49 ロ50 ロ109	1、敵艦船奇襲攻撃偵察哨戒 2、交通線破壊 3、敵機動部隊邀撃 4、作戦輸送
7ssB		イ369 イ372 ハ101 ハ102 ハ104	作戦輸送
11ssB	第十一潜水戦隊司令官少将仁科宏造	長鯨 イ351 ハ103 ハ105	訓練戦備
附属		第六三一航空隊	訓練整備、航空機搭載潜水艦に協力

備考	1、五月十日附で呉六艦隊司令長官は中将醍醐忠重が親補された。 2、四月二十日呉潜水戦隊所属のイ157　イ158　イ159の三艦が艦隊編制の改編によつてIssBに編入された。 3、四月中旬にはイ201　イ202の二隻が11ssBに編入された。

(ハ)先遣部隊各潜水艦の三月中旬における動静については既に個々に述べたが、之を一括すれば次の通りである。

三月二十日現在に於ける先遣部隊各潜水艦の動静

部隊	潜水艦	所在行動の概要
1ssB	イ36　イ44 イ47　イ53 イ56　イ58	内海西部にあつて回天作戦準備中
	イ8　ロ41　ロ47 ロ56	九州南東海面に於て甲潜水部隊として敵機動部隊邀撃作戦中
	ロ46　ロ50 ロ109	呉(ロ46)、舞鶴(ロ50)、佐世保(ロ109)において整備中
	イ13　イ400 イ401	内海西部において単独訓練中
	イ361　イ366 イ367	横須賀在泊整備中
	イ363	南鳥島輸送を終り横須賀帰着
	イ156　イ162 イ165(四月一日編入)	呉方面において整備訓練中
7ssB	イ369	ウエーキに対する輸送を終り其の帰途にあつた(三月二十一日横須賀帰着)
	イ372　ハ101 ハ102　ハ104	横須賀において整備訓練中
11ssB	イ351　ハ103 ハ105	呉方面において整備訓練中

第二節　先遣部隊の作戦

第一項　先遣部隊の作戦計画

(イ)三月十八日米軍機動部隊が九州南部に来襲するや、先遣部隊指揮官は待機中の伊８　ロ41　ロ49　ロ56を以て甲潜水部隊を編成し、邀撃に任ぜしめたが、南西諸島方面攻略の企図が明瞭となつたので、可動全潜水艦を戦場に集中せしめるに決し、三月下旬には可動全力を出撃せしめた。

(ロ)回天を以て攻撃する作戦は既に屢々実施され、その攻撃方法は主として泊地に碇泊中の敵艦船攻撃であつたが、航行艦襲撃訓練も次第にその練度を向上したので、航行艦襲撃を重視する戦法を採るに決した。

当時先遣部隊は、航行艦襲撃に積極的であり聯合艦隊は反対の立場をとつたが、航行艦襲撃可能の見通しがついたのでその実現をみるに至つたのである。

両者の主張する理由は左の通りであった。

(一)航行艦襲撃を積極的に行うべしとする理由

碇泊艦の奇襲は敵側の対応策によつて益々困難となる。

泊地附近の警戒は厳重であり回天攻撃の強行は母潜の被害を徒らに増大する。

泊地に於ける敵の防潜対策は回天の自爆を起す算が大となる。

(二)航行艦襲撃を困難とする理由

波浪高き洋上に於て眼高低い回天潜望鏡による襲撃運動は困難である。

航行艦襲撃は経験豊さ回天搭乗員にとつて困難であり、多大の訓練を必要とする。

(ハ)艦隊戦時編制の改定に伴つて輸送潜水艦の大部分が回天搭載艦に施設替されたが、その理由とするところは既述の通りである。

なお、当時軍令部に於て調査した内南洋方面離島の状況は別表の通りである。

内南洋方面離島状況調査表

（20. 4. 14調）　　軍令部

地名	艦艇	燃料	供食人員 海軍（陸軍ヲ含ム）	供食人員 陸軍	供食人員 総計	糧食保有状況 主食	糧食保有状況 副食	内地ヨリノ補給状況	現地自活状況其ノ他
ウオッゼ	大発二（五月）	AG 480 KL（五月）	1916	1014	2930	米麦ノ日120匁ニ野菜屑ヲ混ジ粥食ニテ20.4.20迄		実施セズ	「マーシャル」方面ハ大体同一状況ニシテ19.10.3附電報ニヨル「ヤルート」ノ状況、19.11.10附電報ニヨル「ミレ」ノ状況ヨリ考ヘ栄養状況極メテ不良ニシテ兵員ノ減耗モ相当アリト思ハル尚現地自活極メテ困難ナリト想像サル
クエラップ	大発5（五月）	AG 392〃 G 2〃	1057	1833	2890	19.9迄	19.8迄（以後皆無）	〃	
ミレ	交通艇ノ隻数ヒ	AG 500〃 L 18T	2391	1909	4300	19.8迄	19.8迄（以後皆無）	〃	
ヤルート	大発二、戒船ノ艀ノ	AG 825〃 L. 40T	1118	942	2060	19.9迄	19.5迄（以後皆無）	〃	
ナウル	大発8	AG 507〃 C 2T L 13T	4170	不明	4170	19.9潜水艦補給ニテ米55俵輸送セシヲ以テ3割支給ニテ2ヶ月喰延セリ		19.9以降実施セズ	数ヶ月来ノ減食ニテ体力消耗死亡率大等ノ現象ヲ呈シアリ、目下南瓜椰子汁等ニテ自活セルモ充分ナル給養ハ望ミ得ズ
オーシャン			510	不明	510	19.8迄	19.3迄（以後皆無）	実施セズ	体力、栄養状況、現地自活状況「ナウル」ニ同ジ
クサイ	発動艇2艀3		489	4561	5050	19.5迄	19.5迄（以後皆無）	〃	生野菜自給可能、一部主食代用品自給可能
○ポナペ	大発1 奥船12 其他10	AG 69 KL L 281T	2242	7108	9350	19.5頃ヨリ通俎		〃	現地生産ニ努力ノ結果19.12以降主副食共ニ現地物資ニテ充分充足、主食 甘藷「キヤッサバ」「ヨブラ」米 副食 野菜、魚肉、植物油塩 自活状況最モ良好ナリ
○モートロック	大発4 魚船ノ	AG 98 KL L 3T	351	637	988	20.4.25ヨリ20日分	20.4.25ヨリ20日分	〃	約5割支給、現地自活概ネ充足、昨年来「トラック」ヨリ時々補給ヲ行ヒタリ
エンターピー	大発4 小発	AG 98 KL L 3T	70（20.4.25）	530	600	20.4.25ヨリ20日分	20.4.25ヨリ20日分	〃	南瓜ニヨリ自活ヲ極力実施中ナルモ状況極メテ不良、左掲員数ハ5月中「トラック」ニ転進完了セシモノトシテノ員数ナリ

るや、先遣部隊指
・6を以て甲酒水部
洛方面攻略の企図が
集中せしめるに沢し

れ、その攻撃方法は
なが、航行艦襲撃訓
艦襲撃を重視する戦

パガン			400 (19. 12. 14)	2,000 (19. 12. 14)	2,400 (19. 12. 14)	米麦200瓦. (1/4)定量ニテ7月中旬迄		19. 12以降実施セズ	甘藷ノ増産ニヨル自給業成レルモ其ノ成果不振 現地産パパイヤ椰子,蝸牛等利用栄養失調患者相当発生
メレヨン	大発 12	AGT 200 KL	1,600 (20. 4. 25)	2,900 (20. 4. 25)	4,500 (20. 4. 25)	300瓦ニテ 20. 7迄		19. 4 潜水艦ニテ補給	農作物強風ノタメ成績不良ナルモ努力中、気力、体力甚ダシク衰ヘアリ
○トラック	大発 55 機帆船 40 給油船 1 給水船 2	AGT 880 KL L 30 T C 300 T	31,000	13,000	44,000	19. 4. 25ヨリ1ヶ月間		飛行艇,潜水艦ニテ随時補給	主食ヲ割支給,副食現地生産物使用中、生産隊ヲ組織化シ増産ニ努力中 現地耕地1人90坪程度
大鳥島	大発 2 曳船 2	AGT 576 KL (七月)	3,106	1,144	4250	20. 6. 3迄		20.4潜水艦1隻補給 20.6上旬潜水艦1隻補給予定	野菜栽培八汁ノ実ヲ補フ程度,魚介殆ンド尽キ自給策立タズ
南鳥島			半数以上陸軍		3211 (20. 5. 8)	3割減食ニテ 6下旬迄		20.4潜水艦1隻補給 20.6弾丸ニテ補給	自給策立タズ
○パラオ地区			1695 (20. 5. 22)	24262 (20. 5. 22)	25957 外ニ島民 10,450 (20. 5. 22)	日量 2509瓦. 主食 20,6末迄 副食 20,5 〃 調味品 20,6 〃		実施セズ	甘藷等ニヨリ主食ヲ補ヒアリ.椰子油.漁撈ニヨリ栄養向上ヲ図リアルモ充分ナラズ
○ヤップ地区			800 (20. 5. 22)	6,150 (20. 5. 22)	6,950 (20. 5. 22)	不明		〃	20年夏季以後自給業態在ノ見込
計			52,915	67,950	132,116 外ニ官民 10,450				
調査期日	20. 4. 25 以下現状調書ニヨル		特ニ附記セルモノヲ除キ19. 10. ノ現在ニヨル. 但陸軍員数ハ総計ヨリ海軍員数ヲ差引タルモノナリ		特ニ附記セルモノヲ除キ20. 4. 25以下現状調書ニヨル	20. 4. 25. 以下現状調書ヲ基礎トシ其ノ後ノ補給状況. 現地報告, 電報等ニヨル			
調査資料	南鳥島ハ20. 5. 8「パラオ」「ヤップ」地区ハ20. 5. 22ノ電報ニヨル								
備考	○印ハ現地自活可能ノ地ヲ示ス								

第二項　先遣部隊の作戦経過概要

(イ)甲潜水部隊の作戦（イ８　ロ４１　ロ４９　ロ５６の作戦）

三月十八日敵機動部隊の九州南部来襲と同時に佐伯に待機中のロ４１　ロ４９　ロ５６の三艦は九州南東海域に向け出撃した。なお、イ８は潜望鏡故障のため遅れて二十日に出撃した。

十九日再度敵機動部隊艦載機の空襲があつたが、各艦共敵を捕捉するに至らず、二十日には敵機動部隊が南下したものと思われたので先遣部隊指揮官は各艦に対し沖縄南東海域に進出を令し、その配備を別図第一の通り指示した。

各艦は夫々配備点に向け南下し、敵機動部隊又は攻略部隊の索敵攻撃に努めたが、相当猛烈な制圧を受けたものと認められ、夫々二十二日又は二十三日頃配備点に到達したものと思われるがロ４１が二十二日、ロ４９が二十五日、イ８が二十八日に敵情報告を行つたのみで、爾後何等の報告なくいずれも消息不明となつた。

但し、イ８については、後に生存者（向井隆昌氏）の報告により、同艦は三月三十一日〇二三〇那覇南西約三〇浬において浮上交戦沈没したものと認められた。

かくて、三月二十三、二十四日に亘る敵機動部隊の空襲、二十五日の慶良間列島上陸に対し各艦は猛烈果敢な攻撃を繰り返したものと推定されたが遂に一隻も帰還せず、四月八日その編成を解かれた。

(ロ)多々良隊の作戦

三月二十五日先遣部隊指揮官は沖縄方面攻略部隊の回天攻撃を目的として１４４　１４７　１５６　１５８の四隻を以て回天特別攻撃隊多々良隊を編成し、準備完成次第逐次沖縄泊地西部を出撃せしめた。

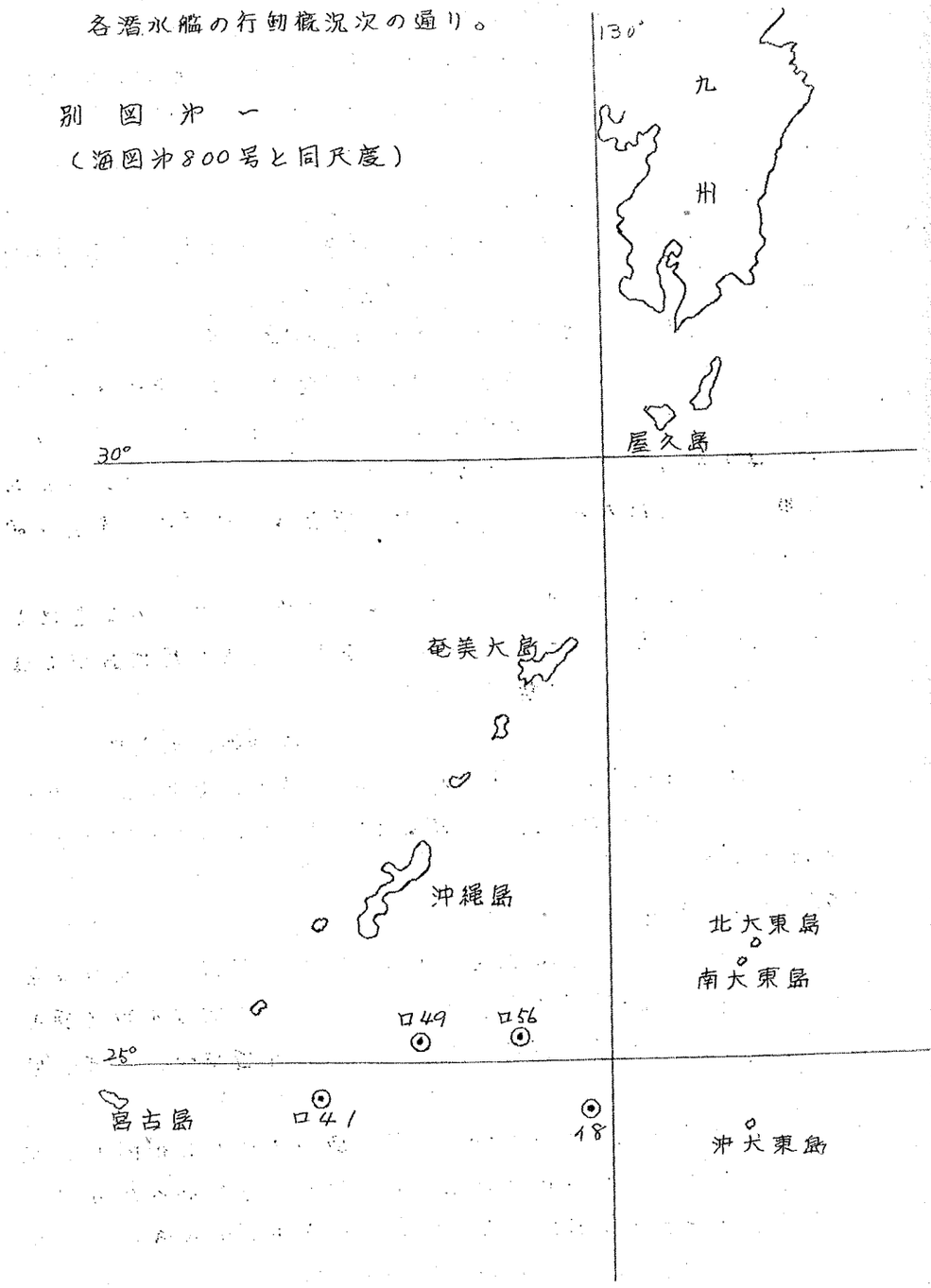
各艦の回天搭載数は六基に増加し攻撃威力の増大を企図したが、当時搭乗員の練度は未だ航行艦船の攻撃に適さなかつたので、やむを得ず沖縄泊地に於ける攻撃に重点をおいて作戦せしめる

こととした。

各潜水艦の行動概況次の通り。

別　図　第　一

（海図第800号と同尺度）



イ47

三月二十九日呉より出撃し沖縄方面に向ったが、種子島の南々東一〇〇浬附近に達した際敵航空機及び哨戒艦艇による攻撃を受け船体に損傷を生じ、四月一日内海西部に帰着、直ちに修理に着手した。

イ58

三月三十一日呉より沖縄方面に向け出撃し四月六日内海西部に帰着した。

同艦は本行動に於て沖縄西方海面に進出することに成功したが、敵の警戒が厳重で、泊地進入困難であった。先遣部隊指揮官はその状況を察知し、成功の算少しとみて呉に帰投を令した。

イ44、イ56

イ44は四月三日、イ56は三月三十一日天々大津島より沖縄に向け出撃した。

之等の各艦は出航後報告なく未帰還となったが、各種の状況より判断し、沖縄方面に於て母潜及び回天共に果敢な攻撃を実施し、戦果を収めたものと推定された。

(ハ)中型潜水艦（ロ46　ロ50　ロ109）及び天武隊の作戦

四月一日米軍は沖縄本島に上陸を開始し、逐次其の橋頭堡を強化拡大しつつあったが、沖縄周辺泊地一帯に於ける警戒は厳重を極めていることが、多々良隊の作戦によって明瞭となり、爾後引続き沖縄近海に潜水艦を注入しても徒に被害のみ増大することが予想されたので先遣部隊指揮官は潜水艦の配備を沖縄の二〇〇浬圏附近とするに決した。

そして中型潜水艦の最後の三隻ロ46　ロ50　ロ109に対し逐次出撃を命じ、敵攻略部隊の増援阻止に任ぜしめた。

先ずロ46は四月六日呉方面より出撃し北大東島の北六〇浬より同島の東六〇浬附近に進出した。

ロ109は四月十二日佐世保を出撃したが、同艦は南西諸島の西方海面を南下し十七日宮古島附近より列島線の南方に出で、

二十日頃には沖縄の南方二〇〇浬附近に到達する予定であつた。
しかしロ46は四月十七日以降、ロ109は出撃後連絡なく四月末両艦に対し帰投命令が発せられたが遂に未帰還となつた。
ロ50は四月二十日舞鶴を出港し、下関海峡を通過し豊後水道より沖縄方面に向い、二十六日頃には北大東島の東方五〇浬附近に進し哨戒に従事した。
同艦は二十八日敵機動部隊らしき集団音を聴知し、攻撃に移らんとしたが、警戒厳重で被爆雷により其の機を得ず、帰還命令によつて呉経由五月四日舞鶴に帰還した。
大型潜水艦たる回天搭載艦単独良隊に参加しなかつたイ36イ53及び多々良隊として出撃したが、損傷のため帰還し、直ちに修理に着手したイ47が次回の回天攻撃作戦に参加することとなり、天武隊を編成しイ36は四月十二日、イ47は同月二十日夫々光から出撃した。
但し、イ53は四月三日作戦準備行動中内海西部で触雷し船体に損傷を生じたので、参加不能となり修理に着手した。
なお、イ53とイ58はこの機会に水中充電装置を装備することとなり、その工事に着手したので当分作戦行動は不能となつた。
天武隊たるイ36　イ47は先遣部隊指揮官の命によつて、洋上回天攻撃の最初の試みとして、沖縄とマリアナ諸島との中間海域に向つたが、出撃後の状況は次の通りである。
イ36
四月十二日に出撃し、四月二十七日回天によつて輸送船団を攻撃しその三隻を撃沈したと信ぜられたが、行動の詳細及び攻撃地点は不詳である。
同艦は五月一日呉に無事帰還している。
イ47
四月二十日出撃し、二十四日頃沖大東島南東五〇浬附近に達し、二十七日には魚雷攻撃によつて艦種不詳二隻を撃沈し、五月二

日には沖大東島の南々西一六〇浬に於て回天攻撃により大型駆逐艦一隻及び輸送船一隻を、同月七日には沖大東島の南方に於て特空母（又は軽巡）一隻を回天によつて撃沈したものと信ぜられ、五月十二日意気揚々と呉に凱旋した。

(二) 165号の輸送作戦

三月二十日附艦隊戦時編制の改編によつて従来の第七潜水戦隊は解隊され、イ369　イ372　ハ101　ハ102　ハ104を以て165号を編成し、輸送任務を継承することとなつたが、五月末に於ける輸送作戦の概況は次の通りである。
イ372
四月一日ウエーキに向け作戦輸送のため横須賀を出港、十八日無事に同島に到着し、搭載物件の揚陸を開始したが、揚陸中敵潜水艦の攻撃を受けたため揚陸を中止の上避退潜航し、翌日再度作業を続行して完了した。物件の主なものは糧食であり、同島の人員若干（六〇名程度と思われるが確実ではない）を収容し帰途につき四月二十九日横須賀に帰着した。
同艦は六月中旬再度ウエーキへの作戦輸送に従事したのであるが、四月末以降六月までは横須賀に於て休養整備及び訓練に従事した。
イ369
三月中旬以降次期輸送の準備を進めていたイ369は四月十六日トラック及びメレヨンに対する輸送作戦のため横須賀を出撃した。
同艦は南方諸島及びマリアナ群島の列島線南方を南下し、四月末ミッドウエー、サイパン連結線附近に於て敵飛行機を三回、大型輸送船約十二隻に遭遇したが、魚雷を有しないため攻撃は不能であつた。五月一日トラック着主として弾薬、糧食約一〇屯を揚陸し、同月三日トラック発メレヨンに向い、十日同島に到着し輸送物件（主として糧食）約九〇屯を補給した。翌十一日同島の人員六〇名を収容し横須賀に向つたが、帰途に於ても

ミッドウエー、サイパン連結線上に於て飛行機及び巡洋艦らしいものを発見した。
かくて同艦は本作戦輸送に成功し、五月二十四日横須賀に帰着したが、同艦に収容便乗せしめた人員がアメーバ赤痢患者であつたため横須賀帰着佰約二週間隔離を要し、修理其の他の作業が遅延した。

ハ一〇二

二月上旬まで呂十一潜水戦隊にあつて呉方面で訓練し、二月中旬横須賀に回航、呂七潜水戦隊として輸送作戦に関する訓練を行い、三月三十日一六sgとなるや南鳥島に対する輸送の準備に着手した。
そして四月初旬横須賀発、南鳥島に対する作戦輸送に成功し、同月下旬横須賀に帰着したがその詳細は不明である。
五月には休養整備次期輸送の準備を行いつつあつた。

ハ一〇四、ハ一〇一

両艦ともハ一〇二と同様二月中旬横須賀に回航し殆んど同様の訓練過程を経たが、ハ一〇一は遂に五月末まで実際に作戦輸送に従事する機会がなかつた。
ハ一〇四は五月十日横須賀発南鳥島に対する糧食補給に成功し、六月一日横須賀に帰着した。

ハ一〇三

二月初旬呂十一潜水戦隊に編入され訓練した同艦は四月十五日一六sgに編入されたので、先遣部隊指揮官は聯合艦隊の要請に基き、同艦を南大東島作戦輸送に充当した。
同艦は四月十六日呉を出港し、目的地に対する補給に成功し二十二日呉に帰着したと思われるが、その月日等詳細については確実ではない。

(ホ)一五sg及一sgの行動

一五sg
三月二十日艦隊戦時編制の改編によつてイ三六一　イ三六三

イ三六六　イ三六七が新に一五sgに増勢された。
同日以前に於ける一五sgの現有勢力はイ三六　イ四四　イ四七　イ五三　イ五六　イ五八の六艦であり、之等各艦の作戦については(ロ)(ハ)項に既述の通りであり、ここには一五sgのi360型潜水艦について述べる。
イ三六一　イ三六三　イ三六六　イ三六七の四艦は回天攻撃可能の如く改装し、積極的戦術行動に使用する中央の方針に従い、三月二十日以降各艦共回天搭載装置の装備と、発射管復旧工事に着手した。(但し、イ三六一　イ三六七は既に回天搭載工事に着手していた。
そして工事の完成した各艦は逐次内海西部に回航し、四月中旬以降は概ね各艦とも光方面を基地として回天との協同訓練に専念した。かくて五月初頭には回天特別攻撃隊振武隊(イ三六六　イ三六七)、五月下旬には轟隊(イ三六一　イ三六三)が編成され、作戦が開始されたが、振武隊の作戦については(ヘ)項に、轟隊の作戦に関しては次三章で後述する。
航空揮発油搭載潜水艦として計画設計され乳、一九四五年一月末竣工と同時に呂十一潜水戦隊に編入され単独訓練に従事していたイ三五一は四月四日一五sgに編入された。
同艦は一五sg編入後も四月末迄は内海西部で爾後も訓練を続行し、五月一日初めて作戦輸送に従事した。
即ち、同艦は五月一日呉を出撃し台湾海峡を経てシンガポールに向い、十五日シンガポール着、南方重要物資及び航空揮発油を搭載し二十一日同地発六月初頭に佐世保に無事帰着して次一回の還送任務に成功した。

一五sg

一九四四年十二月末に竣工したイ一三、イ四〇〇を以て十二月三十日に一五sg(司令大佐有泉竜之助)が編成され翌年一月八日にはイ四〇一が増勢されたが、之等各艦は内海西部を基地とし個艦の訓練を開始した。

なお、I58各艦に搭載すべき飛行機（晴嵐）を以て第六三一航空隊が編成され、広島県福山海軍航空隊を基地として搭乗員の訓練が開始され、I58司令が同航空隊の司令を兼務した。三月十四日には新に竣工したI14が同隊に編入され訓練を開始したがI14を除くI58各艦の個艦訓練は概ね三月末に完了し、晴嵐機との連合訓練を開始する域に到達した。

しかし晴嵐の製作は当初の計画通り進捗せず、本格的な連合訓練は六月中旬以降能登半島七尾湾に於て実施することとなつた。（四月頃より内海西部は敵機の敷設する磁気機雷の危険に直面することになり、呉鎮守府掃海部隊の努力にも拘わらず訓練海面としての条件を失いつつあつた。）

I58の作戦任務は其の搭載攻撃機を以てするパナマ運河の攻撃を予想していたが、本作戦を実施するには最も燃料が問題とされた。当時呉軍港に貯蔵する燃料は僅か2,000屯に過ぎず、I400一隻のみで1,600屯の重油を必要とする状況であつたので、その補充が困難視されていたからである。

そこで聯合艦隊司令部はI400　I401が五月上旬水中充電装置の整備工事完成を待ち大連より自力にて補充する計画を立て、先ずI401を五月中旬呉より大連に向わしめた。

しかし同艦は大連回航途次山口県宇部沖姫島附近で磁気機雷に触れ僅小ながら損傷をうけたので呉に帰還し、修理を行うこととなり、五月十六日交代にI400が大連に向つた。

かくて同艦は大連より燃料を満載し無事五月二十日呉に帰還した。前に述べた通り内海西部に於ける訓練は敵機の跳梁と磁気機雷の脅威により困難となつたので、六月初旬頃より各艦は逐次七尾湾に移ることとなり、I13　I14は回航の途次鎮海に寄港燃料を補給し、I401は呉方面に於て燃料を補充して、日本海に移動し、晴嵐機との編合訓練を開始した。

(ヘ)振武隊の作戦

回天搭載装置の整備を完了したI366　I367の両艦は四月上中旬より内海西部で綜合訓練を実施して航行艦船攻撃可能の練度に達したので、先遣部隊指揮官は五月初頭両艦を以て回天特別攻撃隊振武隊を編成し沖縄東方洋上、主としてサイパン、沖縄連結線附近で回天攻撃を企図しその旨発令した。

I367は五月五日大津島を出撃し作戦海面に進出したが、行動末期の五月二十七日回天二基を発進し、轟発音二を聴取した。（攻撃地点不詳、艦種不詳ニ隻轟沈と信じられた。）

なお、爾余の回天三基は故障のため発進不能となり、同艦は六月四日呉に帰還した。

I366は五月六日（出撃予定の前日）光沖に於て磁気機雷に触れ主機械具の他に損傷を生じたので振武隊より除き、呉に於て修理に着手せしめた。

(ト)ハ103、ハ105の作戦

ハ103が四月中下旬の間に南大東島に対し作戦輸送を行つたことについては既に述べたが、同艦は四月末より五月中旬の間本州南岸の洋上（距岸200浬乃至300浬）に進出し、敵機動部隊及び基地大型機の本土空襲に対する哨戒任務に従事した。（四月二十九日呉出撃五月二十日呉帰着）

ハ103に引続き同様任務の潜水艦としてハ105（二月十五日より第十一潜水戦隊に入り五月十八日戦備完成して1858に編入された）が充当され五月二十五日呉を出撃してその任務につき、六月中旬に帰還した。

なお、本期間に於ける両艦の作戦任務は、両艦共攻撃兵器は装備していないため対空哨戒が主であり、直接の戦果はなかつたが、哨戒による敵機発見の報告は有効であつたものと思われる。

(チ)其の他の潜水艦の行動

呉鎮守府部隊呉潜水戦隊所属の1958（九隻）中I156　I157　I158　I159　I162　I165の六隻は一九四四年末頃から逐次回天搭載装置の装備工事に着手すると共に第一線の潜水艦の補充として本土決戦に際し、活躍し得る

様戦備の完成に努めつつあつたが、一九四五年四月一日戦時編制改定に伴いイ一五六　イ一六二　イ一六五の三隻が三四五Sに編入の上沖六艦隊所属となり、四月二十日にはイ一五七　イ一五八　イ一五九の三隻も同様三四五Sに編入された。

之等の各潜水艦は前後部甲板に各一基の回天を搭載し得ることとなり、光、平生及び大津島方面に於て回天との連合訓練が開始された。沖縄の失陥と共に敵の次期作戦は本土上陸に指向されることが当然予想され、これに備えて九州南岸より四国、紀州、伊豆、相模湾、房総に亘り水上水中特攻兵器（蚊竜、海竜、回天、震洋等）の基地が設定され、兵力の展開が行われたが、回天は自力進出が不可能であり、水上艦船による輸送も当時の状況では望みなきため、潜水艦による輸送が回天展開の唯一の方法であつた。

そこで、潜水艦に使用する回天以外に特攻基地用として整備された回天は展開計画に基いて、主としてイ一五六　イ一五七　イ一五八　イ一五九　イ一六二の五隻によつて、五月頃より逐次各基地に輸送が開始された。

（イ一六五は回天を搭載して敵艦船攻撃を実施する予定で其の訓練に従事せしめた。）

三四五Sの一艦ロ五〇は(ハ)項既述の通り五月四日以降舞鶴にあつて整備に従事したが、五月二十九日台湾東方海面に向け出撃作戦行動を開始した。

沖三章　自一九四五年六月上旬至終戦　潜水艦作戦

沖一節　一四五年六月及七月に於ける一般情勢

沖一項　一般情勢

(イ)本土は一九四五年四月中旬以降B二九による戦略爆撃の強化に努めたので、我大都市の工業地帯は逐次其の機能を低下した。なお、三月下旬硫黄島に小型機（P五一）が進出し、四月上旬には沖縄の飛行場を使用し得るに至つたため、その爆撃効果は益々増大し、六月、七月にはB二九の爆撃は全国的となり、小型機の都市空襲と相俟つて我本土は全面的に敵の空襲下に曝露することとなつた。

(ロ)米軍が沖縄攻略を企図したのに対し、我軍はその戦略的重要性に鑑み、之が確保のためには航空及び水上全兵力を投入消耗するも止むなしとして、水上部隊の沖縄泊地特攻攻撃を実施したが成功せず、四月以降基地航空部隊はその兵力の大部を挙げて沖縄周辺艦船攻撃（菊水作戦と称した）を実施し、潜水艦部隊も可動全力を沖縄周辺及び其の補給路に配して沖縄守備部隊の善戦に応えんとした。

そして六月下旬までの期間に菊水十号作戦まで実施し、潜水部隊も回天による特攻作戦を敢行したのであるが、米軍の物量は之を圧倒し、既に六月初旬には沖縄の陸上作戦の状態は悲観的となつていた。

(ハ)沖縄攻略軍は五月末那覇市内首里に侵入するに至り、六月上旬沖縄攻防戦は最終段階に入り、同月二十日頃には我守備部隊の勇戦奮斗にもかかわらず同島は全く敵手に陥る状態となつた。かくて敵は次期攻略の準備作戦に着手することとなつたものの如く七月上旬以降敵機動部隊の活躍は再び活発化し、各軍港、主要都市の空襲、本土沿岸工業都市の砲撃等によつて、我水上

艦艇は殆んど潰滅し、各軍港の工廠施設、沿岸諸都市の工業施設も大打撃を蒙るに至つた。

(二)七月以降敵機動部隊の我本土に対する空襲及び砲撃が積極化したが七月中下旬頃迄は本土決戦に備え、残存航空兵力を徒に消耗しないよう徹底的に温存の方針が執られ、敵機動部隊の蹂躙にまかせざるを得なかつた。

しかし七月下旬以降は空襲被害が甚大で航空機の秘匿温存が困難となつたので好機機動部隊反撃の方針に変更された。

第二項　潜水艦関係艦隊戦時編制及び兵力部署

(イ)一九四五年六月一日現在における潜水艦関係の艦隊戦時編制を示すと次表の通りである。

但し、表中※印のものは当時既に沈没又は確実に消息不明で実在しなかつたが、戦時編制表からは未だ削除されていなかつたものである。

右の編制表中特に説明を要する点及び終戦時迄の艦隊編制の改編の主なるものを挙げれば次の通りである。

(一)一一SSのイ二〇〇型潜水艦は所謂水中高速潜水艦で竣工直後は呉潜水戦隊の三三S8に編入され、研究、改造、或は新式潜水艦乗員の養成に従事していたが、四月中旬頃より逐次一一SSに編入され戦備、訓練を行いつつあつた。なお、之等同型艦中終戦時迄に作戦部隊(6F直率部隊)に編入されたものはイ二〇一一隻のみである。

(二)第十特攻戦隊(一〇SS)のハ一〇九は同戦隊の編制と同時に一一SSに編入されたもので、一〇一突撃隊(蚊竜を以て編成した)の母艦任務を与えられた。

なお、七月中旬には同戦隊にハ一一一が増勢された。

(三)呉SSのハ二〇〇型潜水艦は小型水中高速潜水艦でイ二〇〇型と同様に竣工後三三S8に編入され、研究、改造等に従事したが、七月二十日にハ二〇一　ハ二〇二　ハ二〇五を以て

区分		
舞鎮		
51S		
艦船部隊	155名	15名
ロ68	1351 136	113
ロ500	1361 144※	114
	1363 147	1400
	1366 153	1401
	1367 156※	
	158	
所属長官	呂	
	舞鎮	
司令官	八	
	51S	

舞鎮	呉鎮	GF			6F					区分
51S	呉SS	10SZ	附属	11SS						
ロ68	335名	ハ109	三潜水艦基地隊	1201長	18※	345名	165名	155名	15名	艦船部隊
ロ500	ハ106 ロ62 1121	一	一三航空隊	1202	112※	ロ46※ 1156	ハ101 1369	1351 136	113	
	ハ107 ロ63 1122	0		1373 鯨		ロ50 1157	ハ102 1372	1361 144※	114	
	ハ108 ロ64 1155	一				1158	ハ103	1363 147	1400	
	ロ67	突撃隊				ロ109※ 1159	ハ104	1366 153	1401	
	ハ201					1162	ハ105	1367 156※		
	ハ202					1165		158		
舞鎮	呉鎮	GF			6F					所属長官
51S	呉SS	10SZ		11SS						司令官

新に５２５名を編成し６Ｆ直率となつた。

(四)七月二十四日竣工したイ４０２がＩＳ名に編入された。

(五)独逸の降伏によつて、馬来、ジヤバ方面において我軍に捕獲された潜水艦六隻中二隻はイ５０３　イ５０４と命名、七月十五日呉鎮部隊に編入、他の四隻はイ５０１　イ５０２　イ５０５　イ５０６と命名、同日附で沖一、沖二南遣艦隊に夫々編入された。

(六)艦隊戦時編制における沖六艦隊兵力は先遣部隊として、沖六艦隊司令長官の指揮下にあつたが、六月一日現在におけるその兵力部署は次表の通りである。

なお、沖六艦隊兵力以外の潜水艦については、殆んど作戦は実施していないので省略する。

区分	指揮官	兵力	主要任務
主隊	第六艦隊司令長官 中将　醍醐忠重	6F 司令部	全作戦指揮
1SSB		イ13　イ14 イ400　イ401	搭載飛行機による奇襲（訓練）
		イ361　イ36 イ363　イ47 イ366　イ53 イ367　イ58 イ165	回天攻撃を主とする敵艦船攻撃
		ロ50	敵艦船攻撃
		イ156　イ157 イ158　イ159 イ162	主として作戦輸送、回天による敵艦船攻撃
7SSB		ハ101　イ369 ハ102　イ372 ハ103　イ351 ハ104 ハ105	作戦輸送 一部は対空哨戒
11SSB	第十一潜水戦隊 少将　仁科宏造	長鯨 イ201　イ202 イ373	戦備訓練
附属		631航空隊	訓練整備 飛行機搭載潜水艦に協力

(八)艦隊戦時編制に示した各潜水艦の六月初頭に於ける動静は概ね次表の通りである。

部隊		潜水艦	所在行動の概要
先遣部隊	1SSB	1SS名（イ13　イ14 イ400　イ401） 631航空隊	六月初旬幌筵半島七尾湾に移動　晴嵐機との本格的線合訓練を開始
		イ47　イ53 イ58　イ366 イ165	内海西部にあって回天作戦準備中
		イ361 イ363	轟隊として五月下旬出撃　作戦行動中
		イ36	轟隊の一艦として六月初旬内海西部出撃の予定
		イ367	振武隊として作戦し六月三日呉帰着
		ロ50	五月二十九日舞鶴発台湾東方海面に向け南下中
		イ156　イ157 イ158　イ159 イ162	特攻基地に対する回天の輸送に従事中
	7SSB	イ351	シンガポールより第一回の航空揚発油還送に成功　六月初頭消息保持者

先遣部隊	7 SSB	イ369 イ372 ハ101 ハ102 ハ104	横須賀にて整備中
		ハ103	呉に於て整備中
		ハ105	五月二十五日呉出撃本州南岸にて対空哨戒実施中
	11 SSB	長鯨 イ201 イ202 イ373	イ202は舞鶴に於て整備中、其の他は内海西部にて訓練中
先遣部隊以外		ハ109	沖十特攻戦隊の母潜任務にて宿毛又は佐伯方面に在った
		ロ62 イ121 ロ63 イ122 ロ64 イ155 ロ67 （呉鎮守府潜水部隊）	主として内海西部に於て潜水艦乗員の養成及自艦訓練
		ハ106 ハ107 ハ108 ハ201 ハ202 （呉鎮守府潜水部隊）	主として舞鶴方面に於て潜水艦乗員の養成及自艦の訓練
		ロ68 ロ500 （舞鶴鎮守府潜水部隊）	

第二節　先遣部隊の作戦

第一項　先遣部隊の作戦計画

(イ)ISSの作戦（記録皆無であるため、主として筆者の記憶による。）

イ400型潜水艦には小型飛行機三基搭載可能であったが、第一艦竣工の前後頃より完成の上は搭載機を以てパナマ運河を攻撃せんとする計画が軍令部の一部分において真剣に研究されつつあった。

但し、此の種の艦種が設計の当初よりこの目的のためになされたか否かは現在判然としていない。

しかし優秀な小型水上爆撃機（晴嵐）の出現と共に連合軍交通の要衝パナマ運河を破壊して一時的にせよ、太平洋方面への敵兵力の移動を阻止せんとする意欲が旺盛となったことは事実である。

その攻撃計画の大要は次の如きものである。

(一)指揮官　ISS司令　海軍大佐　有泉竜之助

(二)参加潜水艦　イ13　イ14　イ400　イ401
（搭載飛行機イ13　イ14各二機、イ400　イ401各三機　計10機

(三)攻撃目標　パナマ運河ガツンロツカ閘門

(四)攻撃要領　搭載機による特攻攻撃とし魚雷と爆弾を併用する。

(五)時期　晴嵐の生産と訓練を考慮した上なるべく早期とする。

しかし、実際は六月頃七尾湾方面に移動して搭載機との聯合訓練を開始すると、晴嵐の故障が予想以上に多く、且つ空襲被害による生産の低下と相俟って、各艦搭載機を完全に整備することが容易でなく、軍令部及び聯合艦隊司令部は急迫した現下の

戦況において徒らに攻撃時機を遷延することは許されないものと判断した。かくてパナマ運河攻撃は詳細な具体的計画に移らずして消滅した。

パナマ運河攻撃計画の中止に伴い、ＪＳ名の新作戦計画が論議されたが六月中旬に至り結局敵機動部隊のウルシー在泊の機に乗じ、八月中旬晴嵐特攻攻撃を敢行のことに決定した。（先遣部隊に於てはサンフランシスコ空襲を行い本土空襲に対し一矢を酬いんことを希望した。）

攻撃計画の大要は次の通りである。

(一)先　作　戦

トラック方面の偵察力強化の目的を以て、イ１３　イ１４二隻にてトラックに彩雲四機を輸送せんとする作戦で、七月初頭大湊に於て飛行機を搭載の上八月初頭までに輸送を完了する。

(二)晴　作　戦

イ４００　イ４０１は各艦晴嵐三機を搭載し七月下旬大湊出撃、トラックの東南を迂回してウルシー南方に進出し、八月十七日ウルシー環礁泊地に在泊中の敵機動部隊に対して特攻攻撃を敢行する。

なお、晴嵐攻撃に先だち先作戦によってトラックに進出した彩雲を以てウルシーの偵察を実施する。

又、偵察の結果、敵機動部隊不在の場合は再考を図ることとし、イ４００　イ４０１はシンガポールに回航して燃料を補給する。

(ロ)回天による敵艦船攻撃

潜水艦に搭載した回天を以て洋上に航行艦船を体当り襲撃せんとする戦法は、四月中旬以降実施した天武隊の回天特別攻撃作戦以後有効であり、且つ母艦たる潜水艦の消耗を防ぎ得る点よりして、益々積極的に推進すべきであるとされ、回天搭載可能潜水艦は回天の整備訓練状況と睨み合せ、逐次出撃せしめて敵

艦船の活動を阻止せんとした。

即ち、五月末頃より六月末に亘っては主として沖縄方面の陸上戦斗に策応し、敵の増強を阻止する目的を以て、回天特別攻撃隊五隊（イ３６１　イ３６３　イ３６　イ１６５）を編成し逐次出撃の上、沖縄方面補給線上に於て作戦せしめた。

なお、沖縄失陥後は敵が沖縄を拠点として本土上陸作戦を企図するものと判断し、沖縄に対する補給増強を阻止し、上陸作戦の時機を多少なりとも遅延せしめて、その間我軍の本土決戦態勢の時間的余裕を得んとする目的を以て、回天特攻攻撃が継続されることとなった。

そしてこの作戦は七月中旬以降多数隊（イ５３　イ５８　１４７　イ３６６　イ３６７　イ３６３）によりを実施された。

(ハ)特攻基地用回天の展開

本土決戦に備え、本土防衛部隊として特攻戦隊が編制され、各地に特攻基地を設定されたが、特に敵の上陸正面と予想される九州南東岸、四国南岸及び伊豆半島より房総に亘る沿岸には回天基地が完成しつつあったので、之等基地に対し潜水艦（１１５６　イ１５７　イ１５８　イ１５９　イ１６２）を以て輸送を継続することとなった。

なお、之等潜水艦は本土防衛に際しては回天を搭載の上、最後の総反撃に参加せしめる計画であった。

(ニ)離島に対する作戦輸送及び航空揮発油還送

千九四五年四月頃より太平洋の遮断地に対する作戦輸送は特殊地の一部を除いて事実上打ちきられた状況になったが、六月以降も尚七潜水部隊の一部を以て、ウェーキ、南鳥島等の離島に対しては極力輸送の実現を期した。

しかし、六月下旬頃より本土防衛の最後的段階迄きを思わしめる情勢となり、決号作戦の航空兵力展開に伴う航空揮発油の蓄積補充の要に迫られたため、イ３５１　イ３７２を除く尚七潜水部隊の各潜水艦は逐次航空揮発油搭載施設の改造工事が計画

された。

そして　軍令部に於ては六月二十五日附計画案として別表のごとく　航撞還送量の見込を樹てた。

(ホ) 水中高速　潜水艦について

水中高速　潜水艦（イ二〇〇型、ハ二〇〇型）は六月頃既に若干竣工し、第十一潜水戦隊及び呉潜水戦隊に編入し、自艦の訓練と乗員の養成に専念していたが、何れも飛躍的に性能の向上した反面、構造上の欠点があり、修理改造を行いつつあったので、作戦部隊の強い要望があったにかかわらず、之等潜水艦が作戦部隊の第一線兵力として作戦に加入する時機は次第に遅延しつつあった。

但し、之等潜水艦は航続距離及び行動可能期間が必しも洋上遠く作戦せしめるに適してはいなかったので、この種作戦に逐次投入することを避け、本土防衛の決戦時に一挙に作戦せしめることとして、専ら整備訓練に専念せしめることとした。

第二項　先遣部隊の作戦経過概要

(イ) 光作戦及び嵐作戦

六月上旬頃内海西部より七尾湾に移動し晴嵐との協同訓練を開始したイ一三　イ一四　イ四〇〇　イ四〇一は、六月中旬一応訓練を完了したが、既述の通り光作戦及び嵐作戦を実施のこととなり、先づイ一四は六月下旬呉水湾発、イ一三は七月二日舞鶴発大湊に回航し、同地に於てトラックに輸送すべき偵察機彩雲各二機を搭載した。

イ一三は大湊に寄港して彩雲を搭載し七月五日同地を出撃、マリアナ東方海面を南下して、七月二十日頃にはトラックに到着するものと予想されたが、出撃後消息不明となった。（キング報告によれば七月十六日本州東方海面に於て米機動部隊の攻撃を受け沈没したものと推定されているが、これは勿分誤りであって、同艦は当時まで行動していたとすれば当然トラック方面にあった筈である。）

-25) 軍令部

区分			記事
航撞運搬用トシテ建造ノモノ	イ351		1、イ402改造要領 ヤ格納筒　236 Ton ヤ浮舟格納筒　25〃 ゴムボール 450×0.7=315〃 計　556〃 (677基) 2、イ15改造要領 ヤ格納筒　160 Ton ヤ浮舟格納筒　16〃 バルヂ　250〃 計　426〃 (511基) 3、昭南ガ敵手ニ陥入ルコトアルベキヲ以テ成ルベク速ニ仏印其ノ他適当ナル場所ニ航撞ヲ分散秘匿スル要アリ
	イ352	500	
	・・・		
	イ372	200	
ヤノモノ搭載ノ	イ402	700	
	・・・・・		
	イ15	500	
輸送潜水艦	イ373		
	イ369	100	
	・・・・		
	ハ101	60	
	・・・・・		
	ハ102		
	・・・・・・		
	ハ103		
	・・・・・・		
	ハ104		
	・・・・・・		
	ハ105		
合計			
総合計			
内訳			

潜水艦ニヨル航揮還送量見込（20-6-25）軍令部

区分		7月	8月	9月	10月	記事
		10 20	10 20	10 20	10 20	
航揮運搬用トシテ建造ノモノ	イ351	昭 南 500	500	500	500	1、イ402改造要領 ヤ格納筒 236 Ton ヤ浮舟格納筒 25〃 ゴムボール 450×0.7=315〃 計 556〃 （677粍）
	イ352 … イ372	台湾 200	昭 200	南 500 200	500 200	
ヤノモノ搭載ノモノ	イ402	（改造）	昭	南 700	700 昭 南 500	2、イ115改造要領 ヤ格納筒 160 Ton ヤ浮舟格納筒 16〃 バルヂ 250〃 計 426〃 （511粍）
	イ115	（〃）				
輸送潜水艦	イ373	（〃）	台湾 100	100	100	3、昭南ガ敵手ニ陥入ルコトアルベキヲ以テ成ルベク速ニ佛印其ノ他適当ナル場所ニ航揮ヲ分散収匿スル要アリ
	イ369	（〃）	南島島（台湾）100	100 100	100	
	ハ101	（〃）父	島 60 60	60	60 60	
	ハ102	（〃）台	湾 60	60	60	
	ハ103	（〃）	台 湾 60	60	60	
	ハ104	（〃）父 島 60	60	60 60	60	
	ハ105	（〃）	台 湾 60	60	60	
合計		760	760	2560	3160	
総合計		7240粍	但シ改造工事順調ニ進ミ且作戦消耗ナキ場合ナリ			
内訳		昭南 ⟶ 4400粍		台湾又ハ南島島 ⟶ 400粍		
		台湾 ⟶ 1840粍		父島 ⟶ 600粍		

イ一四は大湊に到着した際、推進軸鳴音発生を知りこが除去工事を同地に於て急速実施することとなり七月中旬迄内地よりの進出不能となつた。

鳴音除去工事完了したイ一四は彩雲を搭載の上七月中旬大湊発、一路南下八月四日トラックに到着した。

なお、トラックに揚陸をした彩雲は同地整備員の努力により十日以後使用可能の状況となり、対作戦に協力する態勢にあつた。

彩雲揚陸後イ一三はウルシーの偵察命令を待ちトラックに在泊中終戦となつたため、香港経由昭南に回航して燃料を補給する計画を止め横須賀に帰還を命じられた。

対作戦を実行すべきイ四〇〇及びイ四〇一は七月二十一日七尾湾発、大湊に寄港の上、二十六日同地を出撃して遠く本州東岸よりマリアナ東方海面を南下してトラック東南方に向つた。

ウルシー泊地攻撃期日は一応八月十七日黎明と予定され、その詳細攻撃計画は同隊指揮官に一任されたが、終戦時には両艦共トラック南西海面にあつた。

かくて殆んど一与に近い期間、イ四〇〇潜型潜水艦と晴嵐機の活躍を期して、苦心努力した同隊はその決行直前に作戦中止の悲運に逢着し、横須賀に帰還したが、指揮官有泉大佐は入港前艦内に於て自刃した。

(ロ)轟隊の作戦

五月下旬先づイ三六一、イ三六三の二隻を以て回天特別攻撃隊轟隊が編成され、イ三六一は五月二十三日、イ三六三は五月二十八日夫々内海西部を出撃して沖縄東方四〇〇浬附近に進出して沖縄に対する補給路の敵艦船攻撃に向つた。

その後イ三六及びイ一六五が轟隊に増勢されイ三六は六月四日、イ一六五は同月十五日夫々大津島及び光にて回天を搭載し豊後水道よりマリアナ東方海面の作戦海面に向つた。

作戦海域に於ける作戦期間、作戦海域及び戦果等は次の通りである。

(一)イ361は六月一日頃沖縄島の東方400浬に遊する予定であったが出撃後消息不明である。

(二)イ363は沖縄島の南東500浬附近に向い六月中旬同方面にて作戦したが、十五日輸送船一隻を撃沈して六月二十八日内海西部に帰還した。

(三)イ36は出撃后マリアナ、マーシヤルの中間海域に向い、二十一日トラツクの北東400浬において輸送船一隻に魚雷二本を命中せしめ、二十八日午后は西進中の船団に回天二基を発進し、敵護衛艦の制圧下に爆発音一を聴取した。

なお、その後重油タンクの漏洩を生じたので作戦を打ち切り七月六日内海西部に帰還した。

(四)イ165は六月十五日出撃、マリアナ東方海面に向い七月上旬以後消息不明となつたが、六月下旬敵信情報によつて、回天攻撃に成功し多大の戦果を挙げたものと推定された。

ただし其の期日については現在不明である。

かくして轟隊の作戦は終つたが、イ36は爾後呉方面に於て修理整備訓練に従事したので、終戦時迄作戦することなく、1363は八月四日次項で述べる多聞隊の一艦として作戦した。

(ハ)多聞隊の作戦

七月上旬に至つてイ53　イ58　イ47等の回天作戦準備が完成したので回天特別攻撃隊多聞隊と呼称して作戦を開始した。

なおこの後八月上旬までにイ367　イ366　イ363の三隻が逐次出撃可能となつたので多聞隊に編入、作戦に加入した。

多聞隊各艦の出撃期日、作戦海域及び帰還期日次表の通り。

艦名	出撃期日	帰還期日	作戦海域
イ47	七月十九日	八月十一日	沖縄の東方400浬附近
イ53	七月十四日	八月十二日	バシー海峡の東方400浬附近
イ58	七月十八日	八月十四日	パラオ北方300浬附近
イ367	七月十九日	八月十六日	沖縄の東南東400浬附近
イ366	八月一日	八月十八日	日本海方面
イ363	八月八日	八月下旬	パラオの北500浬附近

之等潜水艦中特記すべき事項は、次の通り。

イ47　イ367

作戦期間中会敵の機会なく内海西部に帰着した。

イ53

七月二十日頃バシー海峡東方350浬附近に到達し、同月二十四日1745台湾南端の東方400浬において輸送船十五隻、駆逐艦三隻よりなる輸送船団に回天二基を発進し、輸送船二隻を撃沈したと推定される。

なお、八月四日0025鵜鶘の東南東400浬において哨戒艦艇四隻の爆雷攻撃を受け制圧されたが、回天二基を発進し、0250及0330に命中轟発音各一を聴取した旨報告があつた。

イ58

七月二十八日1433パラオの北方300浬にて油槽船及び駆逐艦各一に対し回天二基発進の上撃沈、翌二十九日2330パラオの北250浬にてアイオワ型戦艦を轟撃々沈したと報ぜられたが、これはインデアナポリスであつた。

更に八月十日〇八一五アパリの北東二六〇浬に於て駆逐艦三、輸送船十よりなる船団に回天二基をもつて攻撃し、二隻を撃沈し十二日一八〇〇には那覇の一五〇度三二〇浬にて回天攻撃により水上機母艦一隻を撃沈したと報告があつた。

イ三六

八月五日配備点に向け南下中潮岬の南三〇〇浬にて北上する集団音を聴取したが攻撃の機会を得ず、十一日パラオの北五〇〇浬にて北西に向う大船団を発見し、一八一五回天三基発進、四十五分乃至約一時間後に爆発音三を聴取し、三隻を撃沈したと報告があつた。

イ三六三

沖縄東方海面に向け八月八日出撃したが、ソ連参戦のため十二日日本海方面に配備を変更を命ぜられたが、敵機の機銃掃射を受け（期日及場所不明）軽微な損傷を受け、内海西部に帰投した。

(二)第七潜水部隊（一六八名）の作戦輸送及びイ三五一　イ三七三の航空揮発油還送

(一)太平洋諸島に対する作戦輸送はウエーキ及び南鳥島を主な輸送先とし実施されたが、その概況は次の通りである。

艦名	輸送先	行動の概況
イ三七二	ウエーキ	六月十五日横須賀発、二十八日ウエーキ着 七月十日横須賀帰着
ハ一〇一	南鳥島	六月十七日横須賀発、二十八日南鳥島着 七月七日横須賀帰着
ハ一〇二	南鳥島	六月末横須賀発、七月七日南鳥島着 七月十六日頃横須賀帰着
ハ一〇五	奄美大島	七月四日頃呉発、七月十日頃奄美大島着 七月中旬呉帰着

なお、この輸送において ハ一〇一　ハ一〇二の両艦は夫々南鳥島に近接した際、敵哨戒艦艇が哨戒中であるのを発見しているが無事にその間隙をぬい揚陸作業に成功した。

前記四艦の輸送以後は本土防衛の緊急事態に対処するため之等諸島に対する作戦輸送は完全に絶え、各諸島共自活によらざるを得なくなつた。

(二)六月二十五日付軍令部計画によれば内地在庫航空揮発油の補充蓄積のため八月以降は前述した通り十隻以上の潜水艦を充当することヒヒなつていたので、第七潜水部隊の各艦（イ三六九　ハ一〇一　ハ一〇二　ハ一〇三　ハ一〇四　ハ一〇五）は六月下旬頃から航空揮発油搭載工事に着手した。

又建造中のイ四〇二　イ一五、六月下旬一一五五より一五五名に編入されたイ三七三等もその搭載工事に着手していた。

しかし、六月以降終戦時迄に実際に還送作戦を実施したものはイ三五一　イ三七三の二隻のみで、他は還送に従事しないうちに終戦となつた。

(ハ)イ三五一は第二回目の還送作戦として六月二十二日佐世保発七月六日シンガポール着、航空揮発油五〇〇吨を搭載し同月十一日シンガポール発内地に向つたが遂に帰着せず消息不明となつた。

終戦後の資料によれば同艦は七月十五日ボルネオの北二〇浬において米潜水艦の攻撃によつて沈没したものと思われる。

(2)イ三七二はウエーキ作戦輸送後横須賀工廠において還送のための整備作業中、七月十八日の敵機動部隊の空襲によつて、右舷中部倉庫附近に至近弾を受け沈没した。

(3)イ三七三はその第一回の作戦行動として八月九日佐世保発、台湾よりの航揮還送のため東支那海に進出したが、そのまま消息不明となつて終戦直前における最後の喪失潜水艦となつた。

かくて七月以降における航揮還送計画は全く画餅に帰した。

(ホ)三四八隻の作戦

三四八隻は六月一日現在においてイ一五六　イ一五七　イ一五八　イ一五九　イ一六二　イ一六五　ロ五〇の七隻であるが、イ一六五に関しては輸隊の作戦において述べた通りである。

イ一五六　イ一五七　イ一五八　イ一五九　イ一六二の五隻は九州南東岸、四国南岸及び伊豆半島より房総に亘る沿岸に設置された回天基地に対し、回天輸送に任じた。

その詳細に関しては不明の点が多いが、一例を示すとイ一五七は六月中に平戸、油戸、細島に各一回、回天二基宛を輸送した。そして之等の輸送は概ね六月末で一応打ち切り、七月初旬頃より各艦自衛用の回天を搭載し本土防衛に際して、敵攻略部隊を攻撃し得る如く、その整備と訓練を開始した。

なお、イ一五六とイ一六二は六月下旬より七月初頭の間に大連に回航し、行動用燃料の補充を行つた。

かくして各艦は回天との協同訓練又は整備実施中に終戦となつた。

ロ五〇は五月二十九日舞鶴発、九州西岸より東支那海を南下し六月六日頃台湾の東岸に出て、十一日より二十一日迄の間ウルシーと沖縄の中間地域において哨戒に任じたが、遂に攻撃の機会を得ず、帰途につき、七月三日舞鶴に帰着した。その後同艦は舞鶴にあつて整備休養し次期行動に備えつつあるうちに終戦となつた。

イ二〇一は六月十五日付で三四五隻に編入されたが、同艦は舞鶴において終戦時まで訓練整備に専念した。

(ヘ)水中高速潜水艦の行動

(一)イ二〇〇型潜(イ二〇一　イ二〇二　イ二〇三)

何れも実際に作戦に参加する機会を得ずして終戦となつたが、各艦の状況次の通り。

イ二〇一

六月十五日一一五五より作戦部隊たる三四五隻に、更に八月十五日付一五五隻に編入されたが、この種潜水艦の第一艦であるため、相当改造を要する点があり、六月下旬以降舞鶴において水中充電装置の改修工事を実施し、八月中旬日完成した。

イ二〇二

イ二〇一と同様六月以降舞鶴において改修工事を行い、七月三十日被爆撃によつて工事若干遅延したが八月十日に完成し十五日付一一五五より一五五隻に編入された。

イ二〇三

六月二十五日[illegible]と同時に一一五五に編入され、内海西部で訓練に従事し、[illegible]十三日作戦準備が完了した。

(二)ハ二〇〇型潜(ハ二〇一　ハ二〇二　ハ二〇三　ハ二〇四

ハ２０５　ハ２０７　ハ２０８　ハ２０９　ハ２１０）

ハ２０１　ハ２０２が五月三十一日竣工と同時に呉潜水戦隊の３３ｓ戦に編入され、柳井方面を基地として自艦の訓練と、潜水学校練習艦としての任務に従事していたが、その後六月末にハ２０３　ハ２０４が増勢し、八月初頭にはハ２０１　ハ２０２、ハ２０５の三隻が先づ作戦部隊たる５２ｓ戦に編入され、八月十五日迄には５２ｓ戦はハ２０１　ハ２０２　ハ２０５、ハ２０７　ハ２０８　ハ２０９　ハ２１０と増大したが遂に作戦には参加しなかつた。ハ２０３　ハ２０４は終戦時迄３３ｓ戦にあつて練習艦任務を続行した。

(ト)其の他の潜水艦の行動

(一)３３ｓ戦

イ１２１型潜ロ６３型潜ハ１００型及びハ２００型潜で編成され主として潜水学校練習艦として内海西部及び能登半島、或は舞鶴で潜水艦乗員の養成に専念した。

このうちイ１２２は六月十日舞鶴発呉水洗回航の途次石川県禄剛岬灯台の１２０度６浬（３７－２８北／１３７－２６東）に於て敵潜の攻撃を受け沈没した。

(二)ハ１０９　ハ１１１

之等は第十特攻戦隊に編入されたが、その主な任務は、第十特攻戦隊の攻撃兵力である蛟竜隊（一〇一突撃隊）の母艦任務であり豊後水道方面の基地（佐伯、宿毛）にあつたが、七月以降は細島足摺岬間の哨戒に任じたこともあつた。

第三節　一九四五年八月十五日における潜水艦の現状

第一項　八月十五日現在潜水艦関係艦隊戦時編成

区分		艦船部隊	備考
司令官	一号	158	※印は既に沈没又は消息不明であつたものを示す
		イ 56 136 113※	
		イ 57 147 114	
		58 153 1400	
		59 158 1401	
		62 1402	
		65※	
所属長官	一号		
司令官	一号		

第一項 八月十五日現在潜水艦関係艦隊戦時編成

備考	舞鎮	呉	2KF	1KF	GF			6F						区分
	51S	呉SS	附属	附属	10SZ	附属	11SS							
※印は既に沈没又は消息不明であったものを示す	ロ68	338s	1505	1501	ハ109	大三一航空隊	長鯨	525s	165s	155s			15s	艦船部隊
		1121			ハ111			ハ201	1369	1351※	1201	1156	136	113※
	ロ500	1122※	1506	1502				ハ202	1372※	1363	1202	1157	147	114
		ロ62			一			ハ205		1366		1158	153	1400
		ロ63			0			ハ207	ハ101	1367	ロ50	1159	158	1401
		ハ106			一空撃隊		1203	ハ208	ハ102	1373※		1162		1402
		ハ107						ハ209	ハ104		ハ103	1165※		
		ハ108						ハ210			ハ105			
		ハ203												
		ハ204												
	舞鎮	呉鎮	2KF	1KF	GF			6F						所属長官
	51S	呉SS			10SZ		11SS							司令官

第二項 終戦時に於ける各潜水艦の所在動靜

51S	33S名		呉鎮	2KF附属		1KF附属	105Z	1155	52S名	16S名	15S名			1S名			隊
ロ68	ハ106	イ121	イ503	イ506	イ505	イ501	ハ109	イ203	ハ201	イ369	イ201	イ363	イ36	イ402	イ400	イ14	
	ハ107	ロ62							ハ202	ハ101	イ202	イ366	イ47				
ロ500	ハ108	ロ63	イ504			イ502	ハ111		ハ205	ハ102	ロ50	イ367	イ53		イ401		
	ハ203								ハ207	ハ104	ハ103		イ58				艦
	ハ204								ハ208		ハ105		イ156				
									ハ209				イ157				
									ハ210				イ158				
													イ159				
													イ162				
舞鶴	〃		内海西部	スラバヤ	ジャカルタ	シンガポール	豊後水道方面	〃	内海西部	横須賀	舞鶴	作戦行動中	〃	内海西部	作戦行動中	トラック	所在動靜

第三項　終戦時在籍潜水艦の其の後の状況

艦名	本籍	所属	状況	除籍年月日
※伊13	S	6F 15号	（20.8.1 中部太平洋方面に於て沈没と認定）	20.9.15
14	Y	〃	米軍接収（昭和20年10月米軍により横須賀から佐世保に回航、昭和21年1月米国に向け出航）	〃
36	K	6F 155号	21.4.1 五島沖に於て米軍処分	20.11.30
47	Y	〃	〃	〃
53	K	〃	〃	〃
58	K	〃	〃	〃
121	K	呉鎮 335号	21.4.30 若狭湾に於て米軍処分	〃
※122	K	〃	（20.6.10 石川県禄剛岬灯台120度6浬に於て沈没）	20.9.15
153	K	（四予備）	21.5. 伊予灘に於て米軍処分	20.11.20
154	K	（〃）	〃	〃
155	K	（〃）	〃	〃
156	K	6F 155号	21.4.1 五島沖に於て米軍処分	20.11.30

伊157	K	6F 155名	21、4、1 五島沖に於て米軍処分	20.11.30
158	K	〃	〃	〃
159	K	〃	〃	〃
162	S	〃	〃	〃
※165	S	〃	（20、7、29 マリアナ東方海面に於て沈没と認定）	20、9、15
201	K	〃	米軍接収（昭和20年10月横須賀から佐世保に回航、昭和21年1月米国に向け出航）	20.11.30
202	K	〃	21、4、5 向後岬西方13浬附近に於て米軍処分	〃
203	K	6F 115S	米軍接収（伊201に同じ）	〃
※351	K	6F 158名	（20、7、31 南支那海附近に於て沈没と認定）	20、9、15
363	Y	〃	20、10、29 宮崎沖に於て触雷沈没	20、11、10
366	Y	〃	21、4、1 五島沖て米軍処分	20.11.30
367	S	〃	〃	〃

369	S	6F 165名	横須賀に於て米軍接収	20、9、15
※372	Y	(四予備)	（20、7、18 横須賀に於て空襲をうけ沈没 20、8、1沖四予備艦）	〃
※373	Y	6F 155名	（20、8、14 東支那海に於て沈没と認定）	〃
400	K	6F 15名	米軍接収（昭和20年10月横須賀から米軍により佐世保に回航、昭和21年1月米国に向け出航）	〃
401	K	〃	〃	〃
402	K	〃	21、4、1 五島沖に於て米軍処分	20.11.30
501	K	1KF附	シンガポールにて被接収	21、6、15
502	K	〃	〃	〃
503	K	呉鎮	21、4、16 紀伊水道に於て米軍処分	20、11、30
504	K	〃	〃	〃
505	K	1KF附	ジャカルタにて被接収	21、6、15
506	K	〃	スラバヤにて被接収	〃

呂50	M	6F 15S名	21、4、1 五島沖に於て米軍処分	20.11.30
57	K	(四予備)	呉附近に於て米軍処分	20.11.20
58	Y	(〃)	20、10 清水附近に於て米軍処分	20.9.15
59	K	(〃)	21、5 伊予灘に於て米軍処分	20.11.20
62	M	呉鎮 33S名	〃	〃
63	M	〃	〃	〃
68	M	舞鎮 51S	21、4、30 若狭湾に於て米軍処分	20.11.30
500	K	〃	〃	〃
波101	K	6F 16S名	20、10 清水附近に於て米軍処分	20.9.15
102	K	〃	〃	〃
103	K	6F 15S名	21、4、1 五島沖に於て米軍処分	20.11.30
104	K	6F 16S名	20、10 清水附近に於て米軍処分	20.9.15
105	K	6F 15S名	21、4、1 五島沖に於て米軍処分	20.11.30

波106	K	呉鎮 33S名	21、4、1 五島沖に於て米軍処分	20.11.30
107	K	〃	〃	〃
108	K	〃	〃	〃
109	K	GF 10SZ	〃	〃
111	K	〃	〃	〃
201	S	6F 52S名	〃	〃
202	S	〃	〃	〃
203	S	呉鎮 33S名	〃	〃
204	S	〃	解体（西村造船）	〃
205	S	6F 52S名	21、5 伊予灘に於て米軍処分	〃
207	S	〃	21、4、5 阿後岬の西方13浬附近に於て米軍処分	20.11.20
208	S	〃	21、4、1 五島沖に於て米軍処分	20.11.30
209	S	〃	解体（三菱下関）	20.11.20

波210	S	6F 525ヵ	21、4. 5 向後岬の西方13浬附近に於て米軍処分	20、10、20
216	S	(20、8、16竣工)	〃	20、11、30

（備　考）　※印の各艦は、各附記のとおり既に沈没又は消息不明であったが、終戦時在籍の侭であった。

第三篇

潜水艦に関する統計調書

備　　考

この調書は、左の記録資料に基き編纂したものである。

担当者　　高野事務官　（元海軍理事官）

1、海軍の軍備並びに戦備の全貌（第二復員局残務処理部調製）及びその基礎資料

2、潜水艦現勢一覧表（昭和二〇、8、1　海軍特兵部調製）

3、艦船役務一覧（海軍省軍務局台帳）

4、戦時編制改定記録

5、戦時編制表

6、潜水部隊指揮官一覧表（澁谷龍樓氏調）

7、現役海軍士官名簿及び奉職履歴書

以　　上

第三篇　潜水艦に関する統計調書

備　考

この調書は、左の記録資料に基き編纂したものである。

担当者　　高野事務官（元海軍理事官）

1　海軍の軍備並びに戦備の全貌（第二復員局残務処理部調製）及びその基礎資料

2　潜水艦現勢一覧表（昭和二〇、8、1海軍特兵部調製）

3　艦船役務一覧（海軍省軍務局台帳）

4　戦時編制改定記録

5　戦時編制表

6　潜水部隊指揮官一覧表（澁谷龍樓氏調）

7　現役海軍士官名簿及び奉職履歴書

以　　上

第一章　昭和6年度以降の潜水艦建造計画量の概要

第一節　潜水艦建造に関係のある昭和6年度以降の海軍々備補充（充実）計画の名称

①　第一次海軍々備補充計画（昭和6年度計画）
（ロンドン軍縮条約による制限内軍備補充）

②　第二次海軍々備補充計画（昭和9年度計画）
（ロンドン軍縮条約による制限内軍備補充）

③　昭和12年度海軍々備補充計画（昭和12年度計画）
（ワシントン、ロンドン両条約期限満了に伴う補充）

④　昭和14年度海軍々備充実計画（昭和14年度計画）
（米国の軍備拡充計画に対応する充実）

㊤　昭和15年度第二次追加計画（昭和16年度予算成立）
（米国の第三次ビンソン計画に対抗するための⑤計画実現までの過渡的計画）

㊦　昭和16年度戦時建造計画

（所定國策目的達成のための本備準備計画の実行）

㉔ 昭和16年度戦時建造追加計画
（⑤計画より繰上げ建造）

⑤ 昭和17年度艦船建造補充計画
（ミッドウェー海戦結果等による改訂⑤計画）

戦 昭和19年度戦時建造計画（昭和18、19年度計画）
（第三段戦備計画）

戦 昭和20年度戦時建造計画（昭和19年度追加計画）
（第三段戦備計画）

独 独国から譲渡受又は接収

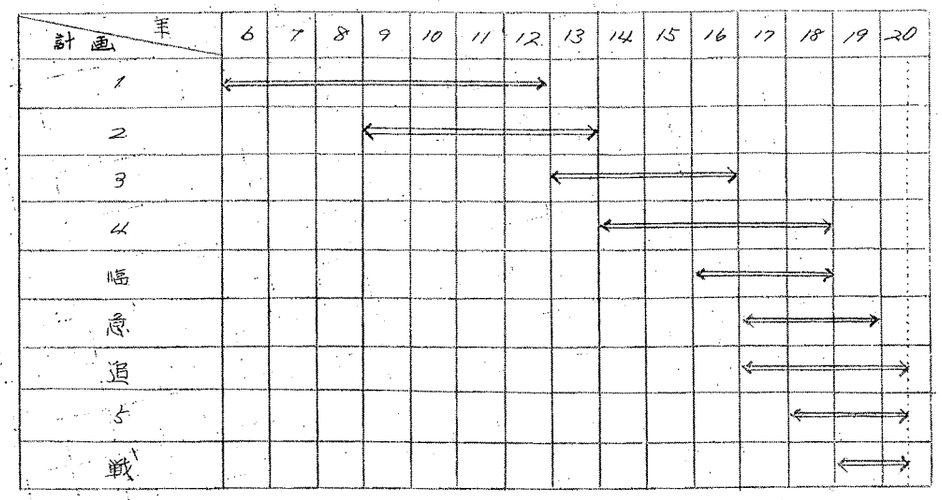
第二節 潜水艦の型の呼称

略称	艦型種	略称	艦型種
潜特	特型潜水艦	海大	海軍式大型潜水艦
潜甲	甲型潜水艦	潜高	水中高速潜水艦
潜乙	乙型潜水艦	潜補	補給潜水艦
潜丙	丙型潜水艦	中型	中型潜水艦
潜丁	丁型潜水艦	小型	小型潜水艦
潜戊	戊型潜水艦	潜輸	輸送潜水艦
巡潜	巡洋型潜水艦	潜㊦	小型高速潜水艦
機潜	機雷敷設潜水艦	独型	独逸潜水艦

第三節 各計画別の潜水艦建造隻数

計画別区分		特	甲	乙	丙	巡	機	海	高	補	丁	戊	中	小	輸	㊦	独	計
①	計画					1		6					2					9
	実行					1		6					2					9
②	計画		2					2										4
	実行		2					2										4
③	計画		2	7	5													14
	実行		2	6	5													13
④	計画		1	15				10										26
	実行		1	14				10										25
追	計画												9	9				18
	実行												9	9				18
㊁	計画			6	6								12	9				33
	実行			6	3								8	9				26
追	計画		2	12						3			15					32
	取止			4	2					1			14					21
	未完									4								1
	完成		2	3	3					1			1					10
⑤	計画	18	6	32	40						11		43					150
	取止着水	14	3	32	40								43					132
	未完	1	2															3
	完成	3	1								11							15
戦	計画								23		7	44			13	40		127
	取止着水								15		4	44			1	8		72
	未完								5		1				2	22		30
	完成								3		2				10	10		25
独	計画																8	8
	完成																8	8

第四節　各計画の潜水艦建造期間



第二章　潜水艦の大平洋戦争開始時保有並びに戦争中の増減

第一節　艦別別増減隻数屯数

艦型	開戦時保有		戦争中増		戦争中減		終戦時保有	
	隻数	屯数	隻数	屯数	隻数	屯数	隻数	屯数
潜特	0	0	3	10,290	0	0	3	10,290
潜甲	4	8,300	4	9,200	7	15,100	1	2400
潜乙	7	13,650	22	42,900	27	52,650	2	3,900
潜丙	5	10,900	6	12,840	9	19,460	2	4,280
潜巡	6	11,675	0	0	6	11,675	6	0
機雷潜	4	4,568	0	0	3	3,426	1	1,142
海大型	21	32,690	10	15,000	22	33,210	9	14480
潜高	0	0	3	3,000	0	0	3	3,000
潜補	0	0	1	2,650	1	2,650	0	0
潜丁	6	0	13	19,490	9	13,610	4	5,880
中型	17	14924	18	17,370	28	25,698	7	6,596

小型	0	0	18	7,722	18	7722	0	0
潜輸	0	0	10	3,700	0	0	10	3,700
潜小	0	0	10	3,200	0	0	10	3200
独型	0	0	8	10,400	1	700	7	9,700
計	64	96,707	126	157,762	131	185,901	59	68,568

第二節　年別増減隻数屯数

年	増		減		保有	
	隻数	屯数	隻数	屯数	隻数	屯数
開戦時					64	96,707
昭和14年(南戦後)	0	0	3	3611	61	93,096
昭和17年	20	28,774	17	24510	64	97360
昭和18年	37	42,840	23	34,060	78	106,140
昭和19年	39	55,158	59	84,356	58	76,442
昭和20年(終戦まで)	30	30,990	29	38,874	59	68,568
計	126	157,762	131	185,901		

第三節　原因別喪失（除籍）隻数

原因＼型別		甲	乙	丙	巡	機	海	補	丁	中	小	独	計
作戦	呂号	1		1	2		2			4	8		18
	伊一号		5	1			1			1			8
	玄		1	1					2				4
	その他	6	20	6	4	3	16	1	7	17	10	1	91
	計	7	26	9	6	3	19	1	9	22	18	1	121
事故沈没			1				2			2			5
老朽除籍							1			4			5
計		7	27	9	6	3	22	1	9	28	18	1	131

1節 艦別内訳

（備考）
- ○ 開戦時保有
- ◎ 開戦後増
- ※ 終戦時保有

	艦名	艦型	基準排水量	建造 計画	建造 建造所	建造 竣工年月日	本籍	喪失 年月日	喪失 場所(方面)	喪失 除籍年月日	記事
	伊1	巡	1,955		川	大 15,3,10	横	18,1,29	カミンボ	18,4,1	
	(11)	甲	2,400	⑤	〃	進水 19,6,10		〃	〃	〃	未完成
	2	巡	1,955		〃	大 15,7,24	横	19,5,4	ニューアイルランド	19,6,10	〃
	3	〃	〃		〃	大 15,11,30	〃	17,12,9	カミンボ	18,1,20	
	4	〃	〃		〃	4,12,24	〃	18,1,5	ガダルカナル	18,3,1	
	5	〃	〃		〃	7,7,31	〃	17,7,19	サイパン	19,9,10	
○	6	〃	1,900	①	〃	10,5,15	〃	19,6,30	〃	〃	
○	7	甲	1,950	②	呉	12,3,31	〃	18,6,23	キスカ	18,8,1	
○	8	〃	〃	〃	川	13,12,5	〃	20,4,15	沖縄	20,8,10	
○	9	〃	2,200	③	呉	16,2,13	〃	18,6,15	キスカ	18,8,1	
○	10	〃	〃	〃	川	16,10,31	佐	18,7,7	サイパン	17,10,10	
◎	11	〃	〃	④	〃	17,5,31	呉	19,3,20	モリス諸島	19,4,30	
◎	12	〃	〃	追	〃	19,5,25	横	20,1,31	中部太平洋	20,8,10	
◎	13	〃	2,200	〃	〃	19,12,16	佐	20,8,1	〃	20,9,15	
※◎	14	〃	〃	⑤	〃	20,3,14	横	＼	＼	〃	
○	15	乙	1,950	③	呉	15,9,30	〃	17,12,5	ガダルカナル	17,12,24	
	(15)	甲	2,400	⑤	川	進水 19,4,12		＼	＼	＼	未完成
○	16	丙	2,180	③	呉	15,3,30	横	19,6,25	ソロモン	19,10,10	
○	17	乙	1,950	〃	横	16,1,24	〃	18,10,24	濠洲	18,12,1	
○	18	丙	2,180	〃	佐	16,1,31	〃	18,2,11	ガダルカナル	18,4,1	
○	19	乙	1,950	〃	神	16,4,28	〃	19,2,2	ギルバート	19,4,30	
○	20	丙	2,180	〃	〃	15,9,25	〃	18,11,18	エスピリサント	18,12,1	
○	21	乙	1,950	〃	川	16,7,15	〃	18,11,24	ギルバート	19,4,30	
○	22	丙	2,180	③	川	16,3,10	横	17,11,12	ソロモン	17,12,15	
○	23	乙	1,950	〃	横	16,9,27	〃	17,2,28	ハワイ	17,4,30	
○	24	丙	2,180	〃	佐	16,10,31	〃	18,6,11	キスカ	18,8,1	
○	25	乙	1,950	〃	神	16,10,15	〃	18,10,24	フイジー	18,12,1	
○	26	〃	〃	④	呉	16,11,6	〃	19,11,21	比島	20,3,10	
◎	27	〃	〃	〃	佐	17,2,19	呉	19,5,15	印度洋	19,7,10	
◎	28	〃	〃	〃	神	17,2,6	〃	17,5,16	トラック	17,6,15	
◎	29	〃	〃	〃	横	17,2,24	〃	19,7,26	バシー海峡	19,10,10	
◎	30	〃	〃	〃	呉	17,2,28	〃	17,10,13	跡南	19,4,15	
◎	31	〃	〃	〃	横	17,5,30	〃	18,5,14	アッツ島	18,8,1	
◎	32	〃	〃	〃	佐	17,4,26	〃	19,3,24	マーシャル	19,6,10	
◎	33	〃	〃	〃	神	17,6,10	〃	19,6,13	瀬戸内	19,8,10	事故沈没
◎	34	〃	〃	〃	佐	17,8,31	〃	18,11,13	ペナン	19,1,5	
◎	35	〃	〃	〃	神	〃	〃	19,1,10	ギルバート	19,4,30	
◎	36	〃	〃	〃	横	17,9,30	〃	＼	＼	20,11,30	
◎	37	〃	〃	〃	呉	17,10,16	〃	19,12,6	パラオ	20,3,10	
◎	38	〃	〃	〃	佐	〃	〃	〃	比島	〃	
◎	39	〃	〃	〃	〃	17,11,22	横	19,2,20	ギルバート	19,4,30	
◎	40	〃	〃	④	呉	18,7,31	〃	19,2,21	〃	〃	
◎	41	〃	〃	〃	〃	18,7,15	〃	19,12,2	比島	20,3,10	
◎	42	〃	〃	〃	〃	18,11,3	〃	19,4,27	エバミラルティ島	19,4,30	
◎	43	〃	〃	〃	佐	18,11,5	〃	19,4,8	トラック	〃	
◎	44	〃	〃	〃	横	19,7,31	〃	20,5,2	沖縄	20,6,10	
◎	45	〃	〃	〃	佐	19,2,28	〃	19,11,21	比島	20,3,10	
◎	46	丙	2,180	〃	〃	19,2,29	〃	19,12,2	〃	〃	
◎	47	〃	〃	〃	〃	19,4,10	〃	＼	＼	20,11,30	
◎	48	〃	〃	〃	〃	19,9,5	〃	20,1,21	ウルシー	20,5,10	

	艦名	艦型	基準排水量	建造 計画	建造所	建造 竣工年月日	本籍	喪失 年月日	喪失 場所（方面）	喪失 除籍年月日	記事
	(49)	丙		急							建造取止
	(50)	〃		〃							〃
	(51)	〃		〃							〃
◎	52	〃	2,100	追	横	19.12.28	横	19.8.2	ビスカヤ湾	19.12.10	建造計画当初は乙
※◎	53	〃	〃	〃	呉	19.2.20	呉			20.11.30	〃
◎	54	乙	1,950	〃	横	19.3.31	〃	19.11.20	比島	20.3.10	
◎	55	丙	2,100	〃	呉	19.4.20	〃	19.7.15	サイパン	19.10.10	建造計画当初はろ
◎	56	乙	1,950	〃	横	19.6.8	〃	20.5.2	沖縄	20.6.10	
	(57)	丙		〃							建造計画当初はろ、建造取止
※◎	58	乙	1,950	〃	横	19.9.7	呉			20.11.30	
	(59)	丙		〃							建造計画当初はろ、建造取止
○	60	海	1,635		佐	5.12.24	佐	17.1.17	スンダ海峡	17.3.15	
	(61)	〃			神	5.4.6	〃	(16.10.2)	日本海	17.4.1	開戦時なし
	(62)	乙		追							建造取止
	(63)	海			佐	3.12.20	佐	(14.2.2)	豊後水道	(15.6.1)	開戦時なし
	(64)	乙		追							建造取止
	(65)	〃		〃							〃
	(66)	〃		〃							〃
	(67)	海			神	2.8.2	佐	(15.8.29)	大湊留守行方不明	(15.11.1)	開戦時なし
	(68)										17.5.20 伊168と改名
	(69)										17.5.20 伊169と改名
○	70	海	1,635	1	佐	10.11.9	呉	16.12.10	ハワイ	17.3.15	
	(71)										17.5.20 伊171と改名
	(72)										17.5.20 伊172と改名

	艦名	艦型	基準排水量	建造 計画	建造所	建造 竣工年月日	本籍	喪失 年月日	喪失 場所（方面）	喪失 除籍年月日	記事
○	73	海	1,635	1	川	12.1.7	呉	17.1.27	ハワイ	17.3.15	
※○	伊121	機	1,142		川	2.3.31	呉			20.11.30	
○	122	〃	〃		〃	2.10.28	〃	20.6.10	日本海	20.9.15	
○	123	〃	〃		〃	3.4.28	横	17.2.1	ガダルカナル島	17.10.5	
○	124	〃	〃		〃	3.12.10	〃	17.1.20	ポートモレスビー	17.4.30	
※○	伊151	海	1,400		呉	大14.5.20	舞			17.8.1	17.5.20 改名 老令除籍
※○	153	〃	1,635		〃	2.3.30	呉			20.11.20	17.5.20 改名
※○	154	〃	〃		佐	2.12.15	〃			〃	〃
※○	155	〃	〃		呉	2.9.5	〃			〃	〃
※○	156	〃	〃		〃	4.3.31	〃			20.11.30	〃
※○	157	〃	〃		〃	4.12.24	〃			〃	〃
※○	158	〃	〃		横	3.5.15	〃			〃	〃
※○	159	〃	〃		〃	5.3.31	〃			〃	〃
	(160)										改名前に除籍
	(161)										〃
※○	(162)	海	1,635		神	5.4.24	佐			20.11.30	17.5.20 改名
	(163)	〃	〃								改名前に除籍
○	164	〃	〃		呉	5.8.30	佐	17.5.25	南洋群島	17.7.10	17.5.20 改名
○	165	〃	〃		〃	7.12.1	〃	20.7.29	マリアナ	20.9.15	〃
○	166				佐	7.11.10	〃	19.7.17	マラッカ海峡	19.9.10	〃
	(167)	〃									改名前に除籍
○	168	海	1,400	1	呉	9.7.31	呉	18.9.10	ビスマーク諸島	18.10.15	
○	169	〃	〃	〃	神	10.9.28	〃	19.5.4	トラック	19.6.10	被空襲時事故沈没
	(170)			〃							改名前に除籍

	艦名	艦型	基準排水量	建造 計画	建造 造船所	建造 竣工年月日	本籍	喪失 年月日	喪失 場所(方面)	喪失 除籍年月日	記事
○	171	海	1,400	①	川	10.12.24	呉	19.3.12	ブカ	19.4.30	
○	172	〃	〃	〃	〃	12.1.7	〃	17.11.27	ガダルカナル島	17.12.15	
	(173)			〃							改名前に除籍
○	174	海	1,400	②	佐	13.8.15	呉	19.4.13	ギルバート	19.6.10	
○	175	〃	〃	〃	神	13.12.18	〃	19.3.26	ケゼリン	19.7.10	
◎	176	〃	1,500	④	呉	17.8.4	〃	19.6.11	ソロモン	19.7.10	
◎	177	〃	〃	〃	川	17.12.28	佐	19.11.18	パラオ	20.3.10	
◎	178	〃	〃	〃	神	17.12.26	〃	18.8.4	ソロモン	18.9.1	
◎	179	〃	〃	〃	川	18.6.18	〃	18.7.14	瀬戸内海	19.4.15	訓練中事故沈没
◎	180	〃	〃	〃	横	18.1.15	〃	19.3.20	コジャツフ	19.7.10	
◎	181	〃	〃	〃	呉	18.5.31	〃	19.3.1	ニューギニヤ	19.4.30	
◎	182	〃	〃	〃	横	18.5.24	〃	18.10.22	エスピリサント	19.12.1	
◎	183	〃	〃	〃	川	18.10.3	〃	19.5.28	中部太平洋	19.8.10	
◎	184	〃	〃	〃	横	18.10.15	〃	19.7.12	サイパン	〃	
◎	185	〃	〃	〃	〃	18.9.23	〃	〃	〃	〃	
※◎	伊201	高	1,000	(戦)	呉	20.2.2	呉			20.11.30	
※◎	202	〃	〃	〃	〃	20.2.14	〃			〃	
※◎	203	〃	〃	〃	〃	20.6.20	〃			〃	
	(204)	〃	〃	〃	〃	(未完成)					進水 19.12.16
	(205)	〃	〃	〃	〃	〃					〃 20.3.15
	(206)	〃	〃	〃	〃	〃					〃 20.3.26
	(207)	〃	〃	〃	〃	起立 19.12.27					工事中止
	(208)	〃	〃	〃	〃	起工 20.2.17					〃
	(自209 至212)	〃		〃							建造取止
◎	伊351	補	2,650	(追)	呉	20.1.28	呉	20.7.31	南支那海	20.9.15	

	艦名	艦型	基準排水量	建造 計画	建造 造船所	建造 竣工年月日	本籍	喪失 年月日	喪失 場所(方面)	喪失 除籍年月日	記事
	(352)	補	2,650	(追)	呉	進水 19.4.29					未完成
	(353)	〃		〃							建造取止
◎	伊361	丁	1,470	(5)	呉	19.5.25	横	20.6.25	沖縄	20.8.10	
◎	362	〃	〃	〃	神	〃	〃	20.3.15	カロリン	20.4.10	
※◎	363	〃	〃	〃	呉	19.7.8	〃			20.11.10	
◎	364	〃	〃	〃	神	19.6.14	〃	19.10.31	内南洋	19.12.10	
◎	365	〃	〃	〃	横	19.8.1	〃	19.12.10	小笠原	20.3.10	
※◎	366	〃	〃	〃	神	19.8.3	〃			20.11.30	
※◎	367	〃	〃	〃	〃	19.8.15	佐			〃	
◎	368	〃	〃	〃	横	19.8.25	〃	20.3.14	硫黄島	20.4.10	
※◎	369	〃	〃	〃	〃	19.10.9	〃			20.9.15	
◎	370	〃	〃	〃	神	19.9.4	〃	20.3.14	硫黄島	20.4.10	
◎	371	〃	〃	〃	〃	19.10.2	〃	20.3.12	トラック	〃	
◎	372	〃	1,660	(戦)	横	19.11.8	〃	20.7.18	横須賀	20.9.15	
◎	373	〃	〃	〃	〃	20.4.14	横	20.8.14	東支那海	〃	
	(374)	〃	〃	〃	〃	起工 19.10.24					工事中止
	(自375 至428)	〃		〃							建造取止
※◎	伊400	特	3,430	(5)	呉	19.12.30	呉			20.9.15	
※◎	401	〃	〃	〃	佐	20.1.8	〃			〃	
※◎	402	〃	〃	〃	〃	20.7.24				20.11.30	
	(403)	〃		〃							建造中止
	(404)	〃	3,430	〃	呉	(未完成)					進水 19.7.7
	(自405 至412)	〃	〃	〃	川	起工 19.9.27					造造中止405の他は起工せず
※◎	伊501	独	1,500		独	輸入 20.7.15	呉			20.11.30	U181ドイツ降伏により接収 以下同

	艦名	艦型	基準排水量	建造 計画	建造 造所	建造 竣工年月日	本籍	喪失 年月日	喪失 場所(方面)	喪失 除籍年月日	記事
※◎	502	独	1800		独	編入 20.7.15	呉			20.11.30	U 862
※◎	503	〃	〃		〃	〃	〃			〃	UIT-24(元伊 Cappellini号)
※◎	504	〃	〃		〃	〃	〃			〃	UIT-25(元伊 Torrell号)
※◎	505	〃	〃		〃	〃	〃			〃	U 219
※◎	506	〃	〃		〃	〃	〃			〃	U 195
○	呂30	中	655			大13.4.29	呉			17.4.1	走令除籍
○	31	〃	〃			〃 5.10	佐			20.5.25	〃
○	32	〃	〃			大13.5.31	呉			17.4.1	〃
○	33	〃	700	⑦	呉	10.10.7	舞	17.9.1	ポートモレスビー	17.10.5	
○	34	〃	〃	〃	神	12.5.31	〃	18.5.2	ソロモン	18.7.15	
◎	35	〃	985	臨	〃	18.3.25	〃	18.10.2	エスピリサント	18.12.1	
◎	36	〃	〃	〃	〃	18.5.27	〃	19.2.12	サイパン	19.8.10	
◎	37	〃	〃	〃	佐	18.6.30	〃	19.2.17	エスピリサント	19.4.30	
◎	38	〃	〃	〃	神	18.7.24	〃	19.1.2	ギルバート	〃	
◎	39	〃	〃	〃	〃	18.9.12	〃	19.3.5	ウオッゼ	〃	
◎	40	〃	〃	〃	〃	18.9.28	〃	19.3.28	ギルバート	〃	
◎	41	〃	〃	〃	〃	18.11.26	〃	20.4.15	沖縄	20.5.25	
◎	42	〃	〃	〃	佐	18.8.31	〃	19.7.12	サイパン	19.8.10	
◎	43	〃	〃	〃	神	18.12.16	〃	20.3.14	硫黄島	20.4.10	
◎	44	〃	〃	急	玉	18.9.13	〃	19.7.12	サイパン	19.8.10	
◎	45	〃	〃	〃	神	19.1.11	〃	19.5.20	トラック	19.7.10	
◎	46	〃	〃	〃	玉	19.2.19	〃	20.5.2	沖縄	20.6.10	
◎	47	〃	〃	〃	神	19.1.31	〃	19.11.2	パラオ	20.3.10	
◎	48	〃	〃	〃	〃	19.3.31	〃	19.7.15	サイパン	19.10.10	
◎	49	〃	〃	〃	玉	19.5.19	〃	20.4.15	沖縄	20.5.25	

	艦名	艦型	基準排水量	建造 計画	建造 造所	建造 竣工年月日	本籍	喪失 年月日	喪失 場所(方面)	喪失 除籍年月日	記事
※◎	50	中	965	急	玉	19.7.31	舞			20.11.30	
	(51)	〃		〃							建造取止
	(52)	〃		〃							〃
	(53)	〃		〃							〃
	(54)	〃		〃							〃
◎	55	〃	965	〃	玉	19.9.30	舞	20.3.1	比島	20.5.10	
◎	56	〃	〃	追	〃	19.11.15	〃	20.4.15	沖縄	20.5.25	
	(114艦)	〃		〃							建造取止
※○	呂57	中	889		神	大11.7.30	呉			20.11.20	
※○	58	〃	〃		〃	大11.11.25	〃			20.9.15	
※○	59	〃	〃		〃	大12.3.20	〃			20.11.20	
○	60	〃	988		〃	大12.9.17	佐	16.12.29	ケゼリン	17.1.15	
○	61	〃	〃		〃	大13.3.7	〃	17.9.1	トラック	17.10.20	
※○	62	〃	〃		〃	大13.7.25	舞			20.11.20	
※○	63	〃	〃		〃	大13.12.20	〃			〃	
○	64	〃	〃		〃	大14.4.30	〃	20.4.12	瀬戸内海	20.8.10	
○	65	〃	〃		〃	大13.6.30	佐	17.11.14	キスカ	18.8.1	航空要務事故沈没
○	66	〃	〃		〃	13.7.28	〃	16.12.17	ウェーキ	17.1.15	潜航比島突沈没
○	67	〃	〃		〃	大13.12.15	〃			20.2.20	走令除籍
※○	68	〃	〃		〃	大15.10.29	舞			20.11.30	
◎	呂100	小	429	臨	呉	17.9.23	横	18.11.25	ブーゲンビル	19.2.5	
◎	101	〃	〃	〃	川	17.10.31	〃	18.10.11	ソロモン	18.12.1	
◎	102	〃	〃	〃	〃	17.11.11	〃	18.6.2	ニューギニヤ	18.7.15	
◎	103	〃	〃	〃	〃	17.10.21	呉	18.8.10	ソロモン	18.11.1	
◎	104	〃	〃	〃	〃	18.2.25	〃	19.6.25	アドミラルティ	19.8.10	

	艦名	艦型	基準排水量	建造 計画	建造 建造所	建造 竣工年月日	本籍	喪失 年月日	喪失 場所(方面)	喪失 除籍年月日	記事
◎	105	小	427	㊱	川	18. 3.25	呉	19. 6.25	アドミラルティ	19. 8.10	
◎	106	〃	〃	〃	〃	17.12.26	佐	〃	〃	〃	
◎	107	〃	〃	〃	呉	17.12.16	〃	18. 8. 1	ソロモン	18. 9. 1	
◎	108	〃	〃	〃	川	18. 4.20	〃	19. 6.25	アドミラルティ	19. 8.10	
◎	109	〃	〃	㊙	〃	18. 4.30	〃	20. 5. 7	沖縄	20. 6.10	
◎	110	〃	〃	〃	〃	18. 7. 6	〃	19. 3.15	ベンガル湾	19. 4.30	
◎	111	〃	〃	〃	〃	18. 7.19	〃	19. 7.12	サイパン	19. 8.10	
◎	112	〃	〃	〃	〃	18. 9.14	呉	20. 2.20	比島	20. 5.10	
◎	113	〃	〃	〃	〃	18.10.12	〃	〃	〃	〃	
◎	114	〃	〃	〃	〃	18.11.12	〃	19. 7.12	サイパン	19. 8.10	
◎	呂115	〃	〃	〃	〃	18.11.30	横	20. 2.21	比島	20. 5.10	
◎	116	〃	〃	〃	〃	19. 1.21	〃	19. 6.25	アドミラルティ	19. 8.10	
◎	117	〃	〃	〃	〃	19. 1.31	〃	19. 7.12	サイパン	〃	
※◎	呂500	独	700		独	(購入 18. 9.16	呉			20. 11.30	ドイツから譲受(サツキ1号)
◎	501	〃	〃		〃	〃 19. 2.15	横	19. 8.26	大西洋	19. 10.10	〃(サツキ2号)
※◎	波101	輸	370	㊦	川	19. 11.22	呉			20. 9.15	
※◎	102	〃	〃	〃	〃	19 12. 6	〃			〃	
※◎	103	〃	〃	〃	〃	20. 2. 3	〃			20. 11. 30	
※◎	104	〃	〃	〃	神	19. 12. 1	〃			20. 9. 15	
※◎	105	〃	〃	〃	川	20. 2. 19	〃			20. 11. 30	
※◎	106	〃	〃	〃	神	19. 12. 15	〃			〃	
※◎	107	〃	〃	〃	〃	20. 2. 7	〃			〃	
※◎	108	〃	〃	〃	川	20. 5. 6	〃			〃	
※◎	109	〃	〃	〃	神	20. 3. 10	〃			〃	
	(110)	〃	〃	〃	川	進水 20. 1. 12					未完成

	艦名	艦型	基準排水量	建造 計画	建造 建造所	建造 竣工年月日	本籍	喪失 年月日	喪失 場所(方面)	喪失 除籍年月日	記事
※◎	111	輸	370	㊦	川	20 7.13	呉			20. 11. 30	
	(112)	〃	〃	〃	神	進水 20. 4. 15					未完成
	(113)	〃		〃							建造取止
※◎	波201	小	320	㊦	佐	20. 5. 31	佐			20. 11. 30	
※◎	202	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〃	
※◎	203	〃	〃	〃	〃	20. 6. 20	〃			〃	
※◎	204	〃	〃	〃	〃	20. 6. 25	〃			〃	
※◎	205	〃	〃	〃	〃	20. 7. 3	〃			20. 11. 20	
	(206)	〃	〃	〃	〃	進水 20. 7. 10					未完成
※◎	207	〃	〃	〃	〃	20. 8. 14	佐			20. 10. 20	
※◎	波208	㊦	〃	〃	〃	20. 8. 22	〃			20. 11. 30	
※◎	209	〃	〃	〃	〃	〃	〃			20. 11. 20	
※◎	210	〃	〃	〃	〃	20. 5. 11	佐			20. 10. 20	
	(211)	〃	〃	〃	川	進水 21. 4. 24	〃				未完成
	(212)	〃	〃	〃	〃	〃 20. 6. 25	〃				〃
	(213)	〃	〃	〃	神	〃 20. 7. 29					〃
	(214)	〃	〃	〃	〃	〃 20. 8. 15					〃
	(215)	〃	〃	〃	佐	〃 20. 6. 15					〃
※◎	216	〃	〃	〃	〃	20. 8. 16	佐			20. 11. 30	
	(自217 16艘)	〃	〃	〃	〃	進水 20. 6. 26					未完成
	218		〃		〃	〃 20. 7. 2					
	219		〃		〃	〃 20. 7. 12					
	220		〃		川	竣工 20. 3. 19					
	221		〃		〃	〃 20. 4. 20					
	222		〃		〃	〃 20. 3. 19					
	223		〃		〃	〃 20. 5. 1					

第11潜水隊

開戦時	17. 3. 4	18. 3. 15
伊 74 75	伊 174 175 176	解隊

第12潜水隊

開戦時	17. 1. 15	17. 3. 20	17. 12. 15	18. 3. 15	18. 8. 15
伊 68 69 70	伊 68 69	伊 68 69 71 72	伊 168 169 171	伊 168 169 171 174 175 176	伊 169 171 174 175 176
19. 4. 30	19. 6. 10	19. 7. 10			
伊 169 174 175 176	伊 175 176	解隊			

第13潜水隊

開戦時	17. 4. 10	17. 10. 5	18. 5. 31
伊 121 122	伊 121 122 123	伊 121 122	解隊

第14潜水隊

17. 2. 24	17. 3. 27	17. 5. 10	17. 6. 15	17. 11. 10	18. 4. 1
伊 27 28 (輸送)	伊 27 28 29	伊 27 28 29 30	伊 27 29 30	伊 27 29	伊 8 27 29
18. 5. 23	18. 5. 25	18. 7. 20	18. 9. 15	18. 11. 25	18. 12. 15
伊 8 27 29 37	伊 27 29 37	伊 27 29 37 39	伊 27 37 39	伊 27 37	解隊

艦名	艦種	進水量	竣工 計画	竣工 実際年月日	本籍	実	喪失 年月日	喪失 場所(方面)	喪失 原因	記事
234	〃	3220	神	20. 6. 6						
235	〃		〃	〃						
236	〃		〃	〃						
237	〃		〃	〃						
238	〃		佐	20. 7. 18						
239	〃		〃	〃						
330	〃		〃	20. 7. 3						
331	〃		〃	20. 7. 12						
332	〃		〃	20. 7. 18						
(八隻)	(小)		(戦)							木着手

第15潜水隊

17. 5. 30	17. 6. 10	17. 11. 10	17. 12. 15	18. 4. 1	18. 4. 30
(初編) 伊 31 32	伊 31 32 33	伊 31 32	伊 31 32 36	伊31 伊35 32 36 34	伊31 伊35 32 36 34 38
18. 8. 1	18. 9. 15	18. 12. 20	19. 1. 31	19. 2. 11	19. 3. 5
伊 32 34 35 36 38	伊 32 35 36 38	伊 32 35 36 38 41	伊32 伊42 35 36 38 41	伊32 伊42 35 43 36 38 41	伊16 伊41 32 42 35 43 36 38
19. 3. 25	19. 4. 28	19. 4. 30	19. 5. 19	19. 6. 10	19. 6. 20
伊16 伊41 32 42 35 43 36 45 38	伊16 伊41 32 42 35 43 36 44 38 45	伊16 伊44 32 45 36 38 41	伊16 伊44 32 45 36 43 38 41	伊16 伊45 36, 53 38 41, 44,	伊16 伊44 26 45 36 53 38 41
19. 7. 10	19. 8. 5	19. 9. 12	19. 9. 20	19. 9. 30	19. 10. 8
伊16 伊53 26 54 36 55 38 41 44 45	伊16 伊45 26 53 29 54 36 55 38 41 44	伊16 伊44 26 45 29 53 36 54 37 55 38 56 41	伊16 伊44 26 45 29 53 36 54 37 55 38 56 41	伊16 伊44 26 45 29 46 36 53 37 54 38 55 41 56	伊16 伊44 26 45 29 46 36 47 37 53 38 54 41 55 56
19. 10. 10	19. 12. 4	19. 12. 7	20. 3. 10	20. 3. 20	20. 4. 4
伊26 伊46 36 47 37 63 38 54 41 56 44 45	伊26 伊46 36 47 37 53 38 54 41 56 44 58 45	伊26 伊46 36 47 37 48 38 53 41 54 44 56 45 58	伊36 44 47 48 53 56 58	伊36 伊363 44 366 47 367 48 368 53 370 56 371 58 361 362	伊36 伊351 44 361 47 362 48 363 53 366 56 367 58 368 370 371
20. 4. 10.	20. 5. 10	20. 6. 10	20. 6. 20	20. 8. 10	20. 8. 15.
伊36 伊351 44 361 47 363 48 366 53 367 56 58	伊36 伊351 44 361 47 363 53 366 56 367 58	伊36 伊351 47 363 53 366 58 367	伊36 伊351 47 361 53 363 58 366 367 373	伊36 伊351 47 363 53 366 58 367 373	伊36 伊165 呂50 47 201 53 202 波103 58 351 105 156 363 157 366 158 373 159 162

20. 11. 30
解隊

第16潜水隊

20. 3. 20	20. 4. 15	20. 5. 17	20. 7. 1.	20. 8. 1	20 9. 15
(初編) 伊 369 372 波 101 102 104	伊 369 372 波 101 102 103 104	伊 369 372 波 101 102 103 104 105	伊 369 372 波 101 102 104	伊 369 波 101 102 104	解隊

第18潜水隊

開戦時	18. 8. 25	19. 1. 31.
伊 53 54 55	伊 121 122 153 154 155	解隊

第19潜水隊

開戦時	17. 4. 10	19. 1. 31	19. 7. 1.	19. 12. 15	20. 4. 1.
伊 56 57 58	伊 56 57 58 59	伊 121 122 155 156 157 158 159	伊 121 122 155 156 157 158 159 162	伊 121 122 155 156 157 158 159 162 165	伊 121 122 155 157 158 159
20. 4. 20					
解隊					

第20潜水隊

開戦時	17. 3. 10	17. 3. 20
伊 71 72	伊 71 72 73	解隊

第二一潜水隊

開戦時	17. 10. 1
呂 33 34	解隊

第二二潜水隊

18. 2. 25	18. 8. 10	18. 8. 20	18. 9. 1	18. 12. 1	18. 12. 20
(開戦初) 伊177 178 180	伊177 178 180 182	伊177 178 180 181 182	伊177 180 181 182	伊177 180 181	伊177 180 181 184
19. 1. 10	19. 4. 28	19. 4. 30	19. 7. 10	19. 8. 1	19. 8. 10
伊177 180 181 184 185	伊177 180 181 183 184 185	伊177 180 183 184 185	伊177 183 184 185	伊183 184 185	解隊

第二五潜水隊

開戦時	16. 12. 26	17. 4. 1
呂 30 31 32	呂 30 32	解隊

第二六潜水隊

開戦時	17. 1. 15	17. 2. 10	17. 10. 20	17. 11. 20	18. 12. 1
呂 60 61 62	呂 61 62	呂 61 62 65 67	呂 62 65 67	呂 62 67	解隊

第二七潜水隊

開戦時	17. 1. 15	17. 2. 10
呂 65 66 67	呂 65 67	解隊

水一一潜水隊

開戦時	17. 8. 4	18. 3. 15
伊 74 75	伊174 175 176	解隊

水一二潜水隊

開戦時	17. 1. 15	17. 3. 20	17. 12. 15	17. 12. 16	18. 8. 15
伊 68 69 70	伊 68 69	伊 68 69 71 72	伊 168 169 171	伊 168 169 171 174 175 176	伊 169 171 174 175 176
19. 4. 30	19. 6. 10	19. 7. 10	解隊		
伊 169 174 175 176	伊 175 176	解隊			

水一三潜水隊

開戦時	17. 4. 16	17. 10. 5	18. 2. 15
伊 121 122	伊 121 122 123	伊 121 122	解隊

水一四潜水隊

17. 2. 24	17. 5. 27	17. 8. 16	17. 6. 15	17. 11. 10	18. 4. 1
(初編) 伊27 28	伊27 28 29	伊27 28 29 30	伊27 29 30	伊27 29	伊8 27 29
18. 6. 23	18. 6. 25	18. 7. 20	18. 9. 15	18. 11. 25	18. 12. 15
伊8 27 29 37	伊27 29 37	伊27 29 37 39	伊27 37 39	伊27 37	解隊

第15潜水隊

17. 5. 30	17. 6. 10	17. 11. 10	17. 12. 15	18. 4. 1	18. 4. 30
(初編) 伊 31 32	伊 31 32 33	伊 31 32	伊 31 32 36	伊31 伊35 32 36 34	伊31 伊35 32 36 34 38
18. 8. 1	18. 9. 15	18. 12. 20	19. 1. 31	19. 2. 11	19. 3. 5
伊 32 34 35 36 38	伊 32 35 36 38	伊 32 35 36 38 41	伊32 伊42 35 36 38 41	伊32 伊42 35 43 36 38 41	伊16 伊41 32 42 35 43 36 38
19. 3. 25	19. 4. 28	19. 4. 30	19. 5. 19	19. 6. 10	19. 6. 20
伊16 伊41 32 42 35 43 36 45 38	伊16 伊41 32 42 35 43 36 44 38 45	伊16 伊44 32 45 36 38 41	伊16 伊44 32 45 36 43 38 41	伊16 伊45 36, 53 38, 41, 44,	伊16 伊44 26 45 36 53 38 41
19. 7. 10	19. 8. 5	19. 9. 12	19. 9. 20	19. 9. 30	19. 10. 8
伊16 伊53 26 54 36 55 38 41 44 45	伊16 伊45 26 53 29 54 36 55 38 41 44	伊16 伊44 26 45 29 53 36 54 37 55 38 41	伊16 伊44 26 45 29 53 36 54 37 55 38 56 41	伊16 伊44 26 45 29 46 36 53 37 54 38 55 41 56	伊16 伊44 26 45 29 46 36 47 37 53 38 54 41 55 56
19. 10. 10	19. 12. 4	19. 12. 7	20. 3. 10	20. 3. 20	20. 4. 4
伊 26 伊46 36 47 37 53 38 54 41 56 44 45	伊26 伊46 36 47 37 53 38 54 41 56 44 58 45	伊26 伊46 36 47 37 48 38 53 41 54 44 56 45 58	伊36 44 47 48 53 56 58	伊 36 伊363 44 366 47 367 48 368 53 ⇒70 56 371 58 361 362	伊 36 伊351 44 361 47 362 48 363 53 366 56 367 58 368 370 371
20. 4. 10.	20. 5. 10.	20. 6. 10	20. 6. 20	20. 8. 10	20. 8. 15.
伊 36 伊351 44 361 47 363 48 366 53 367 56 58	伊 36 伊351 44 361 47 363 53 366 56 367 58	伊 36 伊351 47 363 53 366 58 367	伊 36 伊351 47 361 53 363 58 366 367 373	伊 36 伊351 47 363 53 366 58 367 373	伊 36 伊165 呂50 47 201 53 202 波103 58 351 105 156 363 157 366 158 373 159 162

20, 11, 30
解 隊

第16潜水隊

20, 3, 20	20, 4, 15	20, 5, 17	20, 7, 1.	20, 8, 1	20 9, 15
(初編) 伊 369 372 波 101 102 104	伊 369 372 波 101 102 103 104	伊 369 372 波 101 102 103 104 105	伊 369 372 波 101 102 104	伊 369 波 101 102 104	解 隊

第18潜水隊

開戦時	18. 8, 25	19. 1. 31.
伊 53 54 55	伊 121 122 153 154 155	解 隊

第19潜水隊

開戦時	17. 4. 10	19. 1. 31	19, 7, 1.	19, 12, 15	20, 4. 1
伊 56 57 58	伊 56 57 58 59	伊 121 122 155 156 157 158 159	伊 121 122 155 156 157 158 159 162	伊 121 122 155 156 157 158 159 162 165	伊 121 122 155 157 158 159

20. 4. 20
解 隊

第20潜水隊

開戦時	17. 3. 10	17. 3. 20
伊 71 72	伊 71 72 73	解 隊

第21潜水隊

開戦時	17. 10. 5
号 33 34	解隊

第22潜水隊

18. 2. 25	18. 8. 10	18. 8. 20	18. 9. 1	18. 12. 1	18. 12. 20
(初編) 伊177 178 180	伊177 178 180 182	伊177 178 180 181 182	伊177 180 181 182	伊177 180 181	伊177 180 181 184
19. 1. 31	19. 4. 28	19. 4. 30	19. 7. 10	19. 8. 1	19. 8. 10
伊177 180 181 184 185	伊177 180 181 183 184 185	伊177 180 183 184 185	伊177 183 184 185	伊183 184 185	解隊

第25潜水隊

開戦時	16. 12. 26	17. 4. 1
呂 30 31 32	呂 30 32	解隊

第26潜水隊

開戦時	17. 1. 15	17. 2. 10	17. 10. 20	17. 11. 20	18. 12. 1
呂 60 61 62	呂 61 62	呂 61 62 65 67	呂 62 65 67	呂 62 67	解隊

第27潜水隊

開戦時	17. 1. 15	17. 2. 10
呂 65 66 67	呂 65 67	解隊

第28潜水隊

開戦時	17. 3. 10	17. 4. 10
伊 59 60	伊 57 60	解隊

第29潜水隊

開戦時	17. 3. 10
伊 62 64	解隊

第30潜水隊

開戦時	17. 3. 10	17. 4. 10	17. 7. 14	18. 10. 31	18. 11. 10
伊 65 66	伊 64 65 66	伊 62 64 65 66	伊 162 165 166	伊 162 165 166 呂 111	伊 162 165 166 呂 110 111
18. 12. 25	19. 1. 31	19. 2. 20	19. 3. 20	19. 3. 25	
伊 162 165 166 呂 110 111 112	伊 162 165 166 呂 110 111 112 113	伊 162 呂 110 165 111 166 112 113 114	伊 162 165 166 呂 113 114	解隊	

第33潜水隊

開戦時	18. 12. 1	19. 5. 19	19. 5. 20	19. 7. 1	19. 8. 15
呂 63 64 68	呂 62 63 64 67 68	呂 49 62 63 64 67 68	呂 49 62 63 64 67 68	呂 49 62 63 64 67 68	呂 62 63 64 67
19. 9. 25	19. 10. 10	19. 10. 20	20. 2. 2	20. 2. 14	20. 3. 10
呂 62 109 63 112 64 67	呂 63 64 67 109 112	呂 63 64 67	伊 201 呂 63 64 67	伊 201 203 呂 63 64 67	伊 201 波 206 202 呂 63 64 67

20. 3. 20	20. 4. 10	20. 4. 12	20. 4. 15	20. 4. 20	20. 5. 6
伊201 波106 202 107 呂63 64 67	伊201 波106 107 呂63 64 67	伊201 波106 呂62 107 63 64 67	呂62 波106 63 107 64 67	伊121 呂64 122 67 155 呂62 波106 63 107	伊121 呂44 122 67 155 波106 呂62 107 63 108
20. 5. 31	20. 6. 20	20. 6. 25	20. 7. 20	20. 8. 10	20. 9. 15
波106 伊121 107 122 108 155 201 呂62 202 63 64 67	波106 伊121 107 122 108 155 201 呂62 202 63 203 64 67	波106 伊121 107 122 108 155 201 呂62 202 63 203 64 204 67	波106 伊121 107 122 108 呂62 203 63 204 64	波106 伊121 107 122 108 203 呂62 204 63	解隊

第34潜水隊

18. 10. 31	18. 11. 30	18. 12. 1	18. 12. 25	19. 1. 15	19. 3. 5
(初編) 呂35 36 37 38	呂35 36 37 38 42	呂36 37 38 42	呂36 44 37 38 39 42	呂36 42 37 44 38 39 40	呂36 41 37 42 38 44 39 40
19. 3. 10	19. 4. 15	19. 4. 30	19. 5. 14	19. 6. 23	19. 7. 5
呂36 41 37 42 38 43 39 44 40	呂36 41 37 42 38 43 39 44 40 45	呂36 45 41 42 43 44	呂36 45 41 47 42 43 44	呂36 45 41 46 42 47 43 44	呂36 46 41 47 42 48 44 45
19. 7. 10	19. 8. 1	19. 8. 10	19. 10. 10	19. 10. 20	19. 11. 5
呂36 46 41 47 42 48 43 44	呂36 46 41 47 42 48 43 44 伊177	呂41 伊177 43 46 47 48	呂41 伊177 43 46 47	呂41 112 43 46 伊177 47 109	呂41 109 43 112 46 47 伊177 50
19. 11. 10	20. 1. 4	20. 2. 10	20. 2. 20	20. 3 10	20. 4. 1
伊177 呂41 43 46 47 49 50 109 112	伊177 呂41 43 46 47 49 50 55 109 112	伊177 呂41 43 46 47 49 50 55 56 109 112	伊177 呂109 112 呂41 113 43 115 46 47 49 50 55 56	呂41 呂109 43 112 46 113 49 115 50 55 56	呂55 呂41 56 43 109 46 112 49 113 50 115 伊156 162 165

20. 4. 10	20. 4. 20	20. 5. 10	20. 5. 25	20. 6. 10	20. 6. 15
伊156 呂56 162 109 165 112 113 呂41 115 46 49 50 55	伊156 呂47 157 50 158 55 159 56 162 109 165 112 113 呂41 115 46	伊156 呂41 157 46 158 49 159 50 162 56 165 109	伊156 呂46 157 50 158 109 159 162 165	伊156 呂50 157 158 159 162 165	伊156 呂50 157 158 159 162 165 201
20. 7. 1	20. 8. 15				
伊156 呂50 157 158 波103 159 105 162 165 201	解隊				

第51潜水隊

18. 8. 20	18. 9. 1	18. 11. 1	18. 12. 1	19. 2. 5	19. 3. 10
(初編) 呂100 101 103 104 105 106	呂100 101 103 104 105 106 108 109	呂100 101 104 105 106 108 109	呂103 104 105 106 108 109	呂104 105 106 108 109	呂104 105 106 108 109 115
19. 3. 20	19. 3. 25	19. 4. 30	19. 5. 4.	19. 5. 14	19. 8. 10
呂104 105 106 108 109 110 111 112	呂104 105 108 109 110 111 112 113 114 115	呂104 105 106 108 109 111 112 113 114 115	呂104 105 106 108 109 111 112 113 114 115 116	呂104 呂117 105 106 108 109 111 112 113 114 115 116	呂109 112 113 115
19. 8. 15					
解隊					

第52潜水隊

20. 7. 20	20, 9. 4	20. 8. 11	20 8. 14	20. 9. 15	20, 11, 20
(初編) 波201 202 205	波 201 202 205 208 209	波 201 202 205 208 209 210	波 201 202 205 207 208 209 210	波 201 202 205 208 209	波 201 202 208
20. 11. 20					
解隊					

第四章　太平洋戦争中の潜水部隊指揮官

編考　開戦時欄の○印は開戦前に任命されたことを示す。
終戦時欄の○印は終戦時存任を示す。

開戦時	17年	18年	19年	20年	終戦時	階級	氏名	記事

第六艦隊司令長官

○	3.16					中将	清水 光美	
	〃	6.21				〃	小松 輝久	
		〃	7.10			〃	高木 武雄	
			〃	5.1		〃	三輪 茂義	
				〃	○	〃	醍醐 忠義	

第六艦隊参謀長

○	10,22					少将	三戸 寿	
	〃	11,15				〃	毎本 久五郎	
		〃	12,21			〃	仁科 宏造	
			〃		○	〃	佐々木 半九	

第六艦隊先任参謀

○	9.28					中佐	松村 翠	
	〃	12.10				〃	高橋 長十郎	
		〃	1.15			〃	渋谷 龍輝	
			〃	2.8		〃	堀之内 美義	
			〃	3.7		少佐	鳥巣 健之助	
			〃		○	大佐	井浦 詳二郎	

第1潜水戦隊司令官

○	4.15					少将	佐藤 勉	
	〃 10.22					〃	山崎 重暉	
	〃	3.29				〃	三戸 一寿	
		〃	1.15			〃	古宇田 武郎	19.1.15解隊

第1潜水戦隊先任参謀

○	9.4					中佐	小世 伊選	
	〃	9.18				〃	渋谷 龍輝	
		〃	1.15			〃	須田 稔	19.1.15解隊

第2潜水戦隊司令官

○	2.5					少将	山崎 重暉	
	8.20					〃	市岡 寿	19.8.20解隊

第2潜水戦隊先任参謀

○	8.1					中佐	丸山 静三	
	8.20					〃	渋谷 龍輝	19.8.20解隊

第3潜水戦隊司令官

○	4.26					少将	三輪 茂義	

	4.26 12.5	〃				少将	河野 千万城	
	〃	9.15				〃	駒沢 克己	18.9.15解隊

第3潜水戦隊先任参謀

○	3.5					中佐	井浦 詳二郎	
	11.13					少佐	泉 雅爾	
	〃	9.15				中佐	池沢 政幸	18.9.15解隊

第4潜水戦隊司令官

○	3.10					少将	吉富 説三	17.3.10解隊

第4潜水戦隊先任参謀

○	3.10					中佐	堤 道三	17.3.10解隊

第5潜水戦隊司令官

○	7.10					少将	醍醐 忠重	17.7.10解隊

第5潜水戦隊先任参謀

○	1.20					中佐	高橋 長十郎	
	〃 7.10					〃	波谷 龍輝	17.7.10解隊

第6潜水戦隊司令官

○	4.10					少将	河野 千萬城	17.4.10.解隊

第6潜水戦隊先任参謀

○	4.10					中佐	大平 政二郎	17.4.10解隊

第7潜水戦隊司令官

○	6.5					少将	大西 新蔵	
	〃	1.12				〃	吉富 説三	

		1.12 12.4				少将	原田 寛	
		〃		3.20		〃	大和田 昇	20.3.20解隊

第7潜水戦隊先任参謀

○	4.6					中佐	小野 良二郎	
	〃	1.25				〃	高塚 忠夫	
		〃	1.15			〃	堀之内 美義	
			〃 2.25			〃	泉 雅爾	自19.2.25 至19.9.4 欠員
			9.6	3.20		〃	関戸 好蜜	20.3.20解隊

第8潜水潜隊司令官

	3.10	8.19				大佐	石崎 昇	17.3.10編成
		〃	8.24			少将	市岡 寿	
			〃	2.20		〃	魚住 治作	20.2.20解隊

第8潜水戦隊先任参謀

	3.10	11.16				中佐	有泉 龍之助	17.3.10.編成
		〃	8.7			〃	井浦 詳二郎	
			〃	2.20		〃	丸山 鏡三	20.2.20解隊

第11潜水戦隊司令官

		4.1 10.20				少将	醍醐 忠重	18.4.1編成
		〃	12.21			〃	石崎 昇	
			〃		○	〃	仁科 広造	

第11潜水戦隊先任参謀

		4.1 12.1				少佐	橋本 勝一	18.4.1編成
		〃	1.15			中佐	有泉 龍之助	
			〃 10.1			大佐	内野 信二	
			〃		○	〃	原田 稔	

呉潜水戦隊司令官

	9.1	4.1				少将	醍醐 忠重	17.9.1 編成 18.4.1 解隊
		12.1	8.23			〃	山崎 重暉	18.12.1 再編成
			〃	5.1		〃	醍醐 忠重	
				〃	○	〃	市岡 寿	

呉潜水戦隊先任参謀

	9.1	4.7				少佐	高橋 勝一	17.9.1 編成 18.4.1 解隊
		12.1	10.1			中佐	井内 四郎	18.12.1 再編成
			〃	7.5		大佐	内野 信二	自20.7.5 至20.7.14 欠員
				7.15	○	〃	内野 信二	

第1潜水隊司令

○	2.1					大佐	今里 博	
	〃 8.26					〃	今和泉嘉次郎	
	〃	2.11				〃	太田 信之輔	18.2.11 戦死 18.3.27 欠員 18.7.25 解隊
		3.24 9.25				〃	岩上 英寿	
			(12.30)	1.1	○	〃	有泉 龍之助	19.12.30 再編成 (20.1.1 発令)

第2潜水隊司令

○	2.1					大佐	今和泉嘉次郎	
	〃 7.14					〃	今里 博	
	〃	1.10				〃	小野良二郎	
		〃 7.20				〃	水口 兵卫	
		〃 9.25				〃	宮崎 武治	
		〃	2.2 (4.30)			〃	岩上 英寿	19.2.2 戦死後欠員 19.4.30 解隊

第3潜水隊司令

○	12.15					大佐	佐々木 半九	17.12.15 解隊

第4潜水隊司令

○	4.5					大佐	小田 房清	
	5.10					〃	長井 満	17.8.10 解隊

第6潜水隊司令

○	6.20					大佐	岡本 頼助	
	〃 7.31					〃	加藤良之助	
	〃	9.1				〃	橋原 省吾	
		〃		5.1		〃	七宇 恒雄	20.5.1 解隊

第7潜水隊司令

○	5.1					大佐	島本久五郎	
	〃	6.21				〃	玉木留次郎	18.6.21 戦死 18.6.30 送次員
		7.1 12.5				〃	岡田 有作	自18.12.5 至19.4.30 欠員
		5.1 7.19 (9.10)				〃	橋原 省吾	19.7.19 戦死以後欠員 19.9.10 解隊

第8潜水隊司令

○	8.20					大佐	竹崎 馨	17.8.20 解隊

第9潜水隊司令

○	1.20 (2.28)					大佐	遠藤 敬男	17.1.20 戦死後欠員, 17.2.25 解隊

第11潜隊司令

○	11.25					大佐	水口 兵衛	
	〃	3.15				〃	岩上 英寿	19.3.15 解隊

第12潜水隊司令

○	7.1					大佐	中瀬 [illegible]	

	7.1 11.27					大佐	岡本 義助	17.11.27 戦死 17.12.27 定員
	12.28		2.1			〃	小林 一	
			7.10			〃	楠原 省吾	19.7.10 解隊

第一三潜水隊司令

○	10.5					大佐	宮崎 武治	
	〃	5.31				〃	藤本 伝	18.5.31 解隊

第一四潜水隊司令

	2.24	ヨコ				大佐	勝田 治夫	17.2.24 編成
		〃 12.15				〃	寺岡 正雄	18.12.15 解隊

第一五潜水隊司令

	5.30	大湊				大佐	貴島 盛次	17.5.30 編成
		〃 12.17				〃	長井 武夫	
		〃	3.25			〃	岡田 有作	
		〃	7.27			〃	高橋 長十郎	
			〃		○	〃	楊田 清猪	

第一六潜水隊司令

				7.20	○	大佐	今和泉喜次郎	20.3.30 編成

第一八潜水隊司令

	5.30					大佐	貴島 盛次	
	〃		1.31			〃	浜野 元一	19.1.31 解隊

第一九潜水隊司令

○	5.7					大佐	太田 信之輔	
	7.14					〃	小野 良二郎	

	7.14 7.31					大佐	浜野 元一	
	〃	2.25				〃	西野 耕三	
		〃	1.31			〃	柏原 保親	
			〃 7.20			〃	浜野 元一	
			〃	2.25		〃	藤本 伝	
				〃 4.20		〃	小原 麒一	20.4.20 解隊

第二〇潜水隊司令

○	1.27 (3.20)					大佐	大竹 寿雄	17.1.27 戦死以 后欠員 17.3.20 解隊

第二一潜水隊司令

○	8.20					大佐	岩上 英寿	
	〃 10.5					〃	藤本 伝	17.10.5 解隊

第二二潜水隊司令

		2.25 11.5				大佐	西野 耕三	18.2.25 編成
		〃	1.31			〃	前島 秀英	
			〃 7.12 (8.10)			〃	柏原 保親	19.7.12 戦死以后 欠員 19.8.10 解隊

第二五潜水隊司令

○	(4.1)						(回予備)	17.4.1 解隊

第二六潜水隊司令

○	10.15					大佐	松尾 義保	
	〃 12.28					〃	小林 一	
	〃	1.10				中佐	楠原 省吾	
		〃 12.1				大佐	浜野 元一	18.12.1 解隊

第二ノ潜水隊司令

○ 12.11.7	(2.10)					大佐	深谷 惣吉	16.12.17 戦死以后欠員17.2.10解隊

第二七潜水隊司令

○	12.11.7 (14.10)					大佐	加藤 行雄	17.11.7 戦死以后欠員17.2.10解隊

第二九潜水隊司令

○	3.10					大佐	玉木 留次郎	17.3.10解隊

第三〇潜水隊司令

○		11.6				大佐	寺岡 正雄	
		〃	11.7			〃	大山 豊次郎	
			〃 3.25			〃	高橋 長十郎	19.3.25解隊

第三三潜水隊司令

○	11.13					大佐	長井 武夫	
	11.11	12.1				〃	加藤 良之助	
		〃	1.20			〃	植原 治吾	
			〃	3.15		〃	大谷 清敬	
				〃 4.20		〃	安久 栄太郎	
				4.20	○	〃	小泉 顕一	

第三四潜水隊司令

		(10.31) 12.31	3.5			大佐	清水 太郎	18.10.31 編成 18.12.30 定欠員 19.3.5 戦死
			4.7 7.12			〃	山田 隆	19.4.6 定欠員 19.7.12 戦死
			4.12 11.18			〃	松村 寛治	19.9.11 定欠員 19.11.18 戦死
				2.5 4.1		〃	湯田 清猪	19.2.4 定欠員
				〃	○	中佐	田上 明治	

第五一潜水隊司令

		(5.20) 7.1	6.5			大佐	加藤 良之助	18.5.20 編成 18.8.31 定欠員
			〃 8.15			〃	湯田 清猪	19.8.15 解隊

第五二潜水隊司令

				7.20	○	大佐	横田 稔	20.7.20 編成

編さん記録

昭和25年2月調製

第二復員局残務処理部